
インフィニット・ストラトス 鏡映しのイレギュラー

横山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 鏡映しのイレギュラー

【Zコード】

Z9517U

【作者名】

横山

【あらすじ】

女性専用の機動兵器ISが誕生してから数年。女性優位の社会へと変貌する中で、男にして唯一ISを起動した織斑一夏が表舞台に立つた。それから数ヶ月、ISを起動できる一人目の男、井ノ上誠が織斑一夏に続いてIS学園へと編入した。一夏や他の生徒たちと次第に親しくなる誠だが、ISという超兵器の水面下で起こっているとしている異変に気付く。

プロローグ（前書き）

おそらくプロローグだけ読むと「作品間違えた」とか思われそうなので、一応の注意だけ。間違つてはいません。本編からエリックなる……はずです。

プロローグ

カイル・ノーマッドの物語はアメリカの有する大都市の一つ、ラスベガスから始まった。都市そのものが巨大なカジノで出来ている。ようなここは、昼夜を問わずネオンの眩しい光と活気に満ちている。いや、夜である現時刻こそその本性が現れ、もっとも騒がしくなつていた。人々が群るのは、何もギャンブルだけではないのだから。街の至るところで行われる、売春婦たちの誘惑と、より危険なドラッグの密売。神が実在するならば間違いなく鉄槌を受けるであろう、しかし今のところそんな予兆は微塵も無い都市には、夜空をかき消す人工の光と同等あるいはそれ以上の数におよぶ危険が潜んでいる。もつとも、カイル・ノーマッドにとつてはその危険も存在しないものと同じで、別段に興味も無い。隙を見せれば途端につけ込まれる誘惑は、逆にいえば隙を見せなければ意味を成さないのだ。それは隙を見せないのでなく、隙どころか完全に意氣消失した男にとつても同じこと。

都市の中心部、カイル・ノーマッドは自分の車に乗り込んだまばほんやりと周囲を眺め、すでに一杯の灰皿へさらにもう一本を握り込む。指先が助手席を探り、また新たな一本を口元へ運ぶ。ジッパーを取り出し火をつけるまで、ほんの少しの停滞すら無い。もはや習慣となつた喫煙が作る、流動的な動作。対して、煙を吸い込むカイル・ノーマッドのほうは、まるで麻薬（もちろんニコチンもそれに含まれるが）をキメたように虚ろだった。

ほんの少し開けた窓より溢れる煙。そして外界の喧騒。届く音色はヘヴィメタルであり、テクノであり、ポップミュージックであり、狂気に当てられたデスボイスだ。もともと、こんなところに用事などなかつた。休暇を利用した旅行、といえば聞こえは良いものの、ギャンブルに興味は無い。むしろ嫌悪を抱く。ではなぜ来たのか、とカイル・ノーマッドは自問し、だが答えは出ない。わからないま

ま、彼はアクセルを踏み込んで車道に戻る。

目指す場所などどこにも無い。そもそも、目的が存在しないのだから。ただ気ままに、いつそ強盗が自分を襲ってくれないかと馬鹿な願望を抱きつつ、目に悪い光の下を気ままに走った。

時間にしておよそ数十分のことである。どういった街にでもある、郊外の酒場へカイル・ノーマッドの車は止まっていた。エンジンは止まり、鍵はかけられ、持ち主である彼は酒場のカウンター席、その一番奥へ腰掛けている。しゃがれた声を出す、皺だらけのいかつい顔のバー・テンダーに注文を述べ、老人の不機嫌そうな顔と共に差し出されたウイスキーを飲み干す。立て続けに五杯。頭がぼんやりとし、地震でも起きたように体が揺れる錯覚を覚えた。

「もう一杯くれ」

六杯目となると、さすがに老人も躊躇いを見せた。それはカイル・ノーマッドの体調でなく、その財布を心配する様子だ。この飲んだくれは、本当に金をもっているのか。もしかすると飲むだけ飲んで酔っぱらい、暴れた後に車で逃げるのではないか、と。何か言おうとした老人に、カイル・ノーマッドは鋭い視線を送つて繰り返した。

「もう一杯くれ」

ややして、しぶしぶといった風に六杯目のグラスが置かれた。それが利口だろう。不確かな予測で無用なトラブルを買うより、大人しく従つて気の済むようにさせるべきだ。支払いさえ無事ならそれでいい。それに老人の味方もいた。店内にいる客は、カイル・ノーマッドを除いて六名の男たち。彼らはこここの常連で、大柄な体躯をした海兵隊員であった。何度か話もしたことがあり、見かけは粗雑だが信用は置ける。自他共に認めるタフガイが六人。いざとなったら、彼らがカイル・ノーマッドに支払いをさせてくれるだろう。そういう機会は実際、過去に何度かあつたのだ。

不意に店のドアが開いた。新たな来客である。老人と六名がそちらに目を向けるが、カイル・ノーマッドは自分のグラスへ集中して

いた。その人物が隣へ腰掛けても、まったく気付かなかつたのだから。

「一番安いバー・ボンを」

声が発せられて初めて、カイル・ノーマッドは隣に視線を向けた。眼鏡を掛け、小奇麗なフォーマルスーツを来た中年男性が一人。瘦身なのに背が高いため、座つても脆そうな印象だつた。いや、それ以上にこの酒場と似合わない。もつと高級で金のかかるバーのほうが、違和感なく溶け込むだらう。

「飲みすぎじゃないのかい？」

男が言う。カイル・ノーマッドに向けて。一瞬、視線が交差した。男はカイル・ノーマッドのグラスを見たあと、表情を窺う。どこか医学的な光を帯びた視線だつた。診察でもされているような感覚。こいつは医者だらうか、とカイル・ノーマッドは考える。

「君はアルコール依存症には見えないがね」

「そうかい。あんたに関係あるかね？」

無視すればいいものを、自然と答えてしまつてはいる。男は言つ。

「さあ、どうだらうな。それを確かめるのに会話といつのは役立つんだ」

「俺は会話なんてごめんだよ。少なくとも、派生物を飲むような奴とは」

「まだだ、と胸中に呴ぐ。

「派生物？」

「バー・ボンはウイスキーの派生物、というのを前に何かで聞いた。真相は知らないがね」

「知らないのに信じているのか？」

「信仰の自由はこの国の基本だらう」

苦笑と共にカイル・ノーマッドは述べる。しかし、不審でもあつた。この男との会話は、どういうわけか嫌な感じがしない。かといって、なぜ自分に話しかけてきたのか、という疑問はある。相反するかのような二種の感情は、いつだつて総じて懷疑心へと変貌した。

今回もその一つというだけだ。

「信仰か、なるほど。そう来るとは思わなかつたよ、ノーマッド大尉」

一瞬、カイル・ノーマッドは驚きを露わにしてしまい、それを隠すより先に男を見た。

「会つたことが？ 失礼だが、覚えていない」

今のカイル・ノーマッドは私服を着ている。軍服でなければ、当然ながら階級章もない。であるからして、大尉という彼の身分と知つてしているのは面識のある人間に限られるはず。いや、それ以前に名乗つていないので。初対面の人間が知るはずのない情報が、二つ。

だが、男は静かに首を振つた。

「いや、直接は会つたことは一度も無い」

「ならあんたも軍人か？ 同じ部署で、俺の名前と顔だけ知つていたとか」

「軍人には違ひないがね、部署はまったく異なる。君は空軍、私は陸軍で所属はNSAだ」

NSA、その単語を舌の上で転がした。この国に存在する国家安全保障局、その略称。ただし信用できる組織ではない。前進ともいえる組織は軍保安局。つまりは軍部の一部であり、今なおその色は濃く残つてゐるといふ。似たような情報組織のCIAと違う点は、彼等は人間を駆使した戦術を行うのに対し、こちらは高度な電子機器を主力として任務を行なう点だ。

これをカイル・ノーマッドはたちの悪い冗談と受け取つた。酒の場で、現在は不要同然の軍人を前に話しているのだから、そう取られるのも当然。

「NSAのお偉いさんが、はるばるラスベガスまで何の用事だ？ それも必要とされなくなつた技術屋に」

「君を勧誘しに来た、とでも言え、ばいいかな」
大真面目に、自称NSA所属の男は言つ。いつの間にかバー・ボン入りのグラスを持つていて、それを一口飲みながら続けた。

「君だけでは無い。大勢の人間が、今は必要とされなくなってしまった。多くの、それも極めて優秀な技術者たちが、だ。ただ一人の女の所業によつて、太陽の下から遠ざけられてしまった」

刹那、これまでカイル・ノーマッドの顔に浮かんでいた嘲笑が消える。ひどく無感情で、冷たい瞳。その視線をもつてして再び見た男は、穏やかな微笑をしていた。

「あんたが IIS なんてふざけた兵器を造らせるつもりなら、今すぐここからいなくなつてくれ。そのバー・ボンの勘定は俺が支払つてやる。だから一度と俺の前に現れるな。すぐ腰を上げて、回れ右をしそのドアから出でていつてくれればいい。そうすればあんたが俺に殴り殺されることはない」

表情と同じ、無感動な言葉。押し殺された怒りがそうさせた。グラスを握る手に力が入る。

だが、冷徹な宣告も男にとつては意味がなかつたらしい。彼は微笑のまま、カイル・ノーマッドに言った。

「いやいや違う、そうではないよ。君を侮辱するつもりは毛頭無いんだ。聞いてくれ、大尉。私は君の兵器開発思想を読んだ。次世代戦闘機における光学ステルス技術を。いやはやまつたく、大した発想、設計と理論だつた。あれが実現されれば、我らがアメリカ空軍は世界で最も優位に立てる、最高の航空機を誕生させていただろうに。敵はレーダーも肉眼も使えず、我々は一方的な攻撃を可能とする。私見だが、IIS という得体のしれない技術より遙かに実現すべきものだつた」

「大げさなご託だな。あんたはこう言いたいんじゃないのか？ そのステルス技術を IIS へ転用し、開発途上の第三世代すら凌駕する第四世代機を製作してくれ、と」

「なるほど。君の上官はそう言つたのか」

「ああ。断つた結果が今の俺だ」

皮肉げに吐き捨てる。

「だが、」

と男は言つ。

「先述のように、君を侮辱するつもりはない。私は君や君のような技術者にE.Sの開発を行わせることは、それだけで星条旗に火炎放射を食らわせるようなものだと思つが、違うかね？」

じつと、カイル・ノーマッドは男の顔を凝視する。その腹の底を確かめようとするかの如く。だがどうあつても微笑の下の真実は揃めそうになかった。

「あんた、名前は？」

と、代わりに訊く。

「クリスチャン。フランク・クリスチャンだ」

「キリスト教徒らしい名前だな。あんたに神のご加護を、ミスター・クリスチヤン。それで、あんたの目的は何だ？」

「君と同じだ」

にやりと、フランク・クリスチヤンの口の端が吊り上がった。

「私は、ノーマッド大尉、この世界はE.Sというものが存在した瞬間、つまりあの一人の女によって狂つてしまつた、と考えている。あの女が天才というのは認める。しかし、E.Sの力は巨大だ。有り余るほど、危険なのだ。数機で核に匹敵する抑止力となる兵器。それはたつた一人の搭乗者の手に委ねられて良いものではない。そして同時に、今この世に誕生すべき存在ではなかつた。いや、この段階で存在してはならなかつた。未来兵器とでもいうかな。便利すぎるおもちゃは、その分だけ危険である。あれが引き起こした二次的被害については、君も重々、承知だろ？」

「もちろん」

知らず知らず、カイル・ノーマッドはその話へ聞き入つていた。もしかしたら自分に興味を向けさせる建前かもしれない。そうは思つたが、しかしあの女とE.S対する侮辱というのは、この上なく最高の肴となつた。

「ミスター・クリスチヤン、あんたはまさか、E.Sに対抗する戦闘機を作れ、とでも言うのかね？」

面白がつた、単純な問い合わせ。「冗談ともいえた。しかしそれに対し、

フランク・クリスチャンはやはり微笑を崩さずこう答える。

「少し違う、大尉。私もそれは不可能と思う。いかに格闘戦ドッグファイトに特化した戦闘機であっても、もはや IIS は航空機、いや現存する兵器で太刀打ちできる代物ではない」

「では、俺に何をしようと？」

するとフランク・クリスチャンの笑みは、より一層深くなつた。

彼は言ひ。

「私は、大尉、君に IIS に対抗する兵器でなく、IIS を凌駕する兵器の開発に携わつてもらいたい。そこでは必ず、君の力が必要となる」

言い終わると、彼は懐を探つて財布を出した。呆気に取られたカイル・ノーマッドを尻目に、一人分の勘定を終える。それから向き直り、やはり穏やかに述べた。

「続きは車の中でどうだ、大尉？　ここから先の話は、アル・ホール抜きのほうが良いと思うんだが？」

□元に妙な力がこもつて、カイル・ノーマッドはようやく自分が笑つてゐることに気づいた。それは皮肉でも、ましてや嘲笑でも無い。自分の手でもう一度戦える。このしばらく続いている苦渋で怠惰な日々から抜け出せることを知つた、歓喜の笑みだつた。

「もちろんだ、ミスター」

そう答え、カイル・ノーマッドは席から立ち上がる。先導する男の後ろに続いて、郊外の薄汚れた酒場を後にした。少なからず胸に抱いた感情は、希望だつただろうか。

プロローグ（後書き）

前書き失礼しました。普段、おっさんばっか書いてる銃狂いの作者です。資料がアニメ版の知識とウィキしかありません。なんで、細部で適当に解釈したり付け加えたりします。ご指摘ありましたお気軽にどうぞ。

廊下に響く一人分の足音。無数の大部屋と外界を望む窓との間にできた通路に、それは心地よく響いた。早朝の日差しが差し込む中、汚れの一つすら見当たらぬ綺麗なここは、だがその二人以外に誰もいなかつた。時間を考えれば当然のことである。ここは学校で、大部屋というのは教室だ。そこで毎日行われる事といえば、ホームルームの他にない。その重要性は差し置いて、教師が連絡する時に出歩く生徒が居るわけはなかつた。

とすると、この二人は何者か。先頭を行く一人目は、スース姿の女性だつた。黒髪に、皺一つない服装としゃんとした背筋は、涼しげで凜とした印象を否応なく与える。教師と見て良いだろう。普段から見慣れている廊下になど田もくれず、無言で先導する。だがもう一人は違つた。

女性の後に続く二人目。こちらは男性で、まだ若かつた。むろん女性のほうも若い。だが、それより遥かに幼い印象。率直に表現するなら青年。別段、童顔というわけでもないのだが。

青年が着るのはこの学校のものらしき白い制服に、背丈は女性よりもやや高い。長身と称して過言でないだろう。邪魔にならない程度に切つた黒い短髪は、肌の色と相まって日本人もしくは中国か朝鮮人そのもの。ただし、両目の色彩は濁つた青色だつた。その青い瞳は忙しなく周囲に巡らしては、興味深そうに、ほう、と息を漏らしている。廊下や建物の構造、というより学校という施設に対して珍しそうだつた。そしておそらく見当違いでもない。制服を着慣れていないので、どこか首周りが苦しげだ。こここの生徒であるなら、そんなことはまずありえない。

「そんなに珍しいか？」

「え？」

不意に女性から声をかけられ、青年の口から驚きに似たものが漏

れる。それほど集中していたのか。

女性が続けた。

「職員室を出てから、というかこの敷地に入つてからといつもの、まるで子供だぞ。学校が珍しいのか、それともこの生徒に興味津々といつことか？」

無感情な聲音に、どこか冗談めかすような響き。青年は苦笑と共に返した。

「まあ、両方ですよ。今までこいつの学校は通つたことが無いですし、生徒にしても興味はあります」

「異性としてか？」

あからさまに面白がるような口調ではない。取り方によれば、眞面目に言つているようにも聞こえる。しかし青年はこいつ考えた。自分が緊張を和らげようとしているのか、と。

「どうでしようかね。そこまで食えている直覺はありませんが。」

「ありがとうございます、織斑先生」

後半、どこか真摯な感情が混ざつた。唐突な感謝に、女性 織斑千冬はその足と止めて振り返る。別段、意外そうでもない視線。むしろ冷たいと言つてもいい。

青年は続ける。

「状況が状況とはいえ、俺はまともな学校を初めて見れました。先生のおかげです」

「何を馬鹿なことを。お前が初めてではない。私の弟もお前と同じだ。それに井ノ上、見れました、とはまるでここの部外者のようだぞ」

「では、まともな学校に通える、と訂正します」

穏やかな微笑。温厚な人柄をそのまま出した表情で、井ノ上誠は言つ。

「フン、と千冬は鼻を鳴らした。不満とも嘲笑とも取れる。あるいは感心とも。再び歩きながら言つた。

「どうにもお前はあいつと似ている気がしてならない」

「弟さんですか？」確かに、一夏とこの名前

「なんですか？」

「確か、

一夏とこの名前

「そりや、少し見てくれればわかります。先生がそういう口調で話すと

きは大抵、弟さんのことでしょう」

「口調を変えて話しているつもりはないがな」

「そうですか？」

洞察力に半ば呆れるような千冬に対し、呆れられた当人はあっけ

からんと述べてみせる。

「けつこう違いますよ。こう、普段だと少し冷たい感じなんですが、それが嬉しげと「うか鶯うしげ」というか、そんな感じの口調に変わるんです」

「……訂正する。奴はそこまで察しが良くない。むしろ逆だ」

「血口中心的？」

「いや、稀に見る朴念仁」、唐変木だな。会えばわかる。

不意に一つの教室で立ち止まる。やはりホームルームは始まつているようで、ドア越しで室内の声が聞こえる。教師らしき女性の声だ。会話の内容までは聞き取れないが、だいぶ柔らかな口調だった。「ここに待つていろ。名前を呼んだら入れ」

端的にそう述べた千冬は、返事を待たずして教室に入つてゆく。扉が閉まる音と共に、誠はこの事実を実感した。自分は一人の生徒として生きてゆく。少なくとも、卒業まで。

壁に背をあずけ寄りかかる。ふと見た教室の名を示す札は、一年一組。

見事に一が揃つてゐるなあ。

特に意味も無く感慨。右腰のポケットに手が伸び、止まった。さすがにこの状況ではまずい。それも初日からでは。少なくとも寮の部屋までは待とう、と思いついた。まさにその時である。室内から千冬の声が届いた。

「井ノ上、入れ」

扉を開く。一步田を踏み入れた瞬間、部屋中からどよめきが生ま

れた。思わずそちらを見てしまつ。

すごいな。

意図せず独りごちる。教室いつぱいに、それでも支障や快適さを考えられた間隔で押し込められた生徒。その大半は、というか全て女性だつた。彼女等はほとんどが日本人。ちらほらと外国人らしき人物が窺えたが、それも少數である。日本の女性だけで構成されたクラス、学園。

いや、違つた。約一名、同胞を発見。

その男は意表をつかれたような目で、他の女生徒と同じく誠を見ていた。あれが千冬の弟、織斑おりむら一夏いっかだろう。しかし、誠本人の関心はやはり彼よりも周囲の生徒たちに向けられた。

さすが日本、じゃない、さすがI.S学園。やることが極端すぎて、俺の日常は肩身が狭くなりそうだ。

声を伴わない感想は、この男女比を見れば当然だつたろうか。正面、向かう教卓のほうを見ると、やはり千冬とは違うもう一人の女教師。眼鏡をかけた彼女は、見た目からしても厳しさの一丘すらなり。

生徒だけでなく教師まで女性なのだ。その中で、男は誠と織斑一夏の一人きり。世の中にはこれをハーレムと呼ぶ輩もいるそうだが、そこまで言い放てるほどの度胸は誠に無い。むしろ性別の違いでコミュニケーションにどんな苦労をするか、と先を思いやられることで限界だ。

「えーと」

教卓まで来て、言葉に詰まる。何を言えばいいのか。その間にも視線は絶えず誠に注がれ、否応の無いプレッシャーを感じさせた。好ましい感覚とはまかり間違つても言えない。

と、

「はい、いまお話した転校生の井ノ上君です」

横から和やかな声。例の教師だ。千冬と対照的に、ずいぶんと子供っぽい印象。童顔のせいだけではないだろう。とはいえワンテンポ遅れた助け舟に、ひとまずは感謝する。そうなつても生徒たちの

ざわめきは消えない。いや、悪化していた。大声を出して騒がないのが、逆に怖い。

「それじゃあ井ノ上君、自己紹介とかお願いしていいかな？」

「あー、はい」

自分までテンポが遅れそうになりながら、曖昧に頷いて正面を向く。

「井ノ上誠です。アメリカから来ました。よろしくお願ひします」

軽く一礼。すると、

「あの」

一人の女生徒があずあずと言つ。日本人ではない。長髪の髪色はブロンドとクリーム色のちょうど中間あたり。その先端は綺麗に巻かれていて、頭には青いヘッドドレスらしきものを付けていた。

ふと、どこかで見たような気がする。デジヤヴともいえない不確かな感覚。だが少女の問いはそんなものを吹き飛ばしてくれる。

「男、ですか……？」

「は？」

呆気に取られ、間抜けな声を出してしまつ。その女生徒の妙な口調が、では無い。質問のほうだ。それほど意表をつく質問だった。どう答えりやいいんだよ。

別段、女っぽい自覚などないし、他人からも中性的とはお世辞にも使われたことがない。というか、自分が女だったらさぞかし気味の悪い光景になるだろう、と思う。

「オルコット」

冷水のような呼び掛け。千冬だつた。途端、誠は気づいた。あの少女、どこかで見たと思ったが、そのはずである。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。先日、ここに来る前に送られた資料には、クラスメイトとなる一覧が顔写真付きで送られてきていた。このクラスの候補生は、セシリアを含め三人。この三名に限つては特に詳細を与えられている。候補生には目を光らせておけ、ということだらう。

誠の目の前で、そのイギリス人は訴えるように言つ。

「い、いえ、先生、だつてその以前にも……」

セシリ亞が別の方に向いた。と、彼女だけでは無い。クラス中の目が誠を離れて、ある一点に集中する。

「へ？」

妙な声。誠は先ほどの自分を思い出し、新たな標的もとい注目となつた人物に同情を覚える。

全員の視線の先、座つていたのはブロンド色の髪をした少女だつた。やはり日本人では無い。彼女も知つてはいる。セシリ亞と同じく資料で見た顔。その名前を思い浮かべ、唐突にこの集中砲火の理由を悟る。

もつとも、

「ちょ、ちょっと！ なんでボクなの！？」

当の本人 シャルロット・デュノアはまるでわかつてない。顔を赤らめ狼狽する姿から、過去の所業を想像することは難しい。確かに、彼女はある意味で自分と同じような立場にあつた、と誠は記憶を探る。

ISという化け物じみた女性専用兵器が誕生し、その中で発見されたイレギュラー。それが織斑千冬の弟、織斑一夏である。男にして唯一ISを扱える人間。当然ながら、各IS研究企業もとい国家はその情報を探りたがつた。シャルロットは、以前にシャルルという偽名を使い、男としてこのIS学園に入学したらしい。彼女の父がトップに立つフランスはデュノア社からの指示なのは当然だが、なぜそれに背いて女として生活しているのかは不明。

「当然ですわ。前科がありますし」と、セシリ亞。

「前科つて、あればだからその

「そういえばそんなこともあつたらしいな、シャルロット。私の嫁に何をした？」

また別の乱入者。小柄な少女だつた。どう見てもセシリ亞やシャ

ルロットより小さい。だが存在感もとい風格といふものがあった。

その正体は彼女自身か、もしくは長い銀髪と左目を覆う眼帯だらう。もう一つの赤い右目、唯一の視界であるうつそれは細く研ぎ澄まされていた。どことなく千冬に似た印象。

彼女だけは資料を見る以前から知っていた。ドイツ軍所属の同国代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒ。階級は少佐だつただろうか。ISの配備された特殊部隊で、最年少メンバーであり指揮官を務めている。その筋では有名人だ。

「いや待つて、何でラウラまで！？」

「嫁の安全を守るのは私の責務だ」

少佐は豪語する。自然と述べられるのは、普段から口にしている慣れだらうか。そんな予想をしつつ、誠はある点に気づいた。

嫁、つて言ったのか……？ 旦那の間違いだよな。

確認しておこうかと思つたが、雰囲気がそれを許さない。

「……一夏あ」

言葉どころか反論も見つからず、彼女が助けを求めたのはイレギュラーの男だつた。織斑一夏。もう一度、その名前を噛み締めてみる。ISを起動させた最初の男。今では専用機も所有しているという。

自分に向けられた懸念へ、彼は気づいていない。むろん誠も表情に出していなかつたため、当たり前ではある。シャルロットに誤魔化すような苦笑を浮かべて言う。

「嘘じやないしなあ。……悪い」

「一夏あ！」

裏切られたような叫び。いや実際そうなのだらう、彼女にしてみれば。半分涙目になつていて。

と、誠の横で鋭い咳払い。千冬だ。場の空気を一転させる。やや、というかほんと騒いでいたクラスは、途端に静寂を取り戻す。冷凍庫並みに温度の下がつた教室で、最初に口を開いたのはその弟。

「あー、えーと、とにかく男つてことでいいんだよな？ 井ノ上」

…だつたか？」

「そういうことにしてくれ。女になつた自分なんて、想像したくもないよ」

肩を竦めて苦笑。向こうも同じような表情を返した。どこか同情的。

「てことは」

誰かが言つ。その相手を探すことは不可能だつた。刹那、

『本当に男！？』

「！？」

何重にもなつた少女たちの叫び。誠が背筋を硬直させたのも束の間、矢継ぎ早に個人の大声が飛び出す。

「なにに、じゃあ二人目？ 織斑君だけじゃなかつたの？」

「しかも結構かっこいいよ！ なんていうか、織斑君と似てるけどまた違つた感じで」

「あ、わかる。逞しいのに凜々しいっていうか、頼りたくなる感じ！」

「井ノ上君、でもさつきアメリカつて言つたよね？ なんで日本人名？ あ、帰国子女つてやつなのかな」

口々に勝手な評価を推測混じりで述べてくれる。聞く限り、第一印象は悪いわけでもないようだ。そこは救いだらう。誠の抱いていた第一の不安材料は、ここに馴染めるか否か。同性の一夏とはどうにかなるだろうが、問題はその他大勢の女生徒。九割以上が異性なのだ。放り込まれた男の気苦労は、相当なものだらう。現実に今の誠がそうだ。すでに胸中では「帰りたい」と何度も呟いている。一夏に対し、尊敬にも似た念が生まれた。

「し、静かに！ まだホームルーム中ですよ…」

隣でおろおろしながら呼びかける眼鏡の教師。責任感はしつかりしているらしい。それに効果があるかは別として。あきらかに気圧された声が、届くはずもない。

「皆さん、いい加減に」

「

「静まれ、馬鹿ども！」

言いかけた同僚を遮り、一括。落雷の如き衝撃が教室を揺さぶる。雷を落とした人物。いうなれば雷神は苛立ちを露に顔をしかめていた。むろん千冬である。今に限り、雷神そのものより凶暴で恐ろしい存在だ。これは誠だけの印象ではない。クラス中がそう認識したからこそ、騒ぎは一瞬で静まった。

静寂を確認し、千冬は淡々と告げる。

「織斑、井ノ上を案内がてら先に準備に行け」

「は、はい。けど、ちふ 織斑先生、I.Sは……？」

「井ノ上は専用機持ちだ。さっさと連れて行け」

弟にも容赦が無い。私生活でもこうなのか、それとも公私の境界線ができるだけなのか。若干、気になるところ。

千冬は誠へと向き直り、

「井ノ上、クラスには追つて紹介してもらひ。次はI.Sの実習だ。お前は必要ないだろうが、大半はほとんど操縦経験が無い。他の専用機持ちと一緒に手ほどきしてやれ。その前に、余裕があるようだつたら織斑と模擬戦をやってもらう。軽い運動程度に」

「わかりました」

気を取り直して首肯。千冬は小さく頷き返すと、目で一夏を促した。先導して歩く一夏に続いて、やや足早に教室を出る。ドアが閉じた瞬間、一人は静かに嘆息した。

井ノ上誠。一夏の興味はまずその名前へと向けられた。アメリカ出身で日本人の名。当然といえばそうだ。女生徒の中にも同じ質問があつた気がする。

「ハーフなんだよ、親父は日本人で、母さんはアメリカ人」

更衣室で一人揃つて着替えながら、誠は言つ。

「じゃあ、親父さんが日本人名にしたかったのか？」

「いや逆だ。むしろ母さんのほうが日本好きだつたらしい。フジヤ

マ、ゲイシャ、つて具合に。親父はアメリカ名にしたかつたらしいけど、結局は押し負けたんだ」

「へえ。国籍もやっぱり日本なのか？」

「それがなんていうか、ちょっと特殊でな。一応、軍属で市民権があるからアメリカ人になるらしい」

他愛の無い雑談。スーツに袖を通す。

「それじゃあ、ラウラと同じよつな？」

「似たようなもんだろう。彼女、少佐だつたよな。俺はただの少尉で、少し前までは上等兵だ」

「何か、すごい昇進してるな」

「ああ。本当は紛争国派遣軍の末端にいたんだよ。朝から晩までドンパチばっかだ。それが偶然、ISなんて動かしたもんだからな。階級上げて、ここに来ることになつた。仲間にはカマだの何だのと笑われたよ」

思い出し、苦笑する。

「それってつまり、戦闘とかも……？」

「ドンパチばっか、って言つただろ。いつまで経つても慣れないけどな。ほら」

自分の肩、そこにある刺青を見せる。描かれた部隊章は、

「レインジャー連隊……？」

呴くように一夏。どうにか文字列を読み取つたらしい。察するに、あまり英語は得意でないのか。

「我が最愛で馬鹿な友人たちだ。戦争より芸人でも目指したほうがいいような連中だよ」

第75レインジャー連隊。その部隊名に思いを馳せる。あそこにはいたのは僅か一年程度。それでも多くを学び、友人を得た。おそらく一度と合つことの無い友人は、脳裏に焼き付いて笑いかけてくれる。

着替えを終えると、一夏がこちらをじっと見ていた。

「アメリカって、ISに独自改良でもしてるのか？」

「なんで？」

「いや、それ」

誠を指さす。正確には、着ている服を。一夏のスーツは胸部と下半身のみを覆い、つまり腹部は剥き出しになる。通常、このタイプが主流だ。

対して誠のほうはといつと、全く異なる形状。首元から足までを覆う、黒い艶消しの全身服。肘と膝の関節部にはプロテクターがあり、胸部と脇腹はやや分厚い。防弾目的のパッドのせいだ。貫通性の高いライフル弾は無理でも、拳銃弾ならどうにか守ってくれる。

「ああ。……まあ、そういうことになるか。例えば、お前や他のISって装甲の隙間が多いだろ？」

小さな首肯。誠が続ける。

「俺のは最初から実戦性能、というか兵器としての性能だけに特化してるんだよ。シールドのエネルギーが少くとも別に回せたり、シールドが無くても戦える。その延長線でこれだ。ISが起動できなくても、ある程度の戦闘が可能。任務放棄は最終手段にできる」

「……人使い荒いんだな」

「軍はそういうもんだ。というか、俺からすれば他がおかしい。専用機を持つた時点で、国家なり軍なりに所属しなきやならない。野放しにできるもんじゃないだろ。組織に管理されない力は驚異でしかない。管理されるなら、その特性を最大まで引き出す必要がある。シールドが切れて弾受けるのが怖いです、なんて理由で戦線離脱して、そのせいで味方が何人も死ぬなんて冗談だけにしたいさ。依存するにもほどがある」

言い終わり、気付く。一ちらを呆然と見やる一夏の表情。陰りを垣間見せたそれに、原因は自分にあるのだと悟る。こんな話題が楽しめるわけもない。楽しめるとすれば、それは戦争狂か死にたがりくらいだろう。まして誠と一夏はまだ会つてから一時間と経っていない。

「悪い。気にしないでくれ」

表情を曇らせるクラスメイトに言つた。しかし心のどこかでは、違和感もある。彼もいざれば戦争の道具となるはず。それがこの程度の自覚で良いのか。

もつとも、それは遠い未来の出来事だらう。疑念を押し殺す。命のやり取りは、その覚悟ができるから考えればいい。年齢を考えれば自分のほうがイレギュラーなのだ。

「さて」

氣を取り直し、口調を明るくして言つ。

「どこから出ればいいのか案内してくれよ、織斑先輩。俺は来たばかりなんだ」

「ああ。一夏でいいよ」

「そうか？ じゃあ俺も誠でいい。ともかく、よろしく頼むよ、一

夏

互いに微笑みを交わし、右手を差し出す。一夏の右手がそれを握り返した。気が合つがどうかは別にして、彼との仲は円滑にしておきたい。ここまで来て友人の一人も作れないとは、それこそ悪い冗談だ。

空にいる。これまでにも数回、味わったことのある感覚を一夏は感じていた。航空機は機体を押さえつける重力と抗力に対抗するため、常に移動し、揚力と推力を獲得しなければならない。この二つが無くして空を飛ぶことはできず、静止状態を維持できるペリコプターも実際は動き続いているわけだ。

これが通常の飛行。完全な静止は不可能とされた、航空機の現実。一見すると自由な空は、実のところで制限が多い。飛んでいる間、絶えず消費される燃料もその一つだ。それらに縛られない唯一の例外がISである。燃料の概念自体を持たず、完全な静止を可能にした存在。移動範囲は全方位に渡り、戦闘機より素早く機動性に富み、戦車並みの火力を備えた最強の兵器。

一夏にとつてこれが兵器であるといつ実感はなかつた。今、彼にあるのは己の手にある力、という確かな感覚のみ。守るべきものを守れる力。これまで味わつた無力をぬぐい去り、他者を救うために与えられた力だ。胸中に沸き立つ充実感と、空を自由に動ける開放感。二つの感情を抱き、そつと仕舞いつつ前方の機影と対峙する。自機、白式^{びやくしき}という名を体現したかのような白いISに、チャネルを受信。前方のISからだ。

『準備はいいか、一夏？』

誠の声。気さくな口調だつた。あの機体、あれに誠が乗つている。それは更衣室で聞いた通り、白式やその他のISとはまったく異なる外観をしていた。通常、ISは搭乗者の顔が剥き出しになる。これはシールドによつて空気抵抗など、その他多くの力から防護されるからだ。実質、ISには最低限の装甲しかない。その分だけ性能を上げてはいるが、誠の指摘したシールドへの依存もあるのだろう。

対して誠のISは、足元から頭頂まで全てを装甲で覆われている。

直線的なフォルムをした外観は全体に繋がり、顔にはフルフェイスのマスク。両目の辺にセンサーらしきカメラが収められているが、右目だけもう一つ、斜め上に三つ目のカメラがある。補助的なものだろうか。昔見た戦隊ヒーローやロボットアニメを思い出す。両者が混同すると、きっとこんな風なのだろう。いさか凶暴なのは、誠の言うとおり純粹な兵器だからか。シールドを防御手段でなく、空中機動戦における一つの役割とした、まったく新しいE.Sだ。

「もちろん」

笑いながら答えて、誠の装備を見る。右手にライフルが一丁。両腕には、外側へ膨らみがある。内蔵式の武器だろう。次いで左腰の辺に、棒状の物体が下げられている。それが見た目通りの代物なら、日本刀。妙な感じだ。量子化しない標準装備なのかもしれないが、それでも現代風の銃器で武装しながら刀を持つというのは、どこかおかしい。

なんか、似てるなあ。

声に出さず呟く。思い出したのはラウラだ。少し前、シャルロットと共に編入してきた彼女は、初対面でいきなり張り手を食らわしてくれた。あの頃、といつてもほんの少しの期間だが、それでもラウラはもっと冷たい人間だったのを覚えている。見た目が軍人なら、中身もそのまま。いや、人間というよりどこか兵器の一部のような少女。唯一の人間味は、一夏の姉、千冬に対する敬意とプライドだけ。

誠はまったく違うが、それでもあの頃のラウラと似ている気がする。表立って冷徹に見せるのではなく、胸の底に剥き出しの牙を隠しているような。必要になるそのときまで決して晒すことのない、殺意の刃。そういうものを感じた。もつとも、会ったばかりで確信することもないだろう。思い込みかもしれない。いや、思い込みのはずだ。

『二人共、準備はいいな』

千冬の声が響く。アリーナの塔、そこから届くものだった。他の

生徒たちは、観客席で模擬戦の見学となつてゐる。

「こつちはいつでも」

『同じく。 あー、待つた。 一つだけ』

思い出したように誠が述べる。

「どうしたんだ?」

『俺はお前の機体、白式だつたか、それについての概要程度は知つてゐる。けど、お前はこつちの情報を知らないだろ。模擬戦だからつてわけじゃないけど、フェアじゃないのは性に合わないんだ』

「?」

首をかしげる。

『自分の機体の情報を、自分が白式について知つている程度に教える、といふことか? 井ノ上』

と、千冬。

『そういうことです。構いませんか?』

『構わんが、手短にしろ。それと後悔するなよ』

『了解』

苦笑混じりに誠は答え、それから続けた。

『それじゃあ一夏、手つ取り早く説明するから聞き逃すなよ』

「わかった」

『頼もしい返事だ。俺の機体はブラックワイドウ。アメリカ空軍の実験機だ。実験目的もあるが、ちょっと特殊な機体の性質上、世代分けは難しい。とりあえずは三・五世代と考えてくれ』

「第三世代と第四世代の中間、つてことか?」

『そうなる。あくまで分類は。性能としては、現時点で第三世代機と同等だろう。主兵装は今持つてるアサルトカービンの他に、特殊ショットガンと軽機関銃、対地攻撃用の電磁加速砲。背部の翼の辺と両肩には対空ミサイル。こいつは二種類あつて、自律追尾とアクティブ・ホーミングだ。副兵装、というか近接戦用に、右腕には五ミリのチェーンガン、左腕には四〇ミリの針散弾砲を装備している』

『全距離に対応する多目的型……でいいのか?』

『そう思つてくれ。本当は奇襲用なんだが、これじゃあ奇襲も何も無いからな』

「その腰の刀は？」

先ほどから気になつてゐる点を訊く。

『ああ、これが？ 今のところは飾りだよ。開発者が俺の母さんみたく日本好きだつたらしい。何も切れないナマクラだ。カービンの銃剣のほうが使いやすいしな』 さて『

最後、語尾の調子を僅かに落とし、言つ。

『こんなところか。始めるぞ、一夏』

あくまで調子を崩さず、飄々として告げる。余裕すら感じられた。リラックスでもしてゐるようだ。

「わかった」

携えた長刀を構える。名を雪片式ゆきひらじがた型。白式の有する唯一の装備であり、かつて姉の千冬が使つた工Sの装備の後継。これを手に取る度、感じるのは同じこと。姉は一線から離れた。今度は自分の番なのだ、と。

雪片を右下段へ。ブラックウイドウは全距離に対応可能。対して白式は近接戦のみ。間合いを置かれては不利だ。一気に距離を詰め、斬り上げて倒す。注意すべきなのはカービンやミサイルよりチーンガンとランチャ一。射線を掻い潜り、間合いを取らせない。肉薄したまま勝負に出る。

薄く息を吐き、吸い込む。静かな呼吸を二度繰り返して、視線を定めた。

カービンを確認。セレクターはバースト位置にある。フルフェイスマスクの内部に出力されたディスプレイへ、視線入力で操作。FCS（火器管制システム）を呼び出して、全兵装の安全装置を解除。次いでマスター・アームをオンへと切り替える。戦術システムは高機動戦闘に設定し、アサルトカービンを構えた。機体連動のレーザー

照準装置に、目視射撃のための光学照準器が取り付けられている。

銃身下部には銃剣を収めた金属ケース。

白式を見る。戦術補助システムは白い機体を敵機として認識、特性ロックオンにより全方位レーダーへ記憶させる。解析された距離は三〇〇メートル。カービンの有効射程範囲は七百メートルだが、空中での機動戦闘だ。誤差を含め、ぎりぎり戦闘中の命中範囲といったところ。容量二百発のドラムマガジンのため弾幕を張るのもいいが、それはやりたくない。戦術的問題でなく、性に合わない。

一夏はどう動くだろう。間合いを詰めようとするのは確実だ。問題は左右から回り込むか、正面か。もちろん上下も考えられたが、構えを見る限り可能性として高いのは右か正面。白式は唯一の武器である実体剣を右斜め下に構えている。速度、威力を活かすのであれば、先述の一択だろう。もしくはフェイク。下段と見せかけ、上段もしくは八相か。視界を遮る上、被弾面積を増す正眼はありえない。いや、それならば八相も同じはず。脇に構える八相から繰り出せるのは、突きか袈裟斬り。ISの機動性を考えれば突きによる対応は難しい。袈裟斬りにしても隙が多いはず。とすると、やはり下段からの斬り上げ、上段からの斬り下げの一択。

選択兵装を確認。特殊ショットガンを最優先で使用可能にしておく。榴弾から散弾、スラッグ弾までを放つセミオートの散弾銃だ。場合によつては、カービンからそちらに切り替える。軽機関銃は中距離向きだし、ガウスライフルは威力こそ強大なもののが取り回しと連射性に欠ける。そもそも空対地攻撃の兵装なのだ。今回、出番はないとして間違いない。

カービンの照準装置を起動。ディスプレイの白式に着弾点が重なつた。刹那、模擬戦開始のブザー。

白式が動いた。最大速度で接近。正面からだ。

トリガーを絞る。マズルフラッシュと共にカービンから弾丸が放たれた。五ミリという小口径ながら重金属弾頭を使用した徹甲弾。それが三発。ワントリガで三連射を放つバースト機構。立て続けに

それを二セット撃ち込んだ。計九発の弾丸を、白式は縦横へ移動して回避、なおも向かつてくる。

次の一手は決まっていた。誠はバク転するように回り、地表へ向かう。ブラックワイドウが垂直に降下。三次元レーダーを確認。白式はそのまま後ろを追つていた。

「ショルダー・オープン、ASM、^{オートサークルミサイル}六。通常弾頭、ペネイド」

音声入力により両肩の上部装甲が浮き上がる。内蔵された小型のミサイルが各三発、姿を晒す。火薬量を減らし、機動性を重視した誘導弾。最後に付け足したペネイドとは、赤外線追尾ミサイルを惑わすフレアなどへの対抗手段だ。白式にそういう装備は無いようだが、危険は置かせない。確認と状況分析のために選択した。

「発射」

六発を同時発射。ミサイルはブラックワイドウを先導するかのように前方へ飛び、一秒を置いて一斉に反転。誠とすれ違つて後方に向かう。同時に誠自身も百八十度、向きを変える。降下に急制動をかけ、カービンを白式に。

『くつ……！』

一夏の呻き。トリガーにかかつたブラックワイドウの指が、操縦手に生じた一瞬の驚愕に止まる。

回線を閉じてないのか？

馬鹿な、と耳を疑う。模擬戦といえど仮にも戦闘なのだ。通信チャンネルを開いたまま戦っているなど、信じられなかつた。油断か、それとも力量ないし経験不足。

「甘く考えすぎじゃないか、一夏」

囁きかける。もつとも、こちらは送信していないため聞こえていない。

ミサイルから逃れるため、白式は機動を変える。上方へ退避。ここに誠は六発を撃つ。最初の三発は直接、残りは回避した先を読んだ見越し射撃。その判断は正しい。

『くそつ！』

三発を避けた直後、次の弾丸が白式を直撃。体勢が崩れ、速度が落ちる。一夏が立て直すより先に、ミサイルは追いついていた。

終わった。そう悟る刹那、だが誠は『口を過信したこと』に気付く。一夏に逃げ場はなかった。六発のミサイルに囮まれ、それらはすでに撃発位置の寸前まで来ている。おそらくは思考による選択ではない。瞬間的な判断だつた。白式は一発のミサイルへと逆に接近し、長刀雪片を振るつて飛び去る。半ばの位置で分断されたミサイルは一コンマ遅れて爆発し、それが残る五発を誘爆させたのだ。空の一点に誕生した粉塵より、白式は姿を見せる。

『強いな、誠』

まだ開きっぱなしの回線から語りかけてくる。まるでスポーツでもしているかのように、軽く息の上がつて楽しげな口調。応じるか迷つた末、送信。

「お前もなかなかやるよ。最も、戦闘中に敵と会話するなんてのは、馬鹿のやることだ」

『お前に言われると、何ていうか重みがあるな』

互いに笑う。カービンを構え直した。アンダーバレルより銃剣が現れる。片刃のそれは、刃渡りおよそ三〇センチほど。ついで戦術システムを変更。高機動戦闘から格闘戦へ。

「一夏、仕切り直しだ。この後、実習があるならあまり時間もかけられない。格闘戦で終わらせよう。その方が得意だろ?」

『いいのか? 僕の専門だぞ』

「やれるものならやつてみる。言つておくと、この銃剣はちょっと特別な材質でな。劣化ウランの刃がシールドにどれくらい効くか、試してみたいんだ」

『誠、ちょっと怖いぞ。……でも、俺も負けないからな』

『負ける気だつたら許さねえよ』

白式が降りてくる。そしてブラックワイドウも上昇した。互いに同じ高度となり、対峙する。距離は僅か十メートル足らず。なんだ?

不意に、誠は自分が笑っていることに気づいた。しかし、何故？この模擬戦が面白いのは確かだ。それにこの織斑一夏という奴は、話していくなかなか楽しい。だからといって、戦闘を楽しんでいるのか。

そんなわけがあるか。

言い聞かせ、目を閉じる。再び視界を戻したとき、笑みは消えていた。左手を銃身にやる。同じくして白式が下段へ構えた。剥き出しの一夏の表情は、こちらを見据えて動かない。

仕掛けはほぼ同時だつた。最初に動いた誠に、一夏が追いすがる。肉薄し、銃剣を振り上げた。狙うは首筋、右頸動脈。突き出された刃は、しかし割り込んだ雪片の刀身に阻まれる。瞬時に刃を退き、胸部へ。だがこれも防御された。

白式が攻勢へ転じる。横なぎに振るわれた雪片を、誠はバク転めいた動きで回避。体勢を戻す寸前、足払いをかける。

『うつ……！』

一夏の声。これだけ近いと無線を介さずとも聞こえただろう。体勢を崩したところで後ろへ回り込み、カービンの銃床をその背へ叩きつける。

『……！』

押し殺された呻き。仰け反るような格好になつた白式だが、それは敗北ではなかつた。誠が振り向くより先に、機体ごと回転させ雪片を振るう。その刃を寸前で受け止めた誠は、後退しつつ三度の突きを繰り出した。右肩、右胸、左頸動脈の順に狙つた切つ先だが、どれもより分厚く精錬された刀身に邪魔される。突きの分だけ鳴る金属音。頭部を狙つた回し蹴り、それを一夏は身を沈めて回避した。刹那、雪片式型は青白く発光する。

ワンオフ・アビリティ！

瞬時に理解するも、手遅れだつた。雪片が形を変える。刀身は実体でなくレーザーのような光体へ。淡い光が目に焼き付いた。零落、白夜、白式の有する特殊能力。シールドエネルギーを消費する代わ

り、相手のシールドを無効化する剣。それがブラックウェイドウへと迫る。

「クソッ！」

寸前の回避。だが遅い。胸部装甲が切り裂かれる。その瞬間、デイスプレイのシールドメーカーが激減。損傷のなかつたシールドが、たつた一撃によりゼロへと変わる。直後、終了のブザー。

『勝者、織斑一夏』

短い宣告。それが全てだつた。

『か、勝つた……？』

やや遅れた一夏の声。半信半疑の事実を確認するように。思わず、呆れたような苦笑が漏れる。

『なんでお前がびびつてんだよ』

『いや、まさか勝てるとは……。俺のシールド、あと一〇パーセントも無かつたんだ。そこに零落白夜が発動したから、一気にシールドは削られるし、もう無我夢中で……』

『要するに偶然だつたのか？』

『たぶん、そうだとと思う。勝つてこんなに疲れたのも初めてだ』

『負けた俺にそれを言うかね』

わざとらしく言つてみせる。すると一夏は笑つた。その顔を見ていて気付く。先ほどと同じ。自分も笑つているということを。

『どうしてだ？』

フルフェイスマスクに隠れた微笑のさらに下。精神の奥底で自問する。

『どうして笑つていられる。これが実戦ならば死んでいたかもしれないのに。……戦いを楽しんでしまつているのか？』

『どうにも納得がいかない。しかし精神は明らかに昂揚している。心地よい満足感。』

戦闘に感情を持ち込んではいけない。それはレインジャー入隊以前、幼い頃よりの戒めだったはず。怒つてはならない。憎むことも許されない。ただ戦い、生き延びることを考え、と。でなければ

死ぬだけ。自分がではなく、隣にいる仲間が。戦争そのものでなくとも、戦闘や兵器を道楽とした時点でそうなる。まして楽しむなど言語道断だ。 そのはず。

『誠？』

怪訝そうな一夏の問いかけ。我に返る。

「なんでもない。 胸張つてくれよ、一夏。偶然だろうが、お前が勝つたんだ。』

『ああ、もちろんそうするよ』

戦闘モードを解除。マスター・アームをオフ、セイフティを全兵装にかける。ブラックワイドウが緩やかに離脱した。白ゼビと正反対の方向へ向かいつつ、空を仰ぐ。

一緒に来い、お前は俺たちの仲間だろ？、と。遠い太陽よりさらには彼方、記憶の淵に霞む古い友人から言われたセリフが、おぼろげに蘇った。

午前四時半。いつもと同じ時間に、誠は目を覚ましていた。場所は学生寮の一室。隣から聞こえる寝息は、同室である織斑一夏のものだ。一人しかいない男子生徒なのだから、相部屋になるのは当然。まだ寝ているのも当たり前。少なくとも、誠以外の人間にとつては。

ベッドから起き上がり、タオルを取つて軽く顔を洗う。それから水を一、一杯。それから荷物を確認する。昨夜、この部屋に到着した時点で、持ち込んだ荷物は全て運ばれてあつた。着替えがいくつか、金属ケースに日用雑貨品。それと写真立てが二つ。両方ともベッド脇に立ててあつた。一つはレインジャー時代の写真。陸軍のACU迷彩服を着て、M4やM16ライフル、M249 SAWを携えたレインジャー隊員がおよそ十名。どれも笑顔で、若い。活力溢れる有能な若者を欲するレインジャーでは、十代の兵士も珍しくなかつた。その中に誠もいる。ただし、アメリカ製の銃器でなくロシアのカラシニコフ小銃を持つて。

連中はどうしているだろう。不意に思う。まだ生きているか、死んでいるか。生きているなら戦場か、故郷か、あるいはフォート・ベニングかグリーンベレーの訓練課程。できれば生きていて欲しいと願つた。いつか風の噂で戦死を知つても、嬉しいはずがない。

もう片方の写真立てにも、やはり中身がある。そこに写つているのは兵士でなかつた。男が三人と、少女が一人。男の一人は誠だ。もう一名は体格の良い大柄な人物と、白衣に眼鏡という典型的なインテリ系の人物。少女のほうは誠と同年代ほどだろう。一人はショートカットの活潑そうな姿で、もう一人は大人しそうな長髪。対照的な二人だ。どういう経緯でこの五人が集まつて写真を撮つたのか、当人たち以外では首を捻つてもおかしくない。それほどおかしな組み合わせである。

しばらく一枚の写真を見つめ、目を移した。金属ケースへ。射撃に心得のある人間なら、これがどういうものかわかるだろう。誠はケースを開き、中を確認した。金属と木材とが組み合わさったカラシニコフことAK47小銃が一丁。これは写真で持っていたものだ。どういうわけか、この銃が気に入っている。その脇で、鈍く光る自動拳銃が二丁。シグザウエル製P226に、コルト・ガバメント。後者にはレインジャーの刻印があつた。除隊の時、友人が記念にくれたものである。

別段、これらの銃器を使って何らかの特殊作戦を敢行するわけではない。IS学園には射撃場もあると聞いており、そのために持つてきただけだ。もちろん万が一に備え、実弾もあるにはあるが。

カラシニコフへ手を伸ばしかけ、だが寸前でシグを掴む。ケースの中敷きを押し上げ、クリーニングキットを取り出した。ベッドの上に布を引き、シグを分解する。ペイント弾を詰め込んである弾倉を抜き取り、チャンバーを確認。装填済みの初弾がある。それを取り出して、安全装置を下方に動かす。と、フレームが外れた。物音を立てないよう慎重に抜き取ると、バレルとスプリングとを外して点検する。

これはもう日課だ。一度、目の前に飛び出してきた敵兵が、暴発した自分の銃に顔を引き裂かれるという光景を見てからというもの、欠かさず行なつている。本当は三丁ともやりたいが、時間がかかる。なので一日に一丁。

グリースを塗った布切れで磨き終わると、組み立てを開始。油臭さがないのは換気扇のおかげだろう。その後、シグに安全装置をかけてベルトに挟み、窓の方へ向かう。開け放つと、やや暖まった夜気の、しかしそれでも涼しい風が通り過ぎてゆく。

誠はズボンのポケットへ手を伸ばした。今彼は、レインジャー時代と同じACU迷彩の上下。使い古した物はどこか安心感があり、着心地も良い。これはそんな一着だ。そして取り出されたのは煙草とジッパー。胸にはペンダントよろしくかけた携帯灰皿もある。窓

から顔を突き出し、一本を吸つた。昨日、教室前で留まつたのがこれだ。寝起きにはこれをやらないと落ち着かない。

赤とも紫とも、ましては夜の藍色ともいえない鮮やかな朝焼けを眺めながらの一服。昨日、ほとんど吸つていなかつたせいか頭がぐらりと揺れた。それが心地よい。部屋のドアが僅かに音を立てたのは、その時だ。

身についた経験とは時に厄介なもので、いついうあからさまに不審な時、即座に対応してしまう。煙草を灰皿に押し込み、振り向く。ドアへ向き直つた頃、誠の手には安全装置を解かれたシグがあり、人差し指がそのトリガーを僅かに絞つていた。

「誰だ」

問いかけ、右へと移動する。ドアから死角となるよう。

「もう一度訊く、誰だ。三秒以内に出てこい」

若干の脅しを含ませて告げる。といつても本当に脅しだ。先述の通り、シグに装填しているのは実弾でなくペイント弾。相手が本物の敵ならば、ケースまで行つて実弾を取り出さなければならない。しかし、それは取り越し苦労だつたらしい。ドアが開く。現れたのは不満顔をした小柄な少女。長い銀髪と、黒い眼帯。それほどわかりやすいクラスメイトもいないだろう。

「ボーデヴィッヒ？」

名を呼ぶ。ラウラ・ボーデヴィッヒはまず誠を見て、その出で立ちと手元の拳銃を確認。それからまだ寝ている一夏に視線を映し、嘆息した。

「……相部屋だつたのか。考えてみれば当然だな」

「悪かった。何か用か？」

シグを戻しながら答える。すると一度目の嘆息。

「貴様にではない。私の嫁に、だ」

「嫁？」

不服を全面にだし、ラウラは一夏を指さす。

「夫か旦那と間違えていないか？」

「そんなことはない。井ノ上、だつたな。日本では好きな人物のことを“私の嫁”と呼称するのだぞ」

「そうなのか？　いや待て、いつから日本は恋人の呼称で性別の壁を超えるようになった」

「知らん。私はドイツ人で、ともかく一夏は私の嫁だ」

「堂々と言う。どうだとばかりに胸を貼られては、何も言えない。昨日、聞き間違えと思っていたが、それこそ違つたらしい。

「ところで、いつからここは米軍キャンプになつた？」

「気にしないでくれ。着なれた服のほつが寝れるし、動きやすい。これから走りに行くんだな」

ラウラは意外そうに目を見開き、

「お前も軍人なのか？」

「知らなかつたか。まあ、部隊からは抜けたよ。在籍だけしてゐる原隊は？」

「ガソリンスタンド。いや、ペトロスタンド。違う、ジャッカルかな」

「ふざけてるのか？」

「いやいや、大真面目だ。俺の最終目標はジャッカルかドンガメなんでね」

「貴様、階級は？」

「少尉」

「私は少佐だ」

「……米陸軍第七五レインジャー連隊、第一大隊。当時は上等兵。ほんの一年足らずだが、アフガン東部のQRF（即応部隊）として駐留部隊にいた。IS適正を認められたため、尉官まで昇進してここに來た」

「ほう、と関心したような声。

「そうか、どうりで。昨日の模擬戦は見事な射撃だつた。銃剣術にしても相当だな。まったく、銃口を向けられた相手に親しみを覚えたのは初めてだぞ。だが勘違いするなよ？　あくまで友人としてだ。

私の嫁は

「一夏だけなのは知ってるよ。その肝心の嫁さんは寝てるが、用があるなら出直したほうがいいんじゃないか？」まさか、夜這いだの朝駆けだのじゃあるまいし

笑いながら言つ。むろん誠は冗談のつもりだ。しかし、

「……」

顔を伏せ、ラウラは黙り込む。誠も黙る他無い。とりあえずシグをケースに戻し、鍵をしてから言つた。

「……本当にそなのか」

「……」

何も言わない。非常に気まずい。どうにか言葉の架け橋を作ろうと、投げかけてみる。

「いや、気にしないでくれ。今から走りに行くと言つただろ？」しばらくは戻らないから。まあ、なんだ、ゆっくりしていけよ

「……るか」

「は？」

小声で何事かを呟かれる。聞き返した瞬間、伏せていた顔が突然に誠を睨む。赤面した必死の表情、そして一応は声を落として叫ぶ。「嫁の寝込みを襲つて問題があるか！」

部屋が静まつた。一夏の寝息と、窓から聞こえる鳥のさえずり。穏やかな朝の風景に出現した前代未聞の発言に、誠の脳は理解力の上限を超える。

「……」

何も言えない。ラウラも同じく。二人は互いを見据え、静かに誠がドアの方へ向かつた。外に出る寸前、その肩を叩いて静かに告げる。

「幸運を、少佐」

「ありがとう、少尉」

短い言葉。この瞬間、一人の軍人には奇妙な絆が生まれていた。長く苦境を共にした戦友のような絆。軍に属する者だけが理解しえ

る、純粹な友情だった。双方が双方に最大限の敬意を示し、背を向ける。

部屋を出る。ドアが静かに閉じられた。その隔たりがあつても、誠には背中合わせにラウラがいるという確信を得ている。彼は胸中で新しい友人へと呟いた。

いざとなつたらモザンビーグ・ドリルを。

そして自身の部屋を後にする。しばらくは少佐の健闘を祈つて。

と、

「井ノ上？」

数分後、曲がり角のあたりで声がかかる。見ると知らない顔の女性徒がいた。少佐もといラウラと違い、日本人の顔立ち。髪も黒い長髪で、ポニー・テールに縛つている。どういうわけか袴姿に竹刀を携えているが。

「あー、悪い。クラスの人か？」

「ああ。直接話すのは初めてだな。篠ノ之^{しのの}第^{はつ}だ、ようしぐ。昨日の模擬戦、なかなかよかつたぞ」

「ありがとう。改めてよろしく、井ノ上^の誠だ」

握手を交わしつつ、冷静にその名を覚える。

篠ノ之……IIS開発者の妹か。

「どうかしたか？」

顔に出ていたのか。怪訝な表情の第が見ている。

「いや、なんでもない」

「そうか？ その格好からして何でもなくは無いと思うのだが」

またもや同じようなことを言われる。若干の乾いた笑いと共に答えた。

「気にしないでくれ。一応、アメリカの軍属になつてゐるんだ。このほうが落ち着くし、動きやすいんでね。早朝のランニングにはこれ

がいい」

「早起きしてトレーニングか。感心する。一夏にも見習つて欲しいものだ。ああ、そうだった。一夏は起きているか？ そろそろ鍛錬

の時間なので、迎えに行こうと思つたんだが

「一夏なら

言いかけ、口を噤む。どう説明すればいいのか。今、部屋には間違いなくラウラがいる。彼女の決意から察するに、この眼前にいる少女に見せてはいけない光景が繰り広げられているはずだ。いやしかし、ラウラはあれだけきつぱりと嫁を公言している。もちろん篠も知つているだろう。むしろ知らないほうがおかしい。であれば。

「井ノ上、本当に大丈夫か？」

「あ、ああ、もちろん。一夏か。そうだな……その前にものすごく聞きにくいんだが、一つだけ質問してもいいか？」

「まあ、私に答えられるのなら……？」

頭の上に疑問符を浮かべている。誠は静かに深呼吸をして、同じく静かに尋ねた。

「お前は、一夏のことが好きだつたりするのか？」

「なつ！？」

瞬間、篠の顔が紅潮する。周囲の温度が五度は上がつただろう。瞬間湯沸かし器も彼女には敵うまい。そんな無責任な感想を抱く誠に対し、篠は矢継ぎ早に述べた。

「ば、ばばば馬鹿なことを言うなつ！ 貴様、わ、私はただ幼馴染として一夏と共に過ごす責務があつて」

「わかった、もういい、落ち着け、大丈夫だ。友達以上恋人未満なんだな、オーケイ。それでいい。それでいいと思う。オーライ、それでみんな丸く收まると思うから」

半狂乱の篠を必死でなだめる。数秒して彼女が落ち着きを取り戻すと、改めて誠は言う。

「悪かったな、変なことを訊いて。大丈夫か？」

「まったくぐだ……！ お前は一夏とまた別の意味で危険人物だぞ！」

？」

「そつか。わかった、自覚しておぐ。一夏ならたぶん起きてはいると思つ」

「……起きているのだな？」

「ああ、起きてはいる。起きていらるよ。いひんな意味で起きている」

「何故そこを強調する」

ジト目で睨まれる。その理由が言えるはずもない。まだ息の荒い
筈へ、彼は告げた。

「トランクル」

「河二三」

「何だ?」「ああ、班長、お二方お出でになつたのです。」

「何の話だ？」

「気にするな」とかぐ急げ。ただもつ患が上がつてゐ」とは直覺

過呼吸は程度によるが危ないからなしろ?

「誰のせこだと思つてこる」

「わかつた。ちょっと待つてろ」

とりあえずは呼吸を戻さなければ。その場を離れつつ懐を探る。

通路脇の自販機。そこに駆け寄つてコインを投入。飲み物を買いかけて、気づいた。何を買うべきか。

緑茶でいいよな。
日本人だし。

率直な意見。そのままボタンを押す。ガコーンと音がして、よく冷えた緑茶の缶が落ちてきた。それを持って簞の所へ戻り、

「ほら、飲んでけ」

と差し出す。

良いのか？

「ああ、せめてもの謝罪だ。そ

「今度、病院を紹介したまつが良さそうだな」

半ば呆れ顔で、ようやく緑茶を受け取る。飲み干すまで数秒。

「缶は捨てとくよ」

「すまない」

どうにか元の調子になつてゐる。誠に空き缶を渡すと、彼女は向き直つて言つた。

「それでは、また後で会おう」

「ああ、また後で。……健闘を」

「最後までそれか」

苦笑を通り越して完全な呆れ顔だつた。変人と思われるだひつ。彼女が部屋にたどり着くまでの間は、歩き去る篠の背をしばらく見た後、誠も当初の目的を思い出して歩を進める。途中で「ゴミ箱を探さなければ。

ややして背後から聞こえた篠の怒声を聞きつつ、先ほど自分で述べた言葉を思い出して一人呟く。

「知らぬが仏とは、日本人はうまいこと言つたもんだ」

ふと通路脇に「ゴミ箱」があった。アルミニ缶と書かれている。緑茶の空き缶を投げ入れ、日本人名のアメリカ人は玄関へ向かつた。

ほんと女子校のよくなこの学園でも、やはり兵科学校とまつたく違うわけではないらしい。訪れた射撃場で、誠はその事実を実感した。五〇メートルから二〇〇メートルの射撃レーンが十一あり、さらに狙撃訓練用の仮想一キロレーンが一つ。その隣には小部屋が三つほどあって、そちらはCQB（近接室内戦闘）用の専用部屋だつた。これが誠には意外で仕方ない。てつくり、IS戦闘だけに主眼を置いて操縦手そのものの技量は重要視されないものだと思っていた。だが軽く見て回つたCQBルームはどれも実践的な作りで、小さいながらも対テロ部隊のそれと遜色ない。キリング・ハウスを参考にでもしたのだろうか。

ついで、ここは心遣いもよかつた。無料のドリンクバーが置かれていて、財布の中身に考慮することなく利用できる。二十四時間、開いているのも良い点だ。銃や装備、模擬弾を借りるにはコンピューターに学生証を提示し、選ぶだけ。立て続けに一杯のコーラを飲

んだ誠は、紙コップを『ミ箱に捨てた後、そこで使える得物をざつと見た。

射撃レーンもやってみたいが、まずはCQBルームだろう。となると、必然的に取り回しの良いサブマシンガンか、短銃身のカービン。しばらく操作していると、さらに素晴らしいことに気付いた。ここで借りる銃は、カスタムまで選択できるらしい。ダットサイト一つ、その外観から光点までを吟味できる。一体、この機械の中はどういう仕組みになつてているのか。

ややして誠は七インチ銃身のディアブロ・ライフルに、チエコスロバキア製のCZ75自動拳銃を手にしている。予備弾倉はディアブロが四つ、CZ75が二つだった。ライフルはスリングにダットサイトだけだが、後者の拳銃は面白いカスタマイズになつてている。銃口部分にスパイク付きのマズルガードが追加された、俗に言うストライク・ガン。凶悪な外観のこれは、近距離、特に出会い頭の揉み合いで役立ち、さらに銃口を押し付けた際の発砲不可を防ぐ。

追加でベルトキットとホルスターを注文。しばらくして出てきたそれを身に付け、ベルトキットに予備弾倉を詰め込んだ。ホルスターは右腰に、CZ75をコック＆ロック（初弾を装填してハンマーを起こし、安全装置をかけた状態）で収める。ホックは外し、拳銃とホルスターの間へ挟み込んだ。

ディアブロを点検。ダットサイトは倍率の無い筒型だった。右上のスイッチでオン・オフを切り替える。警察や準軍事機関であるI.S学園のような場所は、これよりも視界と見栄えの良いオープンスクリーンを好むらしい。ただ、そちらは見た目が脆そうで、実際に壊れやすかつた。過去の経験から言つと、古臭いながらも堅牢で信頼できる筒型に限るのだ。カラシニコフを好むのも、同じような理由である。

ペイント弾を満載した三十連マガジンを込め、初弾を装填。セイフティをかけて手近なCQBルームへ入つた。セイフティ一体のセレクターを単発位置に。ダットサイトの電源をオンにしていざ始め

ようとした瞬間、左腰で振動が起きた。携帯電話に受信。マナーモードのため、音はせずバイブレーションのみ。

『嘆息してティアブロを傍らに置く。それから電話に出た。

「早起きしてんのは誰だ?』

『俺とお前、それに何人かだらうな』

電話の相手は言う。誠の日本語に対して英語での返答。返しからして聞き間違えはない。日本語を喋れるなくとも、聞き取れるらしい。

『できればもう少し寝たかったよ
と、今度は英語で合わせてやる。』

『お前がこの時間に起きないわけないだらう』

『あんたのおかげだ、ドク』

ドク、と。誠はそう呼んだ。それは対する男の名前なのか、それとも職業、ドクターを示しているのか。

『そうだな。こちらもお前のおかげだ。それで、学校生活を楽しんでいるかね?』

『それなりに。驚いたことにまだ一皿だが。はるばる海の向こう
から俺のために電話してくれたのか?』

『半分正解、半分不正解だ。お前のためでもあるし、ブラックウイ
ドウのためもある。概要はモニターしているが、詳細は昨夜のテ
ータリングの分しかない』

『直接訊きたいと?』

『ずず、と電話の向こうで何かを啜る音。コーヒーでも飲んでいる
のか。』

『そういうことだ。教えてくれ、井ノ上。一体どんな使い方をした
んだ。シールド出力は問題ないが、コンテンサ容量が著しく落ちて
いたぞ。自修復で回復したようだが、それでも相当数のバグが出
ている』

『具体的には?』

『一番ひどいのは三次元レーダー。特性ロックオン機能に異常が起

きている。それと、ブラックウイドウ自体のシミュレーションが恐ろしく早い。補助AI（人工知能）の推奨では、CQC（近接格闘戦）兵装の見直しが出ている。とりあえずはデータを反映して、関節部の接触と反応速度を向上させた。五パーセント増しだな『さすが対応が早いね』

『世話好きのだけさ。それで、何をした?』

誠はCQBルームを出て、教員用の喫煙室へ入った。煙草を取り出して一つ吸つてから言つ。

「織斑一夏ついているだろ」

『なるほど。何も言つな。察しはついた。近接専門の機体と銃剣で立ち向かつたわけだ』

呆れたような口調でドク。恐ろしく鋭い推測、洞察力に誠は内心で舌を巻いた。

『うまくやつていけそうか?』

「学園で?」

『とうより、織斑一夏と』

「わからんね」

もう一度吸う。

「悪い奴じゃない。けど、どうにも理想論でしか動いていない気がする。現実と夢の区別がついてない。あるいは』

『現実を知らない、か』

続く言葉を先に言われる。

「その通りだよ、ドク」

『あまり気にしないことだ。お前の気持ちはわかる。そういう場所でそういう物を見て育つたんだ。けれども、井ノ上、年長面した子供ほど見苦しいものも無いぞ』

「俺は子供か?」

『子供だ。その連中に比べれば遙かに大人だろうがね』

沈黙。最後に一度、煙草を吸つて備え付けの灰皿に放り込む。子供。その単語を胸中で反芻させた。自覚を持つために。

「向こうの足取りは？」

別の話題。若干、声音が低まつた。喫煙室を出る。

『わからん。NSAからは何も無い。同じだよ。俺とお前以外、内部告発の騒ぎで死んだと言つてる。ただし何かは掴んでるようだ。近いうちにお前へ会いに行くと』

「教えてくれると思うか？」

『返答は一ード・トウ・ノウ。必要だと思えば知らされる。まあ、半分は様子を知りたいんだらつ。自覚が無いと思うがな、お前を気にかけている人間は以外と多いだ』

「子供として？ それとも？」

『両方だ』

遮られる。僅かにドクの口調に強さが増した。一拍置き、彼は言う。

『俺も織斑一夏の資料を読んだよ。ずいぶんと人気らしいな』

『そうみたいだ。少なくともドイツの少佐は骨抜きにされてる』

先ほどの出来事を思い出し、笑いが漏れた。茶化すような口調で、

『お前も見習え？ いつまでも昔を引き摺るなよ。女の一人でも作つてみろ。癒されるぞ？』

「機会があれば。でも、その前にケリはつけたい。篠ノ之東にしろ、NSAにしろ」

『両方を敵に回したいか？』

「それは御免だね。計算だよ。……大勢助かるほうに味方する」

「どこか疲れたような響き。ため息。それから言った。

「ありがとう、ドク。あんたがいてくれたおかげだ」

『ああ。感謝ついでに一つ頼みをきいてもらいたい』

「なんだ？」

『馬鹿な真似はするな』

ふつ、と短く笑う。

『わかった』

『本當か？ ……まあいい。とりあえず、このへんで失礼するよ。』

では『

「了解」

電話を切る。大きく息をついた。電話をポケットに戻すとき、手に硬い金属が当たる。ディアブロ・ライフルだった。そういえば、準備を整えたのにまだ一発も撃つていらない。

壁の時計を見た。朝食まで一時間を切つていて。着替えとシャワーの時間を入れ、ちょうど良い頃合だった。名残惜しさを切り捨て、ディアブロとホルスターのストライク・ガンを返却口に押し込む。次いでベルトキットも外して同じく返却した。焦ることは無い。在学中はいつでもこられるのだから。

子供、か。

再びその言葉を噛み砕くように呴く。ゆっくり、じわじわと浸透させるように。煙草をもう一本吸いたかつたが、自制心が働いた。力チリ、と。壁の時計の分針が音を立てる。

昼休みの屋上には色鮮やかなビニールシートが引かれていた。そこにあぐらをかいて座る誠は、無言の緊張を感じ取つて周囲を眺めた。ここにいるのは誠以外に六名。一夏と筈、セシリ亞とシャルロットにラウラ、そして彼等とは別のクラスである生徒。名前は鳳鈴^{ファンリ}音^{シン}といつた。中国の代表候補生である彼女は、ツインテールの髪に小柄な少女。一見すると可愛い美少女だろう。ただ、その周囲に渦巻く活発な雰囲気は誰でもわかる。見た目に反して、ずいぶんと行動的なようだつた。実際、誠は会つて間もないがその印象で固まつている。

しかしづいぶんと奇妙な光景だつた。学食で買つてきたホットドッグ一つにコーラのペットボトルを置いた誠に、周囲では自作らしき料理を持ち寄つた少女たちがいる。自分で食べるわけではないらしい。一夏の昼食が無いからだ。つまり五人の少女は、五人ともが彼の食事を作つてきたといふことになる。この場で誠は場違いな感を否めないが、そもそもの原因を作つたのは一夏だつた。

遡ること三限目の休み時間。まだ止まない質問責めの嵐の中心にいた誠のところへ、一夏が来たのだ。

「悪い、誠。少しいいか？」

「何だ？」

「いや、ちょっとな」

どうにも場所が悪いという素振りの一夏に、逃げ場が出来たと考えた誠は先導されて教室を出た。たどり着いたのは階段の踊り場。「それで？ 愛の告白でも聞かせてくれるのか？ 僕にその趣味は無いぞ」

「俺も無いよ。いや、そうじゃない。昼休みって予定あつたりするか？」

「昼飯を食べる」

「知ってるよ。じゃなくて、誰かと一緒に食べるとか」「いや。学食のつもりだけど、注目されるのは嫌いだからな。適当に買つて静かな場所で食べるよ」

さすがに食事の時まで質問されたくない。それに今まで花のない軍隊にいたのだ。突然すぎる環境の変化で、このまま行くと多少の女性不信になりそうだつた。

「それじゃ場所とかは決まってないんだよな?」

「ああ。何だ、一緒に食いたいか?」

「そなんんだけど、少し協力してくれ」

「協力?」

首を傾げる。不審そうな誠に、一夏は述べた。

「いい場所があるんだけど、お前も来てくれないか?」

「俺も、つてのは俺たち以外にもいるつてことだよな」

首肯が返る。

「五人いる。前もそのメンバーで昼飯を食べたんだけど、場が持たなかつたんだ。特にサンドイッチが……なんというか独創的な味で」「酢豚は?」

「酢豚は美味かつた」

どこからか来た声に答える一夏。彼は言つてから誠を見た。俺じゃない、と首を振り、

「彼女だよ」

「は?」

誠が指差し、一夏が振り向いた先。そこにはいたのが鳳鈴音である。

「おーす、一夏」

太陽顔負けのまぶしさで鈴音。対し、顔を青ぐするルームメイトがいた。

「……いつからいた?」

「そつちの人が昼飯を食べるつて言つたとこから。ねえ、ていうかあんたが井ノ上つて人だよね?」

「ああ。井ノ上誠だ、よろしく。……初対面だよな?」

見覚えが無いものの、もしゃクラスメイトだつたかと不安げに訊く。すると鈴音は楽しげに笑う。

「うん、そうそう。あたしは一組だから。鳳鈴音、よろしく」

一夏を通りこし軽い足取りで近づいてくる。その手が差し出された。握手か、と思った刹那、鈴音の指先は誠の胸板へ触れる。「おー、すゞ。けつこう鍛えてるんだ。うわつ、腹筋めちゃくちや割れてる。あんた何？ 筋肉オバケ？」

「それは馬鹿にしてるのか？」

「まさか、そんなわけないじゃん。褒めてんの」

「そうなのか。でも鳳、あんたもすゞことと思うよ。初対面の人間によくここまでできるな」

半ば呆れる。胸から腹部までをぺたぺたと触られていた。くすぐつたいような、もどかしいような感覚。

「あー、なに、あたしにも触らせりつて言つの？」

悪戯つぽい口調。

「人を強姦魔みたいに言わんとくれ」

「冗談。それはそうと一夏、あたしの酢豚、美味しかったのよね？」

「あ、ああ、美味かつたぞ」

やや引きつった笑顔。一体、前回の昼食会とやらで何があつたのか。喜ばしい出来事ではないようだが。

「うおつし、とりあえずセシリアには勝つたわけだ。んじゃ、今日のお昼も楽しみにしてなさいよ」

「そりゃもちろん楽しみだよ」

顔が真逆の感情になつてゐる。鈴音は気付いてるはずだが、何も言わなかつた。やたらと高いテンションに上機嫌をプラスして去つてゆく。

「そんで、鳳の他には？」

鼻歌混じりに遠ざかる背中を見送り、訊く。

「……竇、セシリ亞、シャルロット、ラウラ」

「……」

泥沼だった。特に筹とラウラはまずい。今朝の決戦から半日足らず、どれほどの修羅場になるのか。いや、そもそも一人以外の女子、鈴音を入れて三人も一夏に好意を抱いているのだろう。最も、一夏本人に自覚はなさそうだが。昨日、千冬が評した唐変木といつ言葉が蘇る。

「とりあえず、だ。一夏、学食はお前の奢りでいいか？」

力無い額き。微かな同情を覚えた。

それから現在に至る。五名の女子による無言の睨み合い。膠着した状況が五分ほど続いていた。誠の隣に座る一夏は、果たしてどんな心境なのか。

「……まあ、なんだ」

どうにか状況を開拓すべく、誠が口を開いた。

「早くしないと昼休みも終わることだし、そろそろ食べないか？」

「そ、そうだね！ いつまでこうしても仕方無いし……」

助け舟に乗つたのはシャルロット。別名、前科持ち。誠が見る限りでは一番話がわかる人物だが。

「そうだな」

「……確かに」

「時間ばかり流れますもの」

「最もではある」

それぞれが一言ずつ述べる。しかし相変わらずだ。とりあえずはホットドッグの包みを開けた。

「う、うわあ、美味しそうなホットドッグだね！ 自分で作ったの？」

シャルロットが言う。混乱してるのは明らかだ。ビニール袋にはメーカーの名前と商品名がでかでかと描かれている。だが、これに乗つかるしかない。

「いやいや、学食の購買だよ。自炊の経験なんてないから。軍でもいつもレーシヨンばかりだつたし。自炊つてどうも難しそうなんだよ」

「そんなことないよ。やつてみるとけつじつ楽しいし」「あー……じゃ、じゃあテュノアのそれって自作なのかな？」

手元の包みを指さす。

「う、うん。そうなの」

「やつぱつフランス料理？」

「そつじようと思つたんだけど、日本の料理も勉強しよつと思つてやめたんだ。今日は肉じゃがとかハンバーグとか、そつこつのを作つてみたの。あ、でもデザートだけは作りやすいのだけど」

「へ、へえ。どんなの作つてきたんだ？」

「えーと、梅のムースとか。ほんとにちつちつなやつなんだだけね

「そりやす」」いな。な、一夏！」

バシッ、とやや強めに肩を叩く。彼はひざを向き、

「そ、そうだな」

と引きついた笑顔を向ける。まるでトラウマが蘇つたような顔だ。本当に前回はどんな惨劇が起つたのか、いよいよ気になる。

しかしそんな余裕も無かつた。会話は進んでいる。誠とシャルロットの間だけは。それもかなりぎこちない。シャルロットに田配せする。すると声に出わす、口の動きだけでじつ伝えてきた。

『どつにかして』

いやじつちのセリフだよ。

とにかく話題を探さなければ。ホットドッグを一口かじり、思考をフル回転させる。だが何がある。まだ今日で一田田だ。普通、新しく来た奴には向こうから質問が来るもの。クラスにくるとき、質問責めにしてくる連中がとてもありがたい存在だと思つた。

そして気付く。シャルロット以外の人物に振れる話題があること

に。

「し、篠ノ之！」

「な、何だ？」

突然の呼び掛け。笄の身がびくくりと縮こまる。

「今朝、うちの部屋であつたあれは

「

例えるならば疾風、あるいは雷だった。猛然と簎が膝を上げた、その刹那。誠に見えたのはそこまでである。胸ぐらを掴む腕は鬼神。捻り上げられた拳が喉に食い込む。呼吸ができない。そして誠が宙へ浮いた。投げられたのか。現実感の伴わない判断は間違いである。簎が彼を引き摺っていた。あらゆるレース記録を塗り替えるが如き速度、それも片腕だけで誠を掴み。一瞬で階段まで連れて行かれ、壁に叩きつけられる。

「貴様はあ……！」

ゆらりと簎の顔がこちらを向く。両目に宿る光。殺人を覚悟した者の目だ。

「お、落ち着け！　話せばわかる、わかりあえるはずだ！　まだ手遅れじゃない！」

「黙れ馬鹿者！　なぜあの時にさつきと言わなかつたのだ！」

「言つただろ！？」

「あれでか！　貴様はあんな忠告でわかるか！？」

「それは……」

今朝の会話を思い出す。数秒かかる。じばらくして、

「あれじやあわからねえよ」

真顔で首を振つた。胸ぐらの拳に力が込められる。

「何だと？」

「わ、わかりません」

気圧され、訂正。久々に死を実感する。

「いいか？　次からはもつと直接的に言え。余計な捻り入れるとその口を縫い合わせるぞ」

「大丈夫だ、大佐。まだカルロにはなりたくねえ」

「面白い奴だ。斬るのは最後にしてやる」

最後どころか中盤で殺されそうな宣告だ。それを言つたら文字通り消されてもおかしくはない。きっと屋上から尋問された拳句に落とされるのだろう。

「とにかく！　……わかつたな、井ノ上」

「アイ・コニー
「了解……」

拳が離れる。殺氣めいた雰囲気を漂わせる筈の後を追い、自問する。「これが馬鹿なことなのか、と。

黒い炭酸を飲み干す。誠と筈が席を外している時、膠着状態の戦場は緩やかに終戦を迎えていた。シャルロットに鈴音が協力、そこでラウラを味方に付け最後にセシリアを懐柔、シャルロットが残る一夏を気遣うような形で幕を下ろしたらしい。ビertonく府に落ちないながらも、誠と筈は自分の位置に戻つて食事を終え、現在に至る。

「コーラだけじゃ体に悪いよ」

飲み干したペットボトルをホットドッグのビールとまとめているとき、シャルロットからコップが差し出される。香り豊かな緑茶だった。日本料理を勉強しているとは言っていたが、これもその延長戦と判断すべきか。

「悪いな

「気にしないでよ。せつせ無茶ぶりしちゃつたし」

まあ、確かに。

その言葉は心の中だけに留めており、受け取った緑茶を啜る。

「そういえば、一夏」

「ん？」

まだ食べ終わっていない唐変木は疑問符を浮かべて見返す。顔色が戻っているということは、トライアは一先ず姿を隠したらしい。

「午後からのエス実習つて、あれはまた模擬戦やらされたりするのか？」

「いや、無いだろ。だよな

周囲の少女たちに確認する。まずシャルロットが言つ。

「無いと思うよ。たぶん、あれは自己紹介みたいな感じだったと思うから。井ノ上君つて、専用機も持つてゐるし

「そうですね。一夏さんの時はわたくしがお相手しましたけど、あれは成り行きでしたし。織斑先生としては、生徒の実力を知つておきたいのだと思いますわ」

と、セシリ亞。

「え、何？ あんた模擬戦なんてやらされたの？」
意外そうな鈴音の問い掛け。

「運動程度に一夏と。ほんの少しだけな」

「へえ。どうだった、勝つた？」

「負けたよ」

と、もう一口啜る。

「いや、でもあれは半分運みたいなもんだし」

一夏が言う。食べ終わつたよつた。こちらはセシリ亞から差し出された紅茶を飲んでいる。

「運も実力の内だ、一夏。お前の勝ちだよ。運の無い奴は死ぬだけだ。俺は死んで、お前は生き残つた」

「死んだって……模擬戦だぞ？」

言い過ぎだろ、というような苦笑。

「それも運だ。実戦で負けず、模擬戦で負けることができた。敗因を見直して死亡率を減らせるチャンスになる。それに、模擬戦だって事故があるだろう。結局は運次第なんだよ」

「そんなもんかなあ」

納得いかない。そんな気持ちを全面に出して言つ。

「そんなもんだよ。デュノア、ありがと」

「コップを返す。一夏が口を開いた。

「でも心配すんなよ。もしそうなつたら俺が助けてやるから」

「そうかい？ そりや頼もしいよ」

笑つて言つ。と、一夏の表情が僅かに不満を現す。

「何だよ、信じてないのか？」

「信じてるよ。お前の気持ちはさ。けど人の命を助けるつていうのは、それほど簡単じやない。誰かを助ける時は大抵、そいつ一人分

より多くの人間が危険に晒される。何の犠牲も出さずに助けるなんてのは、都合の良い理想論だよ、一夏」

「冗談めかした真実、いや現実。笑い話のよつに語るのは、もちろんこの場の雰囲気を崩したくないためであるが、もう一つの理由もあつた。いずれ一夏もそれを知ることになる。それまで夢を見ているわけにはいかない。だが、少なくとも準備ができるまでは意見程度に留めておこうと。

思ひながら、誠はこれが傲慢だらうかと感じる。電話の男、ドクの言つた“年長面した子供”になつてゐるのか、と。しかし違うと確信できる。これは押し付けがましいが、誠の希望だ。自分は現実を知つて育つた。しかし一夏たちはそうでないのだ。少なくとも、理想は捨てずに、現実の中でその理想を追つて欲しい。そう考えていた。

「そんなことねえよ、誠」

だが一夏にそんな思惑が伝わるはずも無い。彼は朗らかに笑つて言つ。

「俺はもう無力じゃないんだ。守れる力がある。だから、犠牲を出さずに助けることだつてできる」

「守る力？」

何のことだ。率直に疑つ。守れる力、そんなものがあるはずも無い。しかし、思い当たる節はあつた。

「一夏、お前まさかＩＳのことを言つてるのか？」

「ああ。当然だろ？　白式のおかげで、俺はもう守られるだけじゃなくなつた。誰かを助けられる。千冬姉の代わりに戦えるんだ」何が生まれる。嫌な感情だ。無言で押し殺すと、静かに告げる。「ＩＳは……ただの兵器だ。兵器に意思は無い。信用しすぎた時、危険になるのはお前じやなくお前の周りにいる人間だぞ」

「そんなことないさ。白式は答えてくれる。あいつは兵器じやない。本当の平和だつて作れるかもしない。ＩＳはそういう希望の落ち着け、と。何度となく言い聞かせた。アフガンの砂の上。銃

声と爆音、砲撃の地響きと砂埃、そしてむせ返る硝煙の中でもうした時のように。だが叶わなかつた。

ISは希望だ、と。その言葉を聞いた瞬間、誠の中で別のスイッチが音を立てる。御し得ない怒りだ。気がついた時、状況は一変している。立ち上がつた誠と、彼が胸ぐらを掴んで引き起こした一夏。足元に飲みかけの紅茶がこぼれている。セシリアの紅茶だつた。

「今、何て言つた？」

「誠」

言い募ろうとしたその喉首に、拳を押し付けて黙らせる。

「余計なことはいい。何て言つた？」

「井ノ上」

「黙つてろ！」

最初にこの現状を認識した少女、ラウラへ叫ぶ。彼女は身をびくつかせ、言葉を殺した。

「ISが希望だと、夢物語もほどほどにじる。現実を知らない青二才が、自分勝手な理想ばかり語るなよ。 デュノア」

瞬間的な豹変。それに対応することができず、ただ表情を凍らせて見ていた少女の一人に呼びかけた。

「お前はデュノア社社長の一人娘だろ？ ISでこの世界がどう変わつたか、知つていいはずだ」

「ボ、ボクは子供つて言つても、愛人の娘、だから……」

言いにくそうな口調。実際、そういう内容だ。感情の奔流が押し寄せている誠の頭でも、それを訊いてしまつた恥を覚える。

「すまない。ならボーデヴィッヒ、お前はドイツの軍属だ。あの国も無関係じゃあなかつた。今どついう戦場が繰り広げられているかわかるだろう」

「……私はまだ実戦経験が無い。見たことは」

「見たことが無くても、知識としてはあるんじゃないのか？」

問い掛け。答えは返らない。無言の肯定か。

誠は舌打ちし、一夏の体を突き飛ばす。屋上に転がつたルームメ

イトの前へ立ち、見下ろした。そして言ひ。

「ほんの少しでも世界情勢を知りうとは思わなかつたようだな、織斑」

何人かは氣付いただろう。誠がいつものよつに一夏でなく、織斑と呼んでいる。他人行儀な口調。おそらく、わずかながらに芽生えていた友情は、すでに一片と残つていない。誠にとつて、もはや織斑一夏とは敵であつた。

「ISは強大だ。強大すぎる。時代にはふさわしい兵器とその流れがある。だがあれが登場してから全てが変わつた。その流れが壊れた」

「どういう

「ISの登場以前、資源国が運用していた航空兵器や戦車、そういう金のかかる兵器がどうなつたかわかるか？」

しばしの間。一夏は答えなかつた。答えられなかつた、というのが正しい。

「それも知らないか」

明らかな軽蔑。誠は続ける。

「日本、アメリカ、イギリス、中国……世界で有数だつた力のある国家は、そのどれもがISの開発に力を注いでいる。実際、一機のISで十数機の戦闘機や攻撃機に勝る結果を残すことができ、その火力は重戦車にも匹敵するからだ。ではISの登場で使われなくなつたそういう兵器は、いつたいどうなつたのか。お前にはわからないだろ？」「うう」

傍らに膝を付き、また胸ぐらを掴んで顔を引き寄せる。

「ブラックマーケットだ。維持費すら渋るよつになつた有力国家は、その保有するほとんどの兵器を裏の武器市場に売り出した。それも開発費より遙かに安い値段で。そういうおこぼれを買つのは、いつだって紛争地帯の小国や武装集団だ。だが連中が持つのに、そんな兵器は強すぎる」

「物だけがあつても、使えなきや」

「使えなければ意味がないか？ そのとおりだ。だがな、そんな国家でパイロットや技術者が必要とされるか？ されないよ。国は大金をかけて育てた人員をあつさりと解雇して、その大勢は傭兵のように生きている。兵器のアドバイザーとしてだ。理解できるか？ 迫撃砲がせいぜいだつたアフガンで、今は精密爆撃や重戦車同士の戦闘が続き、上空じやあ最新だつた戦闘機が自分たちの不可視安全領域・ライゾを巡つて空中戦を繰り広げている。アフガンだけじゃない。今のは紛争は、局地的な第三次大戦そのものなんだよ。国民が飢え、殺され、救援に来た国の軍は高度な科学技術によるテロで返り討ちにされる。ISの登場でミリタリー・バランスは完全に崩れた。その根底にあるのは、ISと篠ノ之束という女なんだよ」

地面に押しつけ、突き放す。再び立ち上がった。

「これが現実だ、織斑。お前が知るうとしなかつた、血とクソしかない現実だ」

立ち去りかかる。一瞬、箒が気になった。故意ではなかつたにしろ、彼女に関係のある点もあつた。しかしそれを本格的に気にかけるより早く、一夏は再び言つ。

「なら

振り返つた。織斑一夏は立ち上がり、真正面からこちらを見ている。その口が言葉を紡いだ。

「ならその兵器だつて俺が壊してやる。その力がある。それが無くなれば、お前の言つ現実も」

言い終わる前、その頬を殴りつけていた。あまりにも馬鹿げたセリフ。誠にはそう感じられた。

「織斑

「よせ、井ノ上！」

追い打ちをかけようとした瞬間、左右から誰かに押さえつけられる。箒と鈴音、それにラウラだつた。それでも尚、三人を振り払つて殴りかかるうとする。

「一夏！」

「一夏さん！」

シャルロットとセシリアの声。二人が一夏へと駆け寄り、抱き起こす。

「落ち着け、井ノ上、やめろ」

「さつき黙れと言つただろう、ボーデヴィッヒ。織斑！」

怒鳴る。喉を痛ませる絶叫だ。もう抑えは効かなくなつていた。

「お前が壊すだと？ ふざけるのもいい加減にしろ！ お前が幼稚な理想をほざいてる間に、どれだけの兵士が死んだと思つてやがる！ 俺たちはガキの妄想のために殺して、殺されたんじゃない。仲間を助けるために戦つたんだ！ 俺たちは必死で生き延びた、必死で生きようとした！ それをお前は今、侮辱したんだよ！ 俺は、いやあいつらは絶対にそんな下らない理想を掲げなかつた。誰一人、自分を無力だなんて嘆いたりしなかつた、力があると溺れたりもしなかつた！ 現実を見て、生きて、そして死んだ！ それを侮辱するな、あいつらを無力だったなんて言つな、俺の仲間を一度と侮辱するな！」

絶叫が終わる。耳鳴りがした。息が荒い。ともすれば泣きそうな気持ちだつた。いや、もしかしたら泣いているのかもしれない。

「もう一度、模擬戦を申し込む」

掠れた弱々しい声。誠は静かに言つ。

「次は手加減も何も無い。俺はお前を殺すつもりで撃つ。いや、お前の周りの人間も」

ゆつくりと押さえつける三人の手を振りほどき、この場に背を向ける。足が震えた。今度こそ一夏は何も言わない。階段を降りて踊り場に到着した瞬間、誠は膝から崩れ落ちた。両手で顔を抑える。そこから涙と嗚咽が漏れる。

「湊……」

その手を離してしまつた親友を呼ぶ。何度も、呼び続けた。悲痛な嗚咽と共にその姿を探し、顔を涙で汚した。そうすればもう一度だけ会える気がしたのだ。だが現実はそうならない。そのことは誰

より誠が一番理解している。だから泣き続けた。誰の目にも止まらない階段の踊り場で、親友の姿を探して泣き続けたのだ。

跳ね上がる銃身を抑え、スコープの視界を正す。十一倍率の十字線から目を離さずに、構えたボルトアクション・ライフルの薬莢を排出、次弾を装填。糸に似た吐息で心拍数を落ち着かせ、人差し指がトリガーへ触れた。照準を微調整、目標は一一〇メートル。計算で無く“カン”で着弾点を予測する。元より今の誠は複雑な計算などできなかつた。まだ心がざわめき、波立ち、苛立つている。

発砲。レミントンが作り出したモデル700が、その衝撃を露わにした。手の内で跳ね上がる。ぶれた視界が元に戻つたとき、遙か一キロを超える的には右端に一点の着弾跡ができていた。命中、しかし成功ではない。

ここは今朝訪れた射撃場で、むろん本当に一キロ狙撃をしているわけではなかつた。レミントンは朝に手にしたディアブロやハンドガンと違い、限りなく実物同様に製造された精密なレプリカである。撃つているのはペイント弾ですらない空砲で、射撃目標の的もスクリーン上に出力された幻影にすぎない。銃口部に取り付けられた、弾道を再現する特殊なレーザー照準器によつて架空の弾を撃ち出す。再び排莢。弾丸を装填しようとして、今のが最後だつたのだと知る。何も無い空間をロッドが動いた瞬間、誠から舌打ちが漏れた。ベルトキットを探る。今朝と同じ格好だ。制服はシャワールームのロッカーに置いてある。つまりレインジャー時代と同じACU迷彩の上下。一度、部屋に戻つて取つてきた。昼間の騒ぎからすぐのことだ。それ以来、部屋どころか教室にも戻つていない。つまり授業放棄。

音と衝撃以外に何も無い偽の弾丸を数発、つかみ出す。射撃場の自動ドアが開いたのはその時だつた。反射的に振り向く。ブロンドの髪をした少女がこちらを見ている。シャルロット・デュノアだつた。

「……ここにいたんだ」

一瞬、不安と驚愕の入り交じった表情を見せたシャルロットは、すぐに微笑を浮かべていつ。ビニカギにちない。原因となっているのは毎回の恐怖か。

「みんな、心配してたんだよ」

そつと近づいてくる。

握んでいた弾丸を一発、薬室へ送り込んで装填した。再び構え、口を開く。

「狙撃は良いもんだよ。どうこいつ状況にあっても、ただ命中させる」とに集中できる。余計なことを考える必要がない

乾いた発砲音。狭い、それも夜の射撃場に甲高く響いた。びくりと身を硬直させるシャルロット。誠は深く息を吐き、的から田を離さずに言つ。

「すまなかつた、デュノア」

「え？」

「嫌な質問だつたる。それにあの場をぶち壊しにした。悪かつた」

「別に、それは……」

「口」もる。誠から乾いた笑い。

「軽蔑しただろ？」

「そんなこと……」

「ないか？ それこそ有り得ないよ。目の前で惚れた男を殴られたんだ。理由はどうあれ、むかついて当然だよ」

そう言つてベルトキットを脱ぎ、レミントンと一緒に返却口へ放り込む。横田で見ると、シャルロットの顔は僅かに赤みがかった。怒り、というより羞恥心だと判断した。

「あいつに惚れてるって、まさか自覚も無かつたわけじゃないだろ？」

「？」

「ただけど……正面から指摘されたのは初めてだつたから。あの、いつから？」

「普通、お前等を少し見てればわかると思うけどな。今日なんて俺

が行かなかつたら五人であいつを取り囲んでたんだろ？ 誰だつてわかるさ。……さて」

煙草を取り出す。一本を口に挿じ込んで火をつけると、一瞬遅れてシャルロットが咎める。

「こゝは禁煙……ていうか未成年は」

「こゝはあらゆる国家に拘束されないんだろう？ 法律は国のもので、国の中に存在しないこゝじゃ未成年なんて制度は無い。まあ、気にするなよ。もう行く」

踵を返した。怯えたシャルロット、その脇を通り過ぎよつとし、「あ、待つて！」

袖を掴まれる。制止の呼び掛け。予想外の行動と力強さに、煙草が落ちた。

「何だ？」

ようやく出た言葉はそれだ。正面から、それも至近距離で。それまでにもシャルロットは誠を恐れていたのだ。脅しになつても不思議なかつた。

「その……今日は部屋に帰れないんじやないかと」「野宿は慣れてるよ。慣れたくはなかつたけど」

自嘲気味に笑い飛ばす。

「ボクの部屋で良ければ」

「やめろよ、おい」

咎める物言い。袖を掴んだ手が離れる。数瞬、彼女を見据え、それから屈んで煙草を摘む。

「お前はいい奴だよ、デュノア。けど誰にでも親切にならうとするな。嫌いな奴は放つておけばいい」

「……無理だよ」

か細い声。

「あの時、井ノ上君が言つてたことは正論で、ボクだつて薄々は気付いてた。ラウラだつて、もしあの言葉が嘘だつたら黙れなんて言われても止めてたと思う。けど……」

少女は俯く。すでに誠は立ち上がっていた。

「一夏はボクを助けてくれたから。だから好きになれた。こんなこと言つたら怒るかも知れないけど、ISのおかげで好きな人ができたのなら、ボクはISに感謝してる。でも井ノ上君はボクたちよりもずっとよく世界を知つて……ごめん。うまく言えない、けど……でもボクやらウラは井ノ上君のことを嫌いになつたりしてないから。だから……」

本当に思いつきで喋つてゐるのだろう。両肩が震えていた。ため息が漏れる。半ば呆れたように。あるいは根負けというべきだろうか。

「部屋の隅に入れさせてもらえるか？」

その言葉を聞いた瞬間、シャルロットが顔を上げる。後悔の欠片も無い嬉しげな表情。刹那、誠の網膜に映つたのはシャルロットでない誰か。夕焼けの滑走路、見送る人々、その中で手を振る自分とどこかに向かつてゆく姿。彼女は寂しげにこちらを見て、小さく手を振つていた。あれは。

「井之上君？」

上目遣いで覗き込んでくる瞳。記憶の中の人物とは似て非なる輝きだつた。これが別人と氣付いて我に返つた。

「いや、なんでもない」

平静を装つて首を振る。むろん内心は違つた。先ほどまでの苛立ちは全く別の意味で、ざわめいている。

過去は過去だ。変えられないし、取り戻せもしない。ひどく物悲しい気分を払いのけるべく、誠はそう言い聞かせた。それからシャルロットを見て、やはり困惑した顔に出会い、言い聞かせて誤魔化すことでしか正気になれない自分に嫌気を覚える。

ドアを開ける。そこには今朝と何ら変化の無い部屋があつた。開らかれたカーテンと閉じられた窓。ガラスから差し込む月光の薄明

かりに、ぼんやりと青白い空間を得た自室が。そして一步を踏み込んだ一夏の顔を照らす。左頬にはガーゼが貼られ、下にある炎症の膨らみを隠している。

「一夏……」

後ろから来る控えめな声は簞。教室からここに至るまで、ずっと付き添つてくれていた。振り向き、一夏は笑う。

「大丈夫だ。それより、もう十時だぞ？ そろそろ部屋に戻つたほうがいいぞ、簞」

「だが……」

言い募ろうとした少女は、だが言葉が続かなかつた。強がりに似た一夏の微笑。いや、強がりですらない。果然として何も無い、虚空の笑顔だ。それを見て何も言えなくなつたのは、簞のせいではない。例え成人であつても彼に何と声をかければいいのか、戸惑うだろう。まして彼女は年齢的にも精神的にも成長途上なのだ。ただかける言葉を知らなかつただけ。あるいは井ノ上誠というもう一人の男子生徒が、簞や一夏より遙かに大人であつたというだけで。

「……おやすみ、一夏」

静かにドアが閉まる。ぎしりと、ささやかな軋む音が耳に残つた。一人になつた小さな空間。数歩を進み、それから自分のベッドに倒れ込む。なんのことは無い。元々、一人の部屋だつたのだから。またそうなつたに過ぎない。

シーツの隙間からそつと目を上げると、正面に誠のベッドがあつた。枕元に置かれた二つの写真立てがわかる。何気無い、おそらく自然的な動きであつた。一夏は立ち上がり、その写真立ての一つを手にとつた。薄暗い月明かりの下に出し、映されたものを浮かび上がらせる。

写真の中には、兵士たちだつた。約十名ほどの集団、その中には今この場にいないルームメイトの姿もある。誰もが微笑んでいた。誠が経験してきた時間の中で、切り取られ保存された一瞬。『それをお前は今、侮辱したんだよ』

頭痛のように彼の言葉が蘇る。背筋よりかけ登る感覚が手足を震わせた。奥歯を噛み合せる。怖い。

『俺はお前を殺すつもりで撃つ』

消耗しきつた誠の宣告。すでに枯れ、疲れはてた言葉に秘められた殺意は、半日を経た今なお鮮明だ。それから写真を見て思う。この中の何人が、誠の言つ“ISに狂わされた世界”で戦死したのだろうか。

写真立てを元に戻し、もう片方を見た。今朝、そこには写真があつたはず。しかし今は無い。誰かに抜き取られていた。その誰かとは、当然ながら一人しかいない。ルームメイトの不在以外にある、今朝との相違点だ。

自分のベッドへ座り込む。窓を眺めて。

「クソ……」

髪をむしった。こみ上げるのは屈辱。現実を知らなかつた悔しさと、現実を知らされた悔しさ。それを拳混じりに教えられた人物に對しては、不思議と憎しみどころか怒りすら無い。完全に打ちのめされたという敗北感が、漠然と漂つ。ドアがノックされたのはその時だ。

「一夏」

凛とした、聞き様によつては無感情とも思える声。いつもは一夏でなく織斑と呼ぶ肉親の声だつた。

「一夏、入るぞ」

返事が無いのも当然と悟つてのことか。千冬は無造作に部屋へと入り、ドアを閉める。入口に立つたまま弟を見据え、それから述べた。

「さつき、井ノ上に会つた。お前との模擬戦をもう一度行ないたいと、そう言つていた。お前が受け入れるのなら、明日の午後から始める」

「……わかつた。戦つよ」

意氣消失した言葉。千冬は軽く息を吐き、一夏と背中合せになる

ように座る。

「嫌々やられたる、といつような感じだな。お前らしくもない。」

「何があった？」

「言つたら、たぶん俺のことが嫌いになるよ」

「私としては今のお前が充分に嫌いだ。いいから言つてみろ」まるで突き放すような物言い。しかしそれが救いになつた。

「俺は」

と、ゆっくり口を開く。

「もう守られるだけじゃなくなつてたと思つてた。千冬姉や、周りの人たちに守られるだけじゃない、逆に守れるんだつて。けどそんなのは自分勝手な思い込みだつた」

嗚咽が漏れる。聞かれたくなかった。必死で止めようとするも、できない。言葉だけが区切りなく流れ出た。

「俺は守るなんて言つても、何も知らなかつた。どういう現実が起きてて、どれだけの人たちが犠牲になつてゐるのか、まるで知らなかつたんだ。けど誠はそういう場所にいて、現実を知つてゐる」

ISは希望じやない、と。真正面からの物言いにはそうするだけの根拠があつた。ただ掲げられた理想や夢とは違つ。変えられてしまい、自分たちにはどうやつても変えることのできない現実。それがあつた。

「一夏、お前と井ノ上は別人だ。井ノ上がそういう経験をしているのなら、お前はそれとまた別の経験を背負つてゐる。世界の全てに目を向けるなんてことは、誰にもできない。お前も、井ノ上もそれは同じだ。ただ歩んだ経験が違うだけだつ」

「けど！」

意図せず大声となる。数瞬、間を置いてから一夏は続けた。

「けど、俺は知らうともしなかつた。ISに勝手な期待をして、自分に酔つてたんだ」

口調が沈む。しばし流れるのは静寂だつた。背中合わせにいる千冬が、ため息を漏らす。

「まさかそんな理由で井ノ上に負けてもいい、などと思つてゐるのか？」

「だつて、俺はどうすれば」

突然、後ろ首を掴まれ引き倒された。一瞬だけ喉が絞まる。見下

ろしているのは上下逆さまの、田に怒りを収めた千冬。
「甘えるな。一夏、お前は決めたんじゃなかつたのか。それをこん
なことで諦めるつもりか？　ここまで来て覚えたのは、言つだけ言
つて逃げる口先だけの生き方か？」

正面から注がれる視線。今までに見た厳しさとは似て非なる。

「いいか、よく聞け。お前は子供だ。世間を何も知らない子供にす
ぎない。だがな、井ノ上も同じだ。お前は平和を知つていて、奴は
戦争を知つている。それだけのことだ。戦争を知つたあいつは希望
を抱けない。だから世の中を見る田も自然と違つてくる。だが知ら
ないお前は、まだ希望を抱けるはずだろ？」「う

力強い物言い。胸の奥で何かが音を立てる。ドアの軋みに似てい
た。

「千冬姉……」

ここしばらく全く使つていない呼び名。それを口に出した瞬間、
嗚咽がひどくなつた。そして見下ろす表情がふつ、と和らぐ。

「世話をかけさせるな、一夏。次は私がお前に世話をかけるものだ
と、期待していたのに」

「ごめん。ごめん……」

泣き声混じりに何度も呟いた。そつと額に手が置かれる。暖かい
手だつた。

「明日は期待させてもらつぞ。お前は自慢の弟なんだからな」

立ち上がる気配。手が離れる。

「千冬姉」

ドアのところまで向かつた肉親に、尋ねた。

「もし誠に勝つたら、自慢の弟になれるかな？」

「馬鹿者。もう自慢の弟だと言つただろう。お前が目標に進み続け

る限り、ずっと変わらない」「

優しい声。心を落ち着かせる響き。ここ数年、聞いた覚えの無い声だ。僅かに開いたドアから差し込む光。それに照らされた千冬は、儂げに微笑んでいた。

案内された部屋に入った瞬間、目に映つたのはベッドに腰掛けたラウラだった。つまりシャルロットの相部屋は彼女らしい。というと、なるほど納得もいく。シャルロットは、自分とラウラが誠に嫌悪を抱いたりはしていないといった。その場しのぎの嘘とも取れるが、どうやら違うようだ。連れてきたのはその真偽を確かめさせるためだったのか。

ラウラは読書中だつたらしく、手元にはブックカバーのかかつた文庫本。彼女は先導して入室したシャルロットに気付き、その後ろにいる誠を見た。

「ボーデヴィッヒ、昼間は」「

原因がどうあれ詫びねばならない。言わばけじめだ。しかしそれより早く、ラウラは立ち上がりて誠の前まで足早に近づき、「どうかし」「

問答無用、平手が右頬を叩く。固まる空氣。目を丸くするシャルロットに、無表情のラウラ。驚くでも無く当然のことだと顔をしかめさせた誠は、じんわりとくる鈍痛を感じる。ややして向き直り、「すまなか」「

再び叩かれる。今度は左頬。

「ボーデヴィイ」「

右頬。

「本当に」「

また左頬。

「ちょっと待」「

再び右頬。沈黙。

叩かれた状態のまま押し黙つた。平手は飛んでこない。喋つたら叩くつもりか。そう疑つて横目で見る。と、

「よし、満足した」

真顔で胸を張られた。心なしか表情も充実している。理由はわかるが、腑に落ちないこと甚だしい。

「ラウラ、いくらなんでも……」

「いや、いい。むしろ安いくらいだ」

咎めかけたシャルロットを制止、誠。

「でもボーデヴィッヒ、謝らせてくれ。すまなかつた」

「もう氣にしていない。今ので全部すつきりした」

全部、とはどういうことだらう。昼間の騒ぎでそこまで迷惑をかけただらうか。と、ラウラは手を上げて指折りに数える。

「私の嫁を殴つたこと。階級的に上官の私へ暴言を吐いたこと。食事の場を壊したこと。それ以来、授業にすら来なかつたこと。今朝、篠ノ之を戻らせつけしかけたこと」

「最後のがおかしくないか？」

反射的に問う。ラウラが決行した攻勢作戦を知らないシャルロットは首をかしげている。

「まだある」

「まだあるのか」

「むろんだ。一夏に言つてくれたこと、その感謝、とどうも言つのかな

「感謝？」

ラウラの表情に初めて感情が揺れた。悲しみ、あるいは哀れみ。そのどちらも他者でなく己へ向けたもの約つだつた。

「お前の言つたことは正しい。今の世がどうなつてゐるのか、それは私もわかつてゐるつもりだ。だが私は一夏に助けられた。お前の言つ青一才に命を助けられ、信頼していた」

ため息とも笑みともいえない吐息。どちらにしても物悲しさに変わりはなかつた。

「だから、というのもおかしいかもしないが、私は信じていたんだよ。一夏なら世界も救えるんじゃないか、なんてな。もしかしたら、それは信頼じやなく昔見た英雄願望を一夏に重ねていただけかもしねりないが」

「英雄……」

その単語を自分で口にすると、ひどく滑稽な道化のように思えた。実際、英雄と呼ばれる人間は存在する。軍であれ民間であれ。しかし彼等のほとんどは英雄になりたくてなつたわけではない。仕立て上げられた、とも称せるだろう。例えば軍ならば、この時世にもまだ本物の英雄がいるのだとして、他の兵士を奮起させるため使う効果的なプロパガンダの一種に、物語は常套句だ。

しかし目の当たりにすればそんなものがいないとわかる。英雄は夢物語の存在で、この世に生き、存在している英雄とはただの人間だ。そうでない人々とさして変わらない。個人で世界を丸ごと変革させる力など、持ち得てはいないのだ。

現実にそれほどの力がある人間とは、権力と富とを持ち合わせた複数の人物たち。要するに政府やそれに匹敵する企業である。いや、現代では後者のほうが強大だ。いまやPMC（民間軍事会社）のような私兵集団すら有し、IFSを始め軍に供給されるあらゆる兵器産業を担うのだから。アドバイザーとして特殊部隊出身者を雇うことも多い。大規模企業グループの戦力は、米軍の一個軍に相当するとも言われている。

こういう裏社会の闘争をぐぐり抜けたものが、本当に力のある存在だろう。英雄とはお世辞にも程遠い。

「お前はまだ信じてるんじゃないのか？」

「たぶんな。私だけじやないさ」

目でシャルロットを促す。彼女は肯定を示して、切なげな微笑を浮かべた。

「なるほど。奴はずいぶんと疎いようだ」

「ホント、馬鹿らしくなるくらいに」

誠の指摘にシャルロットが同意し、笑う。先ほどまでの不快感は消えていた。こういう談笑もあるのだ、と誠は知る。平和の内での和やかな空氣。昼間もあつたはずだが、それよりずっと暖かだった。そこでふと思い出す。明日、自分が行なうこと。行ないを許してくれた二人を、裏切る形となる。

「しかし」

不意にラウラ。自分のベッドへ戻つて腰を下ろし、それから続ける。

「一つだけわからない。井ノ上、お前はIISが嫌いなのか？」

「なんだ、いきなり」

「昼間の話だ。お前は直接的な表現こそしなかつたものの、まるでIISが狂氣の根源のように言つていた。自身もIISの操縦者だとうのに」

「まあ、嫌いか好きかで言われば嫌いだな」

半ば冗談口調で言つ。

「茶化すな」

真面目な視線。気圧され、嘲笑を消した。隣を見る。

「あ、えと……ボクは少し外に出てるから」

「やめろよ、デュノア。邪魔してるのは俺なのに、お前が遠慮するなよ」

言つてからため息を漏らし、閉じられたドアに寄りかかった。短い黒髪の頭をなで上げる。

「IISが嫌いなわけじゃない。俺はIISがこの上なく憎くて、怖いんだよ」

「……その理由は言えないか」

「いや、構わない。たぶん知ってるよ、お前は。“ブリムストーンの悲劇”だ」

不可解な名詞。しかしラウラの表情には驚愕が過ぎる。

「あれは反IIS技術者の流した噂だろう」

「公にはそうだ。当事者には箇口令が敷かれていた。一応、注意し

ておくとそいつはまだ解除されていない。これはアメリカ・イギリス両軍の機密になる

「その当事者がお前だというのか？」

「そうだ」

一つ返事で述べる。軍属の二人に流れた奇妙な緊張。だが一方で、聞き慣れない単語に頭を捻る者もいた。

「あの、『ブリムストーンの悲劇』って……」

「説明するよ」

言つて懐へ伸ばした手は寸前で止まる。女子の部屋で煙草も無いだろう。

「昼間、俺が言つたことを覚えているだらつ。ISはあらゆる兵器に勝つてゐる、と。だが一つだけ、明らかな欠点がある。操縦者の肉体を保護することだけに集中した結果かもしけない。実戦を知らない篠ノ之束は、気付くはずもなかつたことだよ」

「どういつこと？」

シャルロットの不安げな顔。それを見ると、彼女がISを纏つて実戦に赴く様を想像してしまつた。おそらく、同じことが起きたらうひと誠は思う。

「ISの欠点は搭乗者が自分の目で状況を認識しなければならないことだ」

この答えを、しかしシャルロットは理解できなかつた。当然といえる。

「戦闘機や戦車、攻撃ヘリ、それに無人機なんかは最たる例だと思う。ああいう兵器はモニター越しに敵を認識し、スイッチ一つで片付く。強力な兵器をゲーム感覚で操ることによつて、自分の行なつてゐる大量破壊と殺人の現実味が薄れるわけだ」

発達した科学技術により、現代では肉眼よりも鮮明かつ確実な映像をリアルタイムで受信し、攻撃できるようになつた。数キロ先、本来なら人間が感知できないはずの距離で行われる戦争だ。空中で長距離ミサイル、地上で野砲というように。

もつとも、これらの兵器は本来ならここまで頻繁に活用されないはずだった。数機の航空機や爆撃装備の無人偵察機ならまだしも、燃料と輸送に手間のかかる重戦車が多様される戦争。昼に誠の述べた局地的な第三次大戦という表現の理由である。

「人殺しを認識しないのが良いのか悪いのか、それは賛否両論がわかれますが、精神病を患う兵士が少なくなつたのは事実だ。けれどISの場合、状況認識のほとんどを肉眼で行なう。たつた一人の人間にできるはずのない、それこそ戦車や航空機とは比べ物にならない虐殺を、自分の所業だと認めなければならない」

「そうして起きたのが“ブリムストーンの悲劇”か」

続く言葉をラウラが引き継ぐ。誠は静かに頷いた。

「デュノア、ブリムストーンが何かわかるか？」

「え……と、どこかの地名？」

「ハズレだ。まあ、そう聞こえなくもないかな」

薄く微笑む。一拍置き、

「ブリムストーンは対戦車ミサイルの名称だ。元々はイギリス空軍に配備された航空機搭載のミサイルだけ、今じゃあ改良型が同じ名称でISに装備されてる。イギリス第三世代機が完成・量産化されれば、まず間違いなく搭載されるだろうな」

「じゃあ、その悲劇っていうのは？」

「誤爆、っていうのが一番近い表現なのかな。レインジャーに入つてから半年が過ぎた頃だった。俺のいた小隊は偵察から帰る途中、山岳部で機甲部隊の強襲を受けたんだ。相手は静電砲搭載のメルカバが一輛と支援のストライカーアーマー車が四輪、こつちは五〇口径機関銃がせいぜいのハンヴィーが六、乗員二十四名。どうあがいても勝てる相手じやなかつた。必死で無線に叫んでようやく繋がつた味方の航空基地からは、制空権を得ていなければ支援を断られた

遠く懐かしみ、しかし色褪せない恐怖に悪寒を感じつつ、誠は目を細める。こちらの火器は全く歯が立たず、機甲部隊は携行ロケッ

トランチャーの対戦車榴弾ですら跳ね除けて猛然と向かってきた。メルカバの主砲が火を吹いた瞬間、ハンヴィーの一輛が吹き飛ぶ衝撃。金属片と共に降り注いでいた赤い物体は、車輛と運命を共にした仲間の肉だった。一度の攻撃で五人が死んだ。文字通り木端微塵となつて。立ち込める火薬臭に、負けず劣らず強烈な血と肉の焼ける匂いを覚えている。

「どういうわけか、あの時はひどく落ち着いていたよ。もちろん怖かったけど、でもそれ以上に納得してたんだと思う。ああ、ここらが潮時なんだ、ってな。大げさな棺桶に入れられた葬式より、砂漠の片隅で消えちまうほうが気楽でいい、なんてことも考えた」

その時の自分を思い出し、喉奥を鳴らせて笑つた。絶望するわけでも、ましてや希望を抱くわけでもない。迫る死に納得してしまうとは、あまりにも情けないことだ。

「そこに奴が来た。一瞬だつたよ。まず戦車が両方とも吹き飛んで、それから姿が見えた。空中の一点で立ち止まって、こっちを見ていた。そのすぐ後、彼女は装甲車に襲いかかって殲滅した。文字通り殲滅だ。車輌を壊して、逃げる敵兵を残らず殺していつたよ。まあ、あの時はすいぶんと嬉しかつたけどな。ざまあみろつて感じだつた」実戦で初めて目に見るE-Sの性能。百聞は一見に如かずと言うが、まさしくそのとおりだ。圧倒的な機動性、火力。うろたえるストライカーを数秒で全て破壊し、逃げる敵兵をロケット砲の連発で薙ぎ払つた。

「みんなが歎声を上げた。俺もだ。俺は小隊長に言われて、礼を言うために通信回線を繋いだ。けど向こうから聞こえてきたのは、ずっと同じことを繰り返す眩きだつたよ」

「眩き？」

ラウラが訊く。

「そう、眩きだ。こんなはずじゃない、こんなはずじゃない、ってな。こっちが話しかけてもそればつかだ」

PTSD、戦争疲労、戦闘神経症……呼び方は様々で多岐に渡る。

だが根底にあるのは同じだ。戦場での急激なストレスが原因で精神が壊れてしまう症状。

「そのすぐあとだ。無線機から目を上げると、彼女と目が合った気がした。そんな気がしただけだと思う。実際、距離は五〇〇メートルはあつたからな。けどわかつた。こいつはもう駄目だ、やばいつて。直後、警告する暇もなかつた。俺がやめろと叫んだ瞬間、彼女は残つたハンヴィーにロツクオンして、ブリムストーンを全弾発射した」

急速に接近するミサイル。対戦車兵器はただの車輛に対し威力が強すぎたのだ。爆炎と苦痛に呻き立ち上がつた誠を待つていたのは、火の海に変わつた砂漠。漏れた燃料が砂に染み込み、そこへ爆炎が引火したのだ。たつた一人の女によつて、小隊は全滅となつた。「生き残つたのは俺を含めて三人。その内の一人は、次の日に死んだ。彼女共々、狂つちまつたんだろう。ライフルの銃口を口に突つ込んで……」

バンッ、と撃つ真似をする。卑屈な笑いが漏れた。それからシャルロットを向き、

「これが“ブリムストーンの悲劇”だ。たつた一人でできるはずのなかつた大量殺人を認識しなければならない、ISの欠点。性能面しか考えられなかつたIS推進派の、どうしても隠したい汚点だ。もつとも俺にとつては幸運でもあつたかもしれない。昼間、ISに自我は無いと言つたが、ある意味で嘘だ。波長、とでも言つのかな。俺はあの事件がきっかけでブラックワイドウとそういう波長が合つて、ここに來た」

違う。

心の奥底で生まれた本心。これも嘘だ、といつ自己嫌悪。波長などあるわけがない。いやそもそも、ブラックワイドウを扱えたのは精神的理由からではないのだ。あの機体は。

「その人は軍人だったの？」

「ああ。後から聞いた話じゃあ、彼女はイギリス空軍試験部隊の一

人だつたらしい。偶然、俺たちの無線を聞いて駆けつけたわけだ。

安っぽい正義感と英雄願望で、無許可離脱までして。……誰かに似てるな。彼女もあるいは予防対策訓練を受けていれば違つたかもしれない。けどこの学園にそんなプログラムはないだろ？

「今は……？」

「精神病院にいるらしい。また同じことをやらかすよりはそのほうがいいさ。ああ、誤解しないでくれよ。別にイギリス人を恨んじやしない」

オルコットのことだ。あの代表候補生に抱くものなどない。いや、そもそも“ブリムストーンの悲劇”を起こした試験部隊員にしても、恨んではいなかつた。憎むべきは彼女たちではない。むしろ自分と同じ被害者だ、と誠は考える。唯一、彼が復讐と憎しみを抱く相手はただ一人。

「じゃあ、一夏を殴つたのは？」

「ありや公私半々だ。正直、適当に聞き流すつもりだつたんだけどな。むかついたのと、馬鹿にされた気がした。それにまた同じことを繰り返されるなんて、エイプリルフールのネタにもならない。血で汚れる覚悟も無い奴が背負つていい兵器じやないんだよ」

シャルロットは俯く。もちろん一夏を始め、こここの生徒が“ブリムストーンの悲劇”を繰り返すとは限らない。しかしたつた一日ではあるが、過半数の人間が同様の末路を辿るだろうと思わざるをえない。特に今日の昼間、一夏でなくあの場の面子からしておかしいのだ。いつか何かがきっかけで互いが敵同士になるかもしれない、他国の人間。それが親しくしているとはまるで信じられなかつた。

もしも殺し合う立場になつたとき、彼等はどうするのか。おそらく話し合いで解決を求めるはずだ、と誠は思う。それこそ映画のように。だがそれが成功するとは思えない。個人と国との違いはあれ、話し合いで解決できなかつた結果が戦争なのだ。あとに残るのはやりきれなさと、任務達成のための排除だけ。

「井ノ上」

不意にラウラが言う。

「横槍かもしけないが、お前は殺人認識をISの欠点だと言った。だがそれは本当に欠点なのか？」

「どういうことだ？」

意図が読めず聞き返す。

「私にはそうは思えない。確かに使用者の効率性で考えれば、通常兵器と比べ遙かに劣つたものだろう。ワンオフ兵器を扱う人間が、そう何度も戦闘を拒んでは意味がない。だがむしろ、それは篠ノ之束が意図的に行なつた設計ではないのか、と。私にはそう思える」「戦闘、ひいては殺人を認識させ、忘れさせないための措置だつた、と言いたいのか？」

「そうだ」

彼女は頷く。まっすぐに誠を見て。

「兵士は駒だが、人間だ。同じ人間を殺した感触を、忘れてはならないはずだろう」

「それは軍人としての意見か？」

「公私半々。お前が一夏を殴つた理由と同じだよ」

ふむ、と頷く。

「デュノア、お前はどう思つ?」

「え? いや、ボクはそういうことあんまり詳しくわからないし……」

「専門的なことじやない。もし自分が実戦に出て人を殺すとして、それが任務だから仕方のないと割り切るか、それとも殺人を認めていくか、今わかるか?」

「殺人を……」

小声で呟く。彼女も、他の大勢と同じく実戦で人を相手にすることはあまり考えなかつたのだろう。それは仕方の無いことだ。出来ることならこんなことを考えず、平和な世で生きたいのが人間なのだから。

「ボクは……まだわからない。自分の立場も、いつかそういう選択

をしなくちゃいけないってこともわかってるはずだけビ、でもまだ

……

「それでいいんだよ、シャルロット」「……」

言つたのはラウラだ。

「言い訳か、向き合つのか。それはどうせ正解で、不正解の無い選択だ。だがそれだけに難しい。ゆっくり決めてもいいはずだ。違うか、井ノ上？」

「同感だ。少なくとも卒業までに決めればいいと想つ。悪いな、デュノア。急かすようなことを訊いた」

素直に詫びる。すると彼女は慌てて首を振つた。

「いや、全然そんなことないよ！ なんていうか、井ノ上君が同じ年とは思えないくらいにいろんな経験して、すごく覚えておかなきやつて思うし」

「同じ年？」

誠は奇妙な顔になつた。きょとんとして、今聞いた単語の意味を確かめる。それから、

「何言つてんだ。俺は十七だ。お前らと同じ年じゃなーぞ」

「……は？」

間を置いたラウラの声。そちらを見ると、呆気に取られたようなドイツ軍少佐の顔がある。

「自己紹介の時に言つてなかつたか？」

「聞いてないけど……」

シャルロットの疲れたような聲音。先ほどとはまるで別の困惑に満ちている。

「どうか？ 何人かには確實に言つたはずだけど……まあいいか」

「井ノ上、お前まさか留年

はつとしたラウラを言葉を遮り、

「何でだよ。軍でどうすりや留年するんだ」

「古参兵とかいるだろ？」

「おー、ちょっと全世界の古参兵に謝つてこー」

ジト目で睨む。

「いくらなんでも十五でレインジャーに入るわけがないだろ?」

「私は十五で特殊部隊指揮官なのだが」

「歩兵かISかの違いだろ。いやでもまあ、気にしないでくれ。たつた一歳の違いだ」

飄々と煙にまぐ。それでも沈黙する一人に対して、苦笑を浮かべつつ言づ。

「そんなに意外か?」

「そりゃそうだよ」

とシャルロット。半ば呆れたような口調だった。

「まあ、いいだろ別に。仲良くはできないと思つたけど、よろしくやつてくれよ」

「仲良くできない? また何かやらかすつもりか?」

「たぶんそうなる」

やや誤魔化し気味に言つた。少女一人分のため息。「言つておぐが、私は何のフォローもしないからな」「ボクもさすがに」

一人して疲れた声。誠は笑つた。

「心配するなよ。明日の今頃は、たぶん俺を軽蔑してゐる」

夢を見る感覚、というのが一番近いだろ？アリーナから地表一〇〇メートルの上空、そこで一点だけ白昼の青空と異なる色彩が浮いている。いくつかの直線的なフォルムをしたパーティが集い、一個人型を形成した塊。光を反射しない黒い艶消し加工の外装は、おそらく滑らかでいて無機質。金属特有の冷たさを持たない、例えるなら車のタイヤに似た質感を見せる。顔面のフルフェイスマスクに収まつた二つの多目的カメラといつ両目に、右目の斜め上へは補助となる第三の瞳が存在した。

三眼の大型機動兵器。冠された名はブラックワイドウ クロゴケグモ。それに収まるが如く纏つた誠は、静かに目を閉じていて。大地の感触が無い空、制止して視界を遮断すると、足元のおぼつかない夢の中に入り込んだ。ひどく曖昧な意識。ともすれば、兵器の中にいることを忘れ、眠りへ落ちかねない。裏を返せばそれはリラックスしていることだ。この上なく落ち着き、薄刃の如き呼吸。弛緩した筋肉が、適度な脱力感を与えてくれた。

不意の電子音。ディスプレイが何者かの着信を知らせた。送信者の情報を確認。回線は米軍の通信衛星を介した秘匿通信である。住所までは特定できない。もつとも、誠はその住所どころか、相手の顔も知つていて。昨日も話したばかりだ。

「ドク？」

回線を開き、問う。返つたのは皮肉げな言葉だった。

『いつたいお前が何を考えているのか、いよいよわからなくなってきたぞ』

「何の事だ？」

『つまらんとぼけ方だな。その機体は二十四時間、休み無しでこちらがモニターしているんだ。どうしていま起動している。学園の予定には無いはずだろ？』

「模擬戦だよ。これでも人気者でね」

『よくそんなことが言えたものだ、井ノ上。俺は馬鹿なことをするなと言わなかつたか?』

「ドク、すまない。それについては謝る」

『平静のまま告げた。感情がこもらないため、本当に詫びているのかわからぬくい。』

『そう思つてゐるのなら、今すぐに停止しろ。わかつてゐるのか? そこはお前にとつての隠れ蓑なんだ』

『さしつめ学園全体がギリースーツみたいなものかな?』

『そうかい、レインジャーの次はSASに入隊したいらしいな。相棒の少尉だか大尉だかの代わりにそいつを持つて行けよ。超国家主義者だらうが一キロと言わず十キロ先から狙撃すればいいたつぱりの嫌味。ドクにしては珍しい、と誠は思つた。よほど今回

の模擬戦が気に食わないようだ。』

『なあ、誠。真面目な話、お前はまだ安全じゃないんだぞ? 予定外の起動はするなと何度も言つただろう。いつ起動するのかわかつてゐるのなら、そいつのシグナルだつて秘匿処理できる。正直に言え、一昨日の模擬戦だつて織斑千冬からこひらに連絡が無ければやらせなかつた』

『連絡があつたのか?』

『ああ、NSAに。彼女にはある程度の事情を知らせてある。だが今回、どうこいうわけかそれもなかつた。誰の差し金かは目に見えるがな。……言つてゐるのはそんなことじやない。お前たちの機体は痕跡を残す。それが現状でどれだけ危険なことか、わからないお前じやあないだろ』

ドクはお前ではなく、お前たちと呼称した。複数人を指す。その意図はどこにあつたのか。話の流れから察するに、機体とはブラックワイドウであるのは確実である。だが同時に、ブラックワイドウが他のEISとは異なると述べているようにも聞こえる。機体コンセプトなどではなく、もっと根本的な部分で。そしてお前たちという

表現は、誠以外にブラックワイドウを使役する人物ないし集団がいるということか。

「危険は慣れてるよ」

『お前はそうだ。だが他の生徒たちはどうなる。お前を編入させたのは、その学園に危険を及ぼせるためじゃない。木を隠すには森、といつが、お前のやつてすることは隠れるべき森を焼いて自分の存在を主張するようなものだよ。まるで黙々をこねた子供だ』

「釣りには餌が必要だろう?」

『つい先日まで他人だつた学友を撒き餌にすると? 恐れ入つたよ。お前がそこまで馬鹿だとは思わなかつた』

苦々しげに吐き捨てられる。ため息が聞こえた。

『いいか、もう一度だけ言つておく。お前は子供だ。経験、年齢、技術、そんなものはどうでもいい。ただお前がそういう日々を送つたというだけで、子供じゃない証明にはならない。むしろ逆だよ。自分は戦争を知つてると、主張して何になる? お前は自分で決めた道で勝手に後悔して、他人にハつ当たりしているようなものだ。いいか? これは俺たちの問題でお前の問題じゃない。大人が解決しなければならないことだ。その模擬戦が終わつたら、身勝手な行動は絶対に慎めよ』

「……わかつたよ

心無しか沈んだ聲音。しばしの間が空き、

『話はこれだけだ。何か言いたいことは?』

「無い。あんたが正しい。……いや待つてくれ。一つだけ

『言つてみる』

「どうしてレインジャーに入隊させてくれたんだ? あんたなら反対すると思つてた。今もそうだ」

『反対するつもりだつたさ。でもお前も二十歳に近いんだ。自分の道くらい自分で決めたほうがいいと思つた』

誠の口からせせら笑いが漏れる。

「そんなに信用してくれてたのか

『冗談だ。それと、正しくはそれだけ信用してみたいだな。本音を言つなら、それが最善の策だと思つた』

「最善？ 反対するつもりだつた、と言つたじやないか。本当はもつと早く学校に行かせたかつたんだろ」

『状況が違つた。国内にいるより、外国へ送つたほうが安全だつた。レインジャーと言えただの歩兵、そいつを情報の錯綜した最前線なら見つけ出すのは難しい』

「なるほどね」

代わりに何度もなく殺されかけたが、ここのは口にせざ飲み込む。

『それとも一つ』

「何だ？」

『当時のお前は、普通の学校で普通に暮らす、なんてことは絶対にできなかつた。周囲の危険性がじやない。お前自身が危険だつた。不相応な戦闘技術を持つた子供は、平和な世界じやあテロリストと変わらない。お前は今以上に戦争を捨てられなかつたよ』

「……ひどい物言いだな」

『ああ、ひどい話だ。お前のせいじゃないのにな。……他には？』

「何も無い」

『わかった。忠告、くれぐれも忘れるなよ』

通信が終わる。首を左右へ動かした。どうにも肩が重い。

戦争を捨てられない、と。その言葉が無言になつたスピーカーヨリループ再生されている。薄々、自覚はしていた。だがどこかで否定する気持ちもあつたのだ。それが信頼している友人に指摘されたことで、否応にも認めなければならなくなつた。胃に氷の塊が落ちてゆくような感覚。軽い吐き気を伴つことは、恐怖だらう。自分の欠点を認識することへの恐怖だ。

深呼吸を繰り返す。目を閉じた。暗い世界。だが完全な闇ではない。目蓋の向こうから伝わる、ディスプレイとカメラ映像の明かり。目を眩ませ、惑わせる光があつた。

不意に通信システムが一度目の受信を示す。ドクではない。相手は衛星通話でなく、短距離無線から接続していた。ただ気になる点が一つ。そのコードは音声を暗号化し盗聴による情報漏洩の可能性を低める、秘匿回線のものだった。

「どちらさんで？」

『私だ、井ノ上』

低いハスキーボイス。それだけで相手が特定できる。感情の希薄な、というより押し殺したような口調は、織斑千冬の代表的な特徴だった。

『予定通りに行なつたぞ。すぐに始める。観客はお前の指定した生徒だ』

顔を動かし、観客席に視線を巡らせる。複数の人影。望遠モードで確かめた。シャルロット、ラウラ、セシリ亞、そして篝。

「どうも、先生。手間を取らせて。他の生徒は？」

『自體にしてある。これはお前と一夏、あの四人の問題だ。本當なら鳳も必要だつただろうが』

「クラスが違うなら、仕方ありませんよ。……監督要員は先生だけですか？」

『もうじき山田先生も来る。進行は予定通りにやるぞ』

「了解。ところで、本当に協力していいんですか？」

『良くはない。が、必要だ。あの馬鹿も、多少は成長してくれるだろ。自分を利用すればいいと、そう提案したのはお前だ。私はそれに乗らせてもらう』

「わかりました。なら、乗つた船が沈まないよう気を付けてください。これは泥の小舟ですから」

『沈む前に止めるぞ。いざとなつたらな。それと』

「何です？」

『私の弟をあまり侮るなよ』

脅迫めいた口調。誠は短く笑つ。

「肝に銘じます、先生。では」

通話を終了。きつく目を瞑り、開いた。

武装を選択。最初の模擬戦同様、カービンを取り出した。マスターームをオンに、セイフティだけかけておく。同時にディスプレイが変化した。マスターームへ点火したのをきっかけに、主要システムが戦闘モードへ切り替わる。短距離レーダーと、レーザー照準が起動。ブラックワイドウが自動で全方位索敵を開始する。そして敵機を補足。

その影は正面、約十メートル下方でこちらを見上げていた。ブラックワイドウと違い、全身装甲を持たない標準的なEISの外観。白を基調とし、一振りの剣を携えている。

「織斑……」

オープン回線で呟く。呼応するように、白式を纏ったルームメイトは同高度まで上昇、十五メートルほどの距離を挟んで対峙した。

「先に行っておく、お前に詫びる気は無いぞ」

『俺もだよ、誠。昨日、ずっと考えてた。お前が正しいんじゃないからって。でも決めた。最初にそれを言つておく』

雪片の切つ先が持ち上がり、誠を向いた。

『俺は自分の考えを曲げたりしない。お前から見たら傲慢なんだろうと思う。けど決めたことだ。お前に言われたくらいで諦めるほど、甘い覚悟で挑んできたんじゃない』

「……覚悟、か」

口の端が吊り上がる。兵器の仮面の下に浮かんだ、歪な嘲笑。

「吐くだけなら誰にでもできるさ。俺はお前の意見なんて興味がない。その英雄願望でまた死人が出るのが嫌なんだよ。この考えを撤回させたいのなら、俺を殺してみろ。始めよう」

後退。さらに間合いを取るべく、ブラックワイドウは僅かに上昇を加え後方へ。ディスプレイではダイヤモンドマーカーが白式をしつかり捉えている。両手が雪片を握り、こちらへ急接近しようと身構える寸前。僅かに早く、誠は呟く。

「ステルス、起動」

飛びかかるうとした刹那、突然に起きた現象は一夏の中で理解しえなかつた。誠の機体、ブラックワイドウの輪郭が揺らぐ。さらなら蜃氣楼のように。黒い装甲が色彩を失い、存在を希薄なものへ変化させる。攻撃かと身構えるのと、ブラックワイドウが完全に消失するのとは同時だつた。

比喩ではない。それは文字通り、完全な消滅である。初めからその場にいなかつた、遠隔出力のホログラムか何かだと。そう告げられれば疑いようもなく納得しそうなほど。レーダーにはまったく反応が無い。アクティブ、パッシブ、ついでに熱源探知も。いつたい何がどうなつている。頭の中はすでに半分ほど混乱していたが、雪片を強く握り無理やりに緊張感を生み出した。

周囲へ目を凝らし、状況を確認。やはり何の姿も見えない。それから自問を始めた。

これはブラックワイドウが有するワンオフ・アビリティと見るべきなのか。第三世代から、ISには通常の戦闘機能とは別に特殊能力が備わっている。それがワンオフ・アビリティ。白式で言つところの零落白夜がそれだ。だが、これはいつでも発動できるわけではない。波長やテンションなど、呼び方は人によつて様々。要するにISとの同調が最高レベルに達した時にのみ、初めて発動が可能となる。ある程度の戦闘の末に発動するのならまだしも、戦闘開始と同時に起きるはずがない。

落ち着け。

言い聞かせる。一度の深呼吸の後、視線を定めた。正眼に雪片を構え、体ごと動かし周囲を見渡し レーダーに反応。真下、五〇メートル。

「つー？」

反射的に退避。同時にレーダー反応のほうで複数の銃声、弾丸がそれまでいた空間を飛び去る。向き直り、視認。ブラックワイドウ

がこちらを見ている。その両肩が持ち上がり、ロケットらしき物体が四発、放たれた。

違う！

自分でロケットと認識したそれを、瞬時に否定。反転して急降下。あの機体にロケット砲は無いと、誠自身が述べていた。あれはミサイル。

刹那にレーザー照準。数は四。弾頭に照準システムを搭載した自動補足ミサイルか。自分の判断が正しかったことに喜びを覚える反面、どう回避するかに思考を巡らせる。不意に気付いた。また、レーダーからブラックワイドウの反応が消えている。振り返って確かめたかった。だがそんな余裕は無い。

と、誠の言葉が蘇る。先日、一度目の模擬戦で彼は言っていた。

『本当は奇襲用なんだが、これじゃあ奇襲も何も無いからな』

奇襲用とは、ブラックワイドウのコンセプトでなく能力を述べていたのか。そして彼が愛機を三・五世代機と称したのも思い出す。不可視となるのはワンオフ・アビリティではないだろうが、それは別にワンオフ・アビリティを搭載していることになるはず。レーダーを確認。ミサイルはこちらを追いついている。どう回避するか。

『おい』

聞こえるはずの無い声。嫌な悪寒が背筋を駆け登る。真正面で空間が揺らぐ。消える様が蜃気楼ならば、出現も同じ。ブラックワイドウは何の構えも無しにこちらを向いている。

「くっ……」

咄嗟に雪片を構える。左へ刃を落とした下段。

対して誠はまるで無防備だった。カービンをぶら下げたまま、じつと見つめているだけ。その姿に覚えるのは匪兵。

「ふざけるなよ、誠！」

真一文字の斬撃。狙つたのはブラックワイドウの上半身だ。絶叫に怒りを乗せ、雪片を振るう。刃はまっすぐとその装甲へ。それで

も動じない誠に、微かな恐怖を戸惑いを感じる。

僅かに鈍つた一瞬の隙。それこそが最大のミスだった。雪片が切り裂かんとする直前、ブラックウイドウは上体を沈め、白式の懷へと潜り込む。虚しく空を斬る雪片を引き戻そうとした時、すでに遅かつた。カービンの銃身が、白式の右腕を叩く。衝撃で雪片が離れた。刹那、黒い機体の左足が白式の上半身へ絡みつく。

『ふざけてはいけない』

落ち着きを払つた誠の声。左腕が突き出される。一夏の眼前へ現れたのは、腕部に搭載された四〇ミリ径の銃口。奥で装填済みの弾丸らしき物体が、銀色に輝きを放つていて。

『殺すときはいつだつて真面目だ』

言い終わるや否や、一夏は目前へ迫つた死を悟ると同時に、それを受け入れようとはしなかつた。顔を背け、銃口から逃れる。轟音。顔面の真横を、射出されたものが空気を引き裂いて飛ぶ響き。そして銃声。いかにシールド越しとはい、音までは防げない。

いや、それ以上にある心理的衝撃が一夏を襲つた。至近距離、放たれたのは紛れもない大口径の針散弾。対人兵器としては最高レベルの殺傷力を秘める。それを用いたということは、威嚇や単なる模擬戦で行なう戦い方ではない。発砲間際に誠の放つた台詞が、何よりの証拠となつていて。彼は、殺すつもりなのだ。

「誠、お前」

『しぶとい』

間近の発砲により、脳は揺さぶられたままだつた。怯んだ神経、反応も同様に遅れる。ブラックウイドウの左手が一夏の顔面を掴み、己の後方へと放られた。後ろを取つた、と。あるいはそんな解釈もできたかもしけない。正面、こちらへ迫つてくる四発のミサイルが無ければ。

最初の出現時、発射されたあの誘導弾だ。まだロックオンは解けていなかつた。白式もとい一夏は、そのミサイルが殺到する眼前へ投げ出された形となる。

考えるより先に体は動いた。白式は反転、上下逆さまになり振り返る。すぐ背後にいるブラックワイドウは、再びその姿をぼかしていた。手が伸ばせば届く距離。そこにあるのか不確かなブラックワイドウの左足を、白式の両手が掴んだ。震む輪郭が出現。

『何を……！ 織斑 』

「逃がさねえからな」

微かな驚愕を示す誠に、不敵な笑みを浮かべて言つ。

『クソが！』

カービンが動く。銃口はミサイルへ。密着した状態であれば、ブラックワイドウも必ず損傷を受ける。この機体の能力は不可視になるだけあり、消滅するのではない。今、一夏がその足を掴んだことを証明された。であれば、誠は自身が助かるために、己で放つたミサイルを撃墜しなければならない。

乾いた破裂音が連続する。三点バースト射撃で数セット。吐き出された弾丸は違えることなく四つの弾頭を潰し、爆発を引き起こした。約十メートルほど手前で一瞬の炎と視界を遮る煙。爆音の最中、再び雪片を呼び出し手に取る。背面へと周り、斬りかかった。

避けられるはずのない一撃が、しかし金属に遮られる。ミサイルの迎撃を終えたカービンが背中へ回され、曰く劣化ウランの材質という突き出た銃剣が雪片を留めた。

『邪魔だ！』

苛立ちを乗せた罵倒。銃剣に弾かれ、体が崩れる。その直後、ブラックワイドウは間合いを取るべく瞬時に離脱、上昇。苦し紛れに雪片を振るつも、空を切つた。

「させるか！」

すでに五メートルほど距離の空いた黒い機体を、叫ぶと同時に違う。内心、一夏は焦つている。一度目の模擬戦で、誠は銃剣を用いた格闘戦で一夏と切り結んだ。それが今回は違う。断じて格闘に持ち込もうとはしない、明確な拒絶があった。そうさせるのはブラックワイドウの能力。距離を保ち不可視となり、一対一での奇襲を仕

掛ける。そうなれば、射撃兵装を持たない白式は圧倒的不利に立たされるのは明白だ。

距離を空けてはならない。焦燥に駆られる中、だが一つ謎が解ける。ブラックウイドウは姿を眩ませられる。あらゆる索敵カメラ、およびレーダーからも。だが、それなら何故その状態から近接攻撃を行わないのか。そして何故、先の一度の攻撃時に姿を現したのか。おそらくブラックウイドウは、不可視のまま攻撃を行なうことができない。いや、攻撃以外に外部接触も含めるべきだろう。先ほど足を掴んだ際、半ば透明化していた機体はそれを中断した。考えてみるに、誠の意思ではなく強制的なものだつたはず。

レーザー照準を知らせる警告音。前方のブラックウイドウからだつた。少なからず驚く。一夏は、ブラックウイドウに三次元レーダーが搭載され、それを用いることによる全方位ロックオンが可能だということを知らない。

ブラックウイドウがミサイルを発射。白煙は一発分。しばし前方を飛翔した誘導弾は、そのどちらも反転、垂直降下の形で白式に迫る。

「クソ」

毒づき、雪片を構えた。対ミサイル能力の無い白式に、今できる一番早い対処方法は一発の誘導弾を斬ることだ。斬ると同時にすれば、そのまま誠を追う。衝撃波による多少の損害は覚悟しなければならないが。

左の一発目に狙いを定めた。斬り上げてあれを仕留めた後、上段からの袈裟で右のもう一発を斬る。その光景が頭に浮かび、実現させるべく明瞭とさせた。ミサイルとの距離、残り五メートルを切る。一夏は短い呼気を吐き、一瞬の斬撃に構え。

「な……！」

爆発。雪片の範囲へ入る手前、突如としてミサイルが起爆した。爆風に仰け反る。

近接信管！

不意に悟る。間髪入れずの一発目が迫り、一夏の背後で爆発。ミサイルだけでなく、ロケット弾や砲弾にも存在する近接信管。命中ではなく目標手前で起爆し、標的にその爆風と破片とでダメージを与える。考えてみれば、ブラックウイドウに搭載されて当然の兵装。手抜かりは一夏だ。

一、三回転しながらの落下。どうにか体勢を立て直す。上空を仰ぎ見るが、すでにブラックウイドウの姿は無い。レーダーも異常無しを知らせている。

どこから来る？

正眼を構え、周囲に視線を巡らせた。出現の瞬間、姿を表した一瞬が決め手となる。カービンの射程はそれほど長く無いはず。狙撃は有り得ない。

狙撃……？

力チリ、と。頭の中で思考の空いた隙間に歯車がはまつた。最初の模擬戦の際、誠は何と言っていた。ブラックウイドウの兵装はカービンとミサイル、腕部のランチャーとチーンガン、他に特殊シヨットガンと軽機関銃。まだもう一つあつた。彼はそれを対地攻撃用と呼んでいたが、しかし……。

レーダー反応、真上、三〇〇メートル。仰ぎ見た先に静止して佇むブラックウイドウは、こちらに銃口を向けていた。カービンではない。それよりも一回りは巨大で、無骨。さながら対物ライフルをさらに肥大化させたような形状。銃身上部、陽の光を反射して煌めくのはスコープか。その銃が周囲で迸らせる青白い電流をして、一夏は全てを悟った。対地兵装、電磁加速砲。

「つ……誠！」

真正面から駆ける。そして電磁加速砲が光を放つた。狙われたのは顔面。光速で射出された弾丸は、僅かに逸れて顔の真横、左方向をすり抜ける。刹那、左頬に激痛が走った。弾丸が近すぎたため、シールドはその風圧を防げなかつたのだ。頬の肉が僅かに抉られ、擦り傷に似た痕を残す。

飛散した血が左目に入った。一瞬、押し留められそうになる。だが、構わず白式は上昇を選んだ。喉を裂く絶叫。三〇〇メートルの距離を埋めるべく、最大速で向かう。雪片は右脇に体と並行して構えられている。刺突の一撃にのみ絞つた形。この速度のまま、正面から接近して刃を突き立てる。狙うは肩。と、ディスプレイに新たな表示。零落白夜、使用可能と知らせる。間髪いれずに起動、雪片がその形状を変えた。実体ある刀身は、青白い光へ映る。

ブラックワイドウまで、一〇〇メートル。

「終わりだ」

絞り出すような聲音。オープン回線で囁く。残り、一五〇メートル。

『いや』

妙に落ち着いた響きが返つた。よもや返事があると思つていなかつた一夏は、驚愕に目を見開く。

『まだ終わらない』

カメラのフラッシュに似た、しかしそれより遙かに強烈な光が網膜を焼く。反射的に目を瞑つた直後、左肩に衝撃。電磁加速砲より放たれた一撃が着弾した。シールドにより貫通はされられ、外傷はない。それでも威力はすさまじい。一方向への前進にのみ注いでいた速力は、それにより妙な方向へ逸れ白式を横回転させた。

『まだ終わりはしない』

脳髄に浸透するような声。さながら、言い聞かせるように誠は言い、再び光が焚かれた。反射的に一夏が行なつたのは、零落白夜の解除。それまで消費していたシールドエネルギーは停止、そして腹部に衝撃を感じた。重い拳を食らつたような感覚。肺から酸素が絞り出され、一時的だが呼吸も不可能となる。仰け反り、頭から落下していく。意識が朦朧として、ひどくぼやけている。

右手にはまだ雪片の感触があった。まだ手にある。それだけで、何もできない。上空からこちらを見下ろすブラックワイドウを眺めた。黒い機体はしばし戦果を確認するように観察した後、また空へ

溶けて消える。

地上まで五〇メートルとなり、白式は衝突警告を発した。機体を引き上げなければ。だが、頭でわかつても体は言つことを聞かない。シールドエネルギーを確認。三十四パーセント。まだ余力はある。墜落にもどうにか持ち堪えるだろう。他人事のように考へてみると、やがて砂埃に包まれた。電磁加速砲の最初の一撃、あの逸れた弾丸が着弾して巻き上げられたのだろう。シールドに緩和され、それでも全身を痛める墜落を経験したのは約一秒後のことだった。暗転しかけた意識が戻り、目を開ける。落ちてゆく時と同じ砂埃の中。一夏はうつ伏せに倒れていた。白式の右手は、まだ雪片を掴んでいる。レーダーを確認、反応無し。傷を負つて肉が剥き出しの左頬に、土が触れてひりひりと痛む。

何度も呼吸を繰り返し、それから雪片を地面に突き立て支えわりに膝を立てる。息が荒い。穏やかな風が次第に土埃を晴らしてゆく。視線は定まらず、地面をじっと見つめた。不意にその景色が歪む。一夏は始め、脳震盪でも起こしたのかと思った。だが違う。ぐにゅりと形を変えた大気から黒い装甲の足が見え、気付く。顔を上げた時、同時に電磁加速砲が突きつけられた。青白い、迸る電流。こちらは膝立ち、むこうは直立。まるで処刑するかのように、ブラックウайдウは一夏を見下ろしていた。

ステルスを解除、電磁加速砲を突きつけてから誠は残弾を確認した。放つたのは三発。弾倉は十発装填のため、残り七発。再充電は完了しているが、問題は銃身冷却だつた。電磁加速砲はあくまで試験兵器であり、その域を出ない。砲と呼称されながらも、六ミリという口径から銃に分類されているものそれが原因である。いわばおまけで搭載されたようなものだ。銃身冷却に時間がかかり、連射は不可能。先ほど、空中で放つた一連射はFCS（火器管制システム）にアクセスし、セイフティを強制解除させたからできた。

あと何発撃てるだろ？充電時は冷却機能が効かない。熱は蓄積されている。また同じような連射をすれば、銃身自体が歪み爆発してもおかしくない。

そんなことを考えながら、誠は銃口を突きつけている相手を見下ろす。織斑一夏を。

「……大体、想像はつくさ」

吐き捨てるような侮蔑混じりに、言つ。焦点の定まらない一夏へ。「肺に土が入つて息が苦しい。その頬に埃が入つて痛む。頭じゃ俺を倒せと思ってるのに、体が動いてくれない。まだ動けるのに、どうやつても言うことを聞いてくれない。心配するなよ、織斑。別に脊髄やらを痛めたわけじゃない。どうやつても逃げられない死に直面すると、大抵は頭の奥で諦めがついちまうんだよ」

「諦めが……」

一夏は咳く。無線を介さない肉声。それが可能なほどの中距離だ。

「俺を殺すつもりなんだろ？」

「どうかな。……正直、光速弾に一発も耐えるとは思わなかつた。まったく、ISは面倒な相手だ。でもそろそろ限界だろ？ミサイル、光速弾、墜落。おまけに零落白夜で大分、シールドを減らしたはずだ。もう十パーセント以下だろ？」

答えはない。沈黙の肯定。誠は続ける。

「これが戦場だよ、織斑。俺の戦い方、お前の友達は卑怯だと思うかもしれない。特に篠ノ之や鳳なんかは。だが戦闘なんてのは、とことん卑怯になつた奴が生き延びる。英雄にさせられることはあっても、英雄になれる奴はない。いつかお前の一人よがりで周りが死ぬなら、今ここで殺しておくのもいいかもしないな。そのシールド残量で、いつたい何発耐えられるか……」

「俺は死なない」

若干だが強い口調。まだ雪片を支えに、どうにか膝立ちをしている一夏は、誠を睨む。

「死なんだよ。俺が引き金を絞れば、それだけだ。死はない、死にたくないで生き延びられるなら、誰も殺すための訓練なんて受けない。殺さなきや生きれないんだ。逆に言えば、死にたくないでも死ぬ。お前が遊び場程度に考えてた現実だ」

「なら撃てよ、誠。撃つてみろ。お前が殺したいのなら、そうすればいい」

しばしその顔を見つめる。奥底に隠れているであろう真意を探そうとして。だが、睨む瞳からわかるのは何もなかつた。

「よく言つ。強がりもほどほどにしろよ」

「強がりさ。否定はしない。でもお前は仲間だ。俺は信じてる」
不意に発せられた単語が、フェイスマスクに隠れた誠の眉を吊り上げる。一夏が続けた。

「昨日のこと、俺がお前の仲間を侮辱したって。そのとおりだつた

と思っている。俺が力に溺れてたのも認める。でも、お前はもう俺たちの仲間でもあるんだ。俺は信じる」

「俺がお前を撃つ訳がないって？ 仲間だからか？」

「ああ」

自身に満ちた声。カメラ越しにその瞳を見た。こちらを向いて微動だにしない視線は、真剣な光を帯びている。この男は本気で言っているのだ。それがわかつた瞬間、誠の口から薄い吐息が漏れた。嘲笑という形を成して。

「俺がお前の仲間なら、お前の友達にこんな真似はしないだろう」
一夏に疑問符が浮かぶより早く、銃身がゆらりと動く。新たな獲物を求めてさまよい、数秒後に発見した。電磁加速砲は静止する。その銃口を観客席の人影、模擬選前に千冬の述べた四人の少女たちに向け。誠は視線入力にてブラックワイドウから電磁加速砲にある指示を出した。すると突然、電流の迸る頻度が増す。銃というより、さながら避雷針のようだ。青白い光が周囲へ飛び散り、地面を焦がす。同時にいくつかの警告が表示される。誠が目を光らせたのは、うち一つだけだ。

「誠、何を」

「いまこの銃は最大出力で射撃待機となつていて。お前を撃つたような通常射撃とは違う。銃身強度やコンデンサ容量から考えて一発撃つのが限界な主力だ。この状態ならシールドエネルギーが万全であつても貫通できる。つまりここに張り巡らせられたバリアも無意味だ」

観客席を見る。銃身上部、直接・間接の両方で照準可能な複合スコープがあつた。選択しているのは間接照準。ブラックウайдウの射撃システムに接続され、フェイスマスク内部のHUDに照準情報ヘッド・アップ・ディスプレイを投影する。

誠は望遠力カメラにて四人を確認した。篠、セシリア、シャルロット、ラウラ。四人は固まつて座つている。その表情まではわからないが、動きから狼狽しているのは理解できた。微かに銃口を動かしてシャルロットとラウラに近づけた時、昨夜一人に述べた言葉が蘇る。

軽蔑してゐる、か。

本来なら言うつもりはなかつた。言葉の彩、というよりあればもう一種のノリだ。その後も適当に誤魔化したが、二人が怪訝に顔をしかめたのは言うまでもない。

突然、誠は自分の感情に驚く。後悔でもしているのか。それも今この時になつて。そんなはずは無いと言い聞かせるように、唇をきつく噛む。それから銃口を四人の中心に戻し、一夏へと視線を戻した。

「さつきの説明だと、まるで一撃必殺を使つて四人のうち一人しか仕留められないような感じだろ？ でもな、違うんだよ、織斑。こいつは試作品で、あちこちが未完成のままだ。銃自体の限界出力となると、今度は弾丸が耐えられない。それでもギリギリで形を保つてゐるからだ。バリアに着弾した瞬間、スプラッシュ現象つてやつが起きる。簡単に言えば、弾丸が潰れて弾けるんだよ。ちょうどお前の友達に散弾が襲いかかるようにな」

「いつたい何を」

緊急回線によるノイズが紛れ込む。一夏も遮られたといふことは、ブラックワイドウだけでなく白式にも伝わっているのだ。といふより、受信先を細かく限定しないオープン回線によるものだ。

『井ノ上、何のつもりだ』

「黙つていてください、織斑先生」

あくまで平静に、千冬へ言つ。返つたのは無感情の冷たい声音。

『貴様、自分が何をしているのかわかっているのか?』

「こちらの台詞です。今、この場の主導権は俺が握っている。あなたじゃない」

言いながら、誠はディスプレイの端へ視線を走らせた。ISの強制停止信号を受信、と。そう示されている。万が一の事態に備え、模擬戦を監督する教師陣には強制停止コマンドへのアクセス許可が存在していた。千冬や、それとも副担任の山田真耶やまだまやか。どちらかがそれを使用したのだ。強制停止はIS自体に大きな負荷がかかるため、最終手段でしかない。いまそれを使わなくてはならないと、二名の教師は判断している。

やりすぎてるな。

ほんの一瞬、誠の中で罪悪感に似た思いが生まれる。だがそんなものはすぐに姿を消し、彼は音声認識によってブラックワイドウへ命じた。その場の誰にも聞こえないような小声で。

「エシユロンへアクセス、機体認証コードを使用。当機を合衆国IS登録覧から一時的に隔離」

数瞬の間が空き、命令実行の表示。すぐさまそれは成功へと切り替わった。同時に信号受信の表示は消失。無線の向こう側、千冬が息を呑むのがわかった。

「無駄ですよ、先生。そいつはISであることが根底の信号なんですか。……こいつには意味がない」

『井ノ上』

怒声を回線ごと遮断。再び一夏を見る。

「あまり時間も無いだろう。今に教師連中がここに来る。現状でどうあがいても俺の負けだ。だから、織斑」

トリガーを僅かに絞る。それだけで脅しとなるのは当然だつた。

一夏の表情から読み取れるのは戦慄の一言のみ。

「俺はあの四人を撃つ。お前と交渉はしない。問答無用で撃つ。止めたいのなら俺を殺すしかない」

「お前は仲間だろ、誠！」

「まだ信用するか？ それとも説得のつもりか？ どちらにしても意味は無いぞ。話し合いで解決できないから殺しあつてはいる。口喧嘩で終わる段階はもうとっくに終わつたんだ。……さて、どうする？」

不意に、自分が何かを期待しているのがわかつた。それは死だ。一夏が雪片を取り、こちらへと突き立てる。そして己の死を持つて一夏を同類へと墮とすこと。すなわち殺人者へと。そうさせるのはかつての仲間や過去の出来事からではない。ただ単に、気に食わない。それだけだった。この上なく幼稚で、理性の欠片もない幼稚な発想。例え死んでも、それでこの男が血に汚れ破滅するならば構わない。

なので一夏の返答は、誠を嘆息させることとなつた。

「俺は信じてる」

先ほどから微動だにしない主張。一言を返す。

「そうか」

四人を一瞥し、続けた。

「せめて手向けの言葉でも送つてやればいいのにな」

微かに笑い、彼はトリガーを引いて発砲を。

視界の端で何かが動いた。白い影、白式。下段から斬り上げられた刃は電磁加速砲を叩き、発砲直前でその射線を狂わせる。衝撃でトリガーが絞られた。発砲。銃口は空を向いている。発せられた光もまた上空へ飛んだ。上下逆さまの、地上から空に駆ける雷か。

眼前で上段から一撃目へ映る雪片の刀身。降り下ろされた瞬間、

電磁加速砲を斬撃とブラックウイドウとの間に割り込ませた。だが、銃身は先述の通り強度の限界に達している。雪片を止めることがなく、半ばから両断されて金属片を撒き散らした。

「二の馬鹿野郎が！」

一夏の絶叫。続く三撃田は再び下段からの斬り上げ。回避はできない。迫る刃がスローモーションで映った。認識が追いついていない。

しかし体は違う。ブラックウイドウの左手が、不意に下げられた。武装を求めて。行き着いたのは銃器で無い。今まで機体の左腰にずっとぶら下がり、誠自身もナマクラと称した刀の鞘。そして口が思いつくより先にブラックウイドウへ命じている。

「ヒロヒー！」

ブラックウイドウは発せられた単語を即座に検索、戦闘モードの一つにそれを見つけ起動する。同時にHURDが切り替わった。全兵装、カービンなどの銃器から腕部のランチャー、チヨーンガン、さらにはミサイルまでが使用不可と表示される。ただ一つの武器を除き。だが異変はもう一つあった。九〇と表示されていたシールドエネルギーが瞬時に低下、その余力を僅か三パーセントに変える。

雪片が装甲を切り裂く直前、ブラックウイドウの右手が刀の柄を握り、抜き放つ。現れた刀身は人のサイズからすれば大振りな野太刀に相当するも、体を一回り以上は大きくさせる機動兵器同士の戦闘では、並みの太刀と変わりはない。二つの刃が切りあつた瞬間、変化が起きた。ブラックウイドウの刀、その刃が青白く発光する。数瞬の愕然合いに互いを弾いて飛び退く。着地の瞬間、刀身は鞘の内へ回帰した。三メートル弱の距離で白式と向かい合つたブラックウイドウは、左足を半歩ほど退かせ、柄にそっと右手を添えた居合いの構えをしている。

誠は深く息を吐き、それから笑う。

「やればできるじゃないか、織斑」

「……ふざけるなよ、誠」

苛立ちを押し殺すように、一夏。白式は正眼の構え。正面から誠を睨んだまま、彼は続ける。

「お前みたいな馬鹿はいくら言つても聞かないんだな」

「同感だね。まあ、それでいいさ。理由はあれこれあっても結局、原因は一つだけなんだ。織斑、俺はお前が嫌いでならない。率直に言つて、お前だけじゃない。ここにいる連中、全員だ。どれも平和ボケしたような顔してやがる。それが気に入らない」

「ならどうして軍隊に入った？ お前自身が選んだんだろ？」

「ああ、そのとおりだ。そうしなければいいと、散々思つた。軍に育てられたの、仲間が残つてゐるだの、そんなものは俺の勝手な思い込みで、俺が残る必要なんて無いつて。でも生憎、理論で片付けられるほどできた人間じゃないんだよ。 無駄話が過ぎたな」

ブラックウイドウは身を沈める。ほとんど手を使わない四つん這いのよだな格好になり。傍から見れば、さながら一本足のクロコケグモだつた。

呼応するよつこ一夏は言つ。

「馬鹿だよ、お前は、誠。本当に馬鹿だ」

「結構。なら尚更、本物の一騎打ちといつてじゃないか。日本じゃ馬鹿につける薬は無い、とか言つんだろ？」

卑屈な笑いが漏れる。対する一夏は正眼から下段へと構えを移し、述べた。

「まったくだな。」の馬鹿野郎

携えた太刀を下段に構える。その刃は抜刀から一分半が過ぎた現在もなお、青白い輝きを失っていない。一夏たちの言葉に合わせるならば、これがブラックウайдウのワンオフ・アビリティ。少なくとも誠の認識はそうだった。

「お前の剣に零落白夜、いや雪片式型の名前があるように、これにも名前がある」「

誠は言う。目の前に立つ敵を見据えて、

「銘を井上和泉守国貞、『現式真改げんしきしんかい』」

「真改……？」

眼前、正眼に雪片を構える一夏が首を傾げた。予想外ではない。戦闘中につけ込む隙を見せる立ち振る舞い共々、そうなるだろうと考えてはいた。現実にここまで無防備を晒されでは、呆れるを通り越して苦笑するしかないが。

「知っているか」

「少しば」

やはり、と胸中に呟く。入学前、送られた生徒のプロフィールを思い出さずとも、模擬戦で手を合わせていればわかる。一夏の技は少なからず剣道を基本にしてなりたつていた。ISは空中戦がほとんどとなるため、そこに少なからずのアレンジを加えているようだが。格闘戦での間合いの取り方は、剣道そのものだった。そして彼のように上昇志向が強い、つまり理想を求めるような人間は、総じて過去の技術を知ろうとする。そこに剣道という嗜みが合わさつて、真改の名を知っているというのも納得できる理由だ。

井上真改とは、遠い過去の一六三〇年から八〇年前後まで日本に生きたという刀工である。その作風は大阪の刀工の中でも最高峰に数えられ、日本刀の世界では名刀、宝刀もしくは聖剣の代名詞たる正宗に匹敵、それ故に大阪正宗とも称された。初期には同じ刀工で

あり国貞の銘を使った父の作風、技法を継承した作りであり、その後から独自の作が現れる。そうしてできた彼の作は父のそれを凌ぐと言われ、現在でも重要文化財に指定される品が存在した。

「これは単に名を削った太刀じゃない。親父が家から持ち出し、工S用装備として改良、打ち直しを行なった本物の真改だ」

「親父さんがつて、お前……」

察したのだろう。一夏の目が僅かに細まる。

「転校してきた日、言つただろう。親父は日本人だと。井ノ上は親父の家の名前だ。それ自体は珍しくもないし書く字も違うが、井上真改は俺の遠縁に当たる」

一瞬、誠は笑みを浮かべた。歪んだ笑みだ。同時に跳ぶ。地を這うような超低空飛行により、白式へ到達するまでは僅か一秒に満たない。一夏の顔に浮かんだ驚愕を見ると同時に、すれ違いざまの斬撃を見舞う。金属音と衝撃。胴を狙い振るわれた真改は、雪片の刃に阻まれる。そのまま十メートルほどを飛び、反転。再び向き合つた。

「親父は立派な人だつた。単身でアメリカへ赴き、母さんと共に空軍の航空機開発で名を上げた。作る物に違いはあつても、そこには真改の刀に似た煌めきがあつた。現用されていた米軍機の最新型は、あの人の設計だ。だがそんなものはすぐ踏み躡られた。……お前にはわからないだろう」

接近、二度目の低空飛行。遠目では滑空にも思えただろう。構えは同じ下段。一夏が身構え、間合いを図つた。瞬間的に踏み込んだ誠は、しかし刃を振るわない。いや、それどころか直前で急停止した。

「つ！」

一夏のタイミングにずれが生じる。踏み込みかけた足を無理やり留め、それにより体勢が崩れた。

全ては計略通り。誠はそう自負し、一夏が体勢を取り戻そうとしているときには、八相へと構え直した真改を横薙ぎに一閃させてい

る。青い軌跡。これを間近で見守れっていれば、達人であっても誠の間合いで疑問を抱いただろ。狙つたのは首筋、それも切つ先が届くかどうかの距離で。危険を減少させるため、あるいは臆病風に吹かれたとも見える。武器に関わらずその間合い、効果範囲に入るというのは自らも敵に身を晒すことを意味した。誠はこれをレインジャー時代に叩き込まれた教訓で理解している。

スコープに狙撃兵を見つけたら、向こうもお前を見つけていると思え。

この法則はおよそ全ての兵器に当てはまる。銃も剣も、さらには弾道ミサイルであつても、だ。一方的に攻撃できる距離というのは、その状況はさておき性能面に絞ると意外なほど少ない。

誠の行動はそうした相打ちの危険に怯えたようにも見えたのだ。不意打ちで体を崩しても尚、保身を優先したのだと。しかし違う。彼は最初から切つ先でもつて首の頸動脈を断とうとした。不必要に踏み込むより、そうしたほうが速度と威力で勝つていると考えたからである。最も、これが装甲面なりいざしらず、生身の首を狙つたのだから後者はあまり意味が無いだろ。いや、むしろ必要以上の斬撃を加えたくないような、そんな印象だ。

反射的に一夏は上体を引いた。そのせいで、的確に切り裂くかと思われた斬撃は、しかし鋭く空を切るのみ。ただし掠りはしたらしい。無様に倒れる白式から飛び退くとき、その首に細く赤い一線を確かめる。

「あの日だ、織斑」

口調に僅かな怒氣を含ませ、誠は言つ。立ち上がる一夏を眺めながら。追撃を留めたのは何かしらのカウンターを警戒したことと、正面から打ちのめしたいという願望に逆らえなかつたため。

「白騎士事件。あのふざけた戦闘でISが全世界に知れ渡り、そして開発競争が始まつた。多くの技術者と一緒に、親父もIS開発へ参加することとなつた」

開発者である篠ノ之束を除き、当時は世界中のビームを探しても工

S専門の技術者などは存在しなかった。当然だ。いきなり湧いて出たイレギュラーは、つまりところの宇宙人に等しい。その技術・構造を解析するにも、まずどうすれば解析できるのかわからないのだ。軍部はこの状況に対して、ある分野の技術者たちを集め篠ノ之束にノウハウを教え込ませた。集められたのはISの特徴に近い兵器の専門家。火力ならば戦車を、飛行能力なら航空機を、と。そのためIS専門の技術開発者・研究者というのは歴史が浅い。それ以前は何らかの別分野に上乗せする形で存在していたため、専門とは言えなかつたからだ。純粹にISのみを絞つた技術者というのは、そういう人々から得た知識を縫い合わせることで、数年前からようやく誕生した。

「あの日だ。あれが始まりだった」

誠は続ける。先の台詞を反芻するように。話していく楽しいものではない。だが真改の存在を語るため、それは避けてはならなかつた。あるいは語らないというのもありえる。戦略面で見れば、自分の手の内を晒すなど特殊な状況下でなければ無意味であり、無価値だ。しかしそれもできない。織斑一夏は全てを知らせた上で斬り伏せる。

「あの人はIS研究に着手したその日から、何かがおかしくなつた。ISを恐れ、その上で無力を痛感していた。それまで築き上げた成果を一蹴する兵器を、作りながら憎んでいた。母さんも同じだ。二人は俺を見ないようになった。だが、それだけならまだ良かつた」構えを解く。右手の真改を逆手持ちへと変えた。そして地面に突き立てる。

「拳句、あの人はこんなものまで作つてしまつた。真改の名刀をナマクラへと変えたんだ！」

絶叫。ハツ当たりのよつた怒りを、誠は感じていた。

「ナマクラ……」

一夏はその単語を反芻する。疑つよつ。

「嘘だと思うか？」

「……嘘かどうかはわからない。でも俺には、ナマクラには見えない」

フルフェイス・マスクの下、誠は口を歪める。

「ああ、そうとも。今は違う。今だけは、再び真改を手に取つた。切つ先の土埃を払つため一振りし、先端を一夏へ突き出す。

「どれほど名刀であつても、旧時代の武器をISに持たせることなんて出来はしない。だから作り替えた。刀身を溶かし、新たな金属を混ぜ、刃の代わりに機械を埋め込んだ」

現代戦に対抗できる日本刀。それは底辺まで落ちることとなつた愚者の思いつきだったのか、それとも他国へ住まいながらも持ち続けた日本人のプライドと見るべきか。現代に存在するあらゆる物と渡り合え、斬り捨てる。故に現式真改。果たしてすでに別の太刀となつたような代物に、真改の銘は必要だつたのか否か。

誠は言つ。

「IJの現式真改には刀身がある。だが刃が無い。いま現れているこれは、ある条件下によつてのみ出現する。ブラックウайдウのシールドエネルギー、その九〇パーセント近くを吸収することによつてできる、高出力・高密度のレーザーだ」

「……吸収」

一夏は氣付いたらしい。その表情の変化を、誠は感じ取つた。

「そうだ、織斑。お前たち姉弟の零落白夜と同じ発想だ。あらゆる物質を断ち切れる非金属の刃。違うのは物質を斬るかシールドを斬るか、それと時間経過で吸収するのではなく、先にほんの少しを吸収して発動する点だ」

シールドの九割を失つて初めて形成される刃。それは、かつての航空機開発で高い地位を得た父とは思えないほど、非実用的なものだつた。おそらく、ISでは扱えなかつただろう。いや、扱えても決して装備されなかつたはずだ。これは非シールド戦闘を想定されたブラックウайдウだからこそ、搭載可能とされた“おまけ”に過

ぎない。これを初めて手にした瞬間を、誠は覚えている。最早、面影の欠片すらない兵器に抱いたのは、父親の絶望と父親への失望。

現式真改はその存在を知る一部の人間から“幻式真改”と囁かれる。装備を可能としても実用性の無い、つまりほとんど陽の光を浴びることのない刀への侮辱だ。もはや真改の銘すら必要の無い代物となってしまった、紛れもない業物への。誠にはそれが落ちぶれた父を指差す嘲笑にも聞こえた。

「あの人失脚も、こんな兵器を作った愚行も、お前に当て付けようなんては思っちゃいない。いつかあの女に支払わせる代金だ」

あの人、と。いつからか誠は父親をそう呼んでいた。他人行儀な台詞。親父と呼ばなくなつたのは、その背中を思い出したからだろうか。自分から遠くなるだけならまだしも、尊敬した姿さえ失つた父の末路を。彼の中で、父親とはIS開発に引き抜かれた時点で死んだものなのかもしれない。

だが、と誠は言う。

「それでも感情は抑えきれない。俺もガキつてことだらう。ろくな訓練もしないで平和に生きてるお前たちのような奴等が、ISを扱うということ。お前たちが訓練を積んだ大勢の精銳より重要視されていること。その精銳を、お前たち程度の人間が一瞬で殺したこと」真改を振るう。上段から縦に一閃。青い燐光が尾を引く。素振りのような動作の後、誠は右下段へと構えた。

「お前が殺したんじゃない。けれどお前を見ているとそう思えて仕方がない。そう思い込む。親父も仲間も、殺したのはISだ。わかつてているのに、それでも……」

思い込む、と誠は言う。違えることのない自覚の証明だ。彼はわかつていながらも、感情を抑え込み理性を働かせる術を知らない。殺すのは人であつて兵器にあらず。何度も言い聞かせたわからない言葉は、未だに浸透していなかつた。

「俺はお前を倒す。この上なく惨めに、圧倒的に……傲慢に。ただのハつ当たりと逆恨みで、叩きのめす！」

踏み出した左足で地を蹴る。ブラックワイドウの脚力はそれだけで機体を地面から離し、さらに勢いを与えた。誠は飛行の途中、真改を鞘へ収める。停戦の申し入れではない。その逆、徹底抗戦の表明だった。形成されたのは居合いの構え。

誠にとって、これは奥の手でもあった。彼が日本の剣術を学んだのはそう長い期間でない。そんな短期間で会得した技の中では、これが一番と称して良い自信を持てる。練度もさることながら、重要なのはその威力と確実な致死性。名を“虚空渡し”という。

本来、居合いとはこちらから踏み込んで斬る技ではない。抜かずして斬る、というように、その極意は力を使わず相手を制することにある。太刀を露にする場面は、総じて相手が斬り込んできた後。その刃が届く前に一瞬で斬り捨てるか、受けと返しの技を一連で叩き込む。

虚空渡しはそういうた居合いにおいて、人によつては邪道とも思える攻めの技であった。いや、それよりも尚悪い。これは騙し討ちの技だ。多くの居合いがそうであるように、これもまた右手で太刀を抜き放つ。異なるのは抜いたその後で、右手に保持したまま斬らないのだ。抜き放たれた瞬間、右手はその役目を終えて代わりに来るのが鞘にあつたはずの左手。要するに左右の手を入れ替える。そして踏み込みの瞬間、横薙ぎと思わせ左の逆手に持つた刃で、すれば違いざまの胴を斬り抜く。遺い手からすれば虚像の居合い。受け手からすれば虚偽の太刀。後者には己の振るう刃が、読み違いから空を斬るという意味も含まれる。故に虚空渡し。

まともな居合いを、というよりまつとうな剣術を学んだ人間ならば、まず間違いなく嫌悪するであろう技だ。これが実戦で使えるかというと、それも難点。踏み込みと同時に斬るはずの動作を、わざわざ長引かせているのだから。使用者に不利な隙を強いることとなる。これを好み、最も自信があるとする誠は、やはりどこかが歪んでいる証拠なのかな。

「……？」

なんだ？

斬り込みにいつた直後、誠は一夏の行動に眉をひそめた。構えを解き、雪片を右手に提げているだけ。つまり無防備な格好。まるで斬るならば斬れと言わんばかりの立ち振る舞いだった。あるいは挑発と見るべきか。しかし考えるより先に体は動き、また距離も充分に縮まっていた。

前方から接近する黒い影。まさしく影、いや蜘蛛だ。先の一撃と同様に、これも地面より数センチだけ浮いた位置を維持し、向かってくる。違うのは構えだ。左腰を僅かに退き、右手でもうつて鞘に収まつた太刀の柄を握る。居合いの形。

疑問は多かつた。誠はどこで剣術を習つたのか。なぜ居合いという並みの剣術より遙かに技量を必要とする技を会得しているのか。彼はいつたい、どれほどの執念を持つてI.Sを敵とするのか。どうして敵と認識したI.Sを使用できるのか。現式真改はブラックワイドウのワンオフ・アビリティではないのか。いやそもそも、あれは本当にI.Sか。

一夏は諸々の疑問を抱き、忘れた。思考の外へ追いやる。いや違う。もつと自然に、流し出した。軽く息を吐く。雪片を逆手に持ち替えた。刹那、眼前に黒い機体が現れる。鋭く空気を吸い、肺を半ばほど満たした。

両者は共に刃を突き出す。駆け抜けようとするブラックワイドウの横倒しになつた真改を、一夏の雪片は受け止めた。打ち合いの一瞬、それは十字架を形成したようにみえる。救いと非暴力の象徴が、刀剣という真逆の存在によつて誕生してしまつ。

「つ！」

耳障りな金属音の中、誠が息を呑むのがわかつた。防がれると思つていなかつたのか。そこで一夏は気付く。真改が右手で無く左手に、それも逆手へ握られていたことに。いつ持ち替えたのか、一夏

にはわからない。奇しくも両者は共に逆手の刃でもって挑んだことになる。殺すため向けられた凶刃に、受け止めるべく向けられた護剣。一夏の胸中に僅かな、だが確かな怒りが生まれる。なぜこの男、井ノ上誠ばかりがこれほどまで背負わなければならないのか。

誠の呼吸が崩れる。こういう手合いにおいて、呼吸とは心身のバランスへ直結した。必殺の一撃を阻まれたのが原因か。

「誠！」

動搖にブラックワイドウの動きが鈍つたその一瞬、白式の左手が肩を掴んで押し倒す。いかに強固な装甲を全身に纏つていようと、内部の操縦手が筋肉を弛緩させていれば意味がない。黒い機体はあつけなく倒れた。一夏はその顔へいまだ逆手に持つたままの雪片を突き立てる。

ブラックワイドウの頭部。その真横へ突き刺さった雪片を持ち、一夏は見下ろす。

「なんでだ、誠」

一夏は言つ。憤慨とも同情とも取れる表情で。硬いマスクの下、誠が困惑しているのがわかつた。

「どうして一人で背負つ。どうして俺たちを頼らない！」

「……なんだと？」

これがISを使った模擬戦であることを、一夏は煩わしく思つた。そうでないなら、胸ぐらを掴んで揺さぶつてやりたい。

「ハつ当たりも、逆恨みも、それがわかつてゐなら俺に言えよ！ どうして一人で片付けようと思つんだ、お前は！」

「戯言を……」

歯ぎしりに似た音を聞く。自分の奥歯か、と一夏は錯覚した。しかし違う。誠だ。そして氣付く。ブラックワイドウはまだ、現式真改を手放していない。

「ほざくな、織斑！」

青い閃光にも似た刺突。一発食らつた電磁加速砲の銃口炎を彷彿とさせる。左へ転がり真改を避ける。足場も何も無い仰向けからの

突きだ。速度は遅く、回避もたやすい。誠もそれはわかっていたはずだ。それでも繰り出したのは、速度を得ずとも真改だけで充分な斬れ味があると判断したからだろうか。

ブラックウайдウより離れた瞬間、左手をバネにして白式は立ち上がる。右手には雪片。正面で、誠はゆっくりと身を起こしていた。「頼れだと？ 一人で片付けるな、背負うなど？ どうしてお前に頼る必要がある。お前の何を頼れというんだ」

「仲間はそういうもんだからだ、誠」

「まだそれを言つか」

静かな口調。違う、静かなのではない。無機質な声だ。憎悪も苛立ちも、人質や騙し討ちを使つた自己嫌悪も。総じて全てをかなぐり捨て、目の前の敵にむける極めて純粹な言葉。裏どころか表もない無気力と生命力の狭間にあたる声だった。そこまで追い込んだのは自分だと、一夏は思い、それが自己満足で傲慢な思い込みだと理解し、正面から聞く。

「訊かせてくれ、一夏。ここまで来てどうして、俺が仲間だと思う？」

「僅かな違いがわかつた。誠は纖斑でなく、一夏と呼んだ。

「同じ部屋に住んで、一緒に飯食べて、皆で笑つた。仲間になるなんて、それだけで充分だ」

「……俺は人質を取つたぞ。あいつらの眉間に銃口を向けたぞ」

「わかってる。幕にセシリ亞、シャルにラウラ。ここにいない鈴音だつてそうだ。お前はあいつらを脅かした。殺そうとして、脅しに使つた。でも殺さなかつた。だから怯えさせた分だけ、お前を許さない。けどな、それで仲間の縁を切つたなんて思うなよ。仲間になることはできても抜け出すことなんてできない。お前一人を抜け出させない。それが俺の仲間だ」

短い、乾いた笑いが耳に響く。誠の本心を表したものだろう。

「迷惑な奴だ」

ブラックウайдウが太刀を構える。幻式、いや現式真改。右斜め

に刀身を落とした下段だった。

これが最後になる、と。一夏は確信する。目に分かる確証などなかつた。もし持ち合わせていたとしても、必要ではない。あつたところで意味など無いのだ。

そして一夏も構える。誠と同じ、右の下段。剣道で習つたものではなかつた。いや、そもそも今回の模擬戦で基礎的な動きはそうであつても、剣術は全て我流といえる。斬り込みの予備動作を少なくし、速度を上げる。そのためだけに下段を選んだ。

似て非なる構えをした両者は、しばし互いの姿を焼き付けるが如く沈黙する。数瞬、数秒、あるいは数分。単に踏ん切りがつかないのではない。己の呼吸を計り、相手の呼吸を計り、来るべき最上の瞬間を待ち構える。

ほんの一瞬、真改がその向きを変えた。青い光刃をこちらに向けられる。来る、と直感したとき、一夏は地を蹴つた。一撃で仕留める。その信念の下、雪片は舞い踊り、眼前ではブラックワイドウが振るう一閃が光を曳いていた。

現式真改のレーザー刃が白式を切り裂かんとする直前、誠は過去に出会つた気がした。いや、既視感と述べたほうが的確だろう。この瞬間は以前にも経験したと、思い出す。それは錯覚とは程遠い、明確な記憶だった。

誠は覚えている。ブラックワイドウに乗り現式真改を振るう」と、対面で大型の杭にも似た物体を装備した右腕を突き出す敵機。そのフォルムはブラックワイドウに似て非なる直線的な形状で、全身を覆い、しかし無数の複眼カメラを収めたフルフェイス・マスクと灰色をしたカラーリングが異なつてゐる。誠は知つてゐる。あの機体、あの少女に自分は一度として勝つことができなかつたと。同じスティルス強襲型の機体、猛禽^{ラプタ}。そして正村湊^{まさむらみなと}。いや彼女だけでは無い。当時を監督していた人物が、今になつて蘇る。部隊長、情報分析官、

同僚の仲間たち、ドク カイル・ノーマッド。

その時点で、誠の本心は悟っていた。あくまでも本心は、敗北の記憶と同じ状況。つまりこの先に待つものも同じ。

真改が薙ぐ。雪片が振るわれる。永劫と思われた追憶の時間は、その瞬間に崩れさつた。互いに一度きりの斬撃。二撃目をかけるといつ考えは、誠だけでなく一夏にも浮かばなかつただろう。これが両者の限界だつた。もはや再び真改もしくは雪片を振るう力は、残つてない。

ブラックウайдウは数歩を進む。右手に現式真改をぶら下げて。いや、今はもうその名で呼ぶに相応しくないだろう。マスクの内部、HUDに表示された“CQC OFF”の文字が、全てを語つた。レーザーの消失した現式真改は、この瞬間を持つて以前のナマクラへと回帰する。そして何度も踏み出した時、ナマクラはブラックウайдウから滑り落ちた。耳障りな金属音。誠の頭には、反響するはずの無いそのそれが延々と繰り返された。物悲しさと未練とが混ざり合つた響き。あるいは父の姿を思い出したのだろうか、とも思える。彼には判断できなかつた。刃の無い太刀を手放した時、ブラックウайдウは膝から崩れ落ちる。そしてそのまま、うつ伏せになつて倒れた。何より身体が地面に横たわる寸前、すでに誠の意識はどこかの世界に落下し、また役目を終えた分厚い全身装甲の鎧が消失したのだ。

暗い夢の中で、誠は悟る。今回も負けたのだ、と。そして遙か頭上で蜃気楼のように光る太陽を見つめ、今まで決して手の届いたことの無い勝利の味を想像した。

7（後書き）

相変わらずヒロイン勢は空氣です。各種ヒロインが嫁の方々、申し訳ありません。作者は某酢豚が好きだったりします。関係ないです。

次の話で序盤は終了予定です。誤字脱字の発見、作者へのご意見・ご抗議・ご指摘がありましたらお気軽にどうぞ。

それまでがどうであっても、一定期間を酷い環境で過ごした場合の感覚とは中々抜けないものだ。例えば過度なストレスを与える激戦区で過ごした兵士の場合、ベッドよりも野宿のほうが熟睡できるという。居心地云々でなく、安心しすぎるのがかえって悪影響となるのだ。安らぎとは人にゆとりを与える、余裕を持たせる。そんな時に脳がどう作用するかというと、情報や記憶の整理にかかり、つまりは夢を見させた。

当てはまらない人間も多いだろう。どれほど科学的に証明されようと、イレギュラー要素は存在する。誠はこの点に関して例外ではない。己の横たわる柔らかなシーツの感触に包まれ、夢を見ていた。別段、悪夢ではない。ただ単純に、友人が寝ている自分を見下ろしているというだけだ。

『慌てて来てみれば、こんなざまとは』
呆れたような口調で言つ。顔は見えない。しかし誰なのかという特定はできる。当然だつた。ここ数年は顔を合わせていないものの、その声は連日のように聞いていたのだから。

『俺の忠告なんて聞く価値も無いと言いたいのかな、お前は嘆息が聞こえる。

悪いな。

夢の中で誠は苦笑した。声に無い、思考だけの謝罪。現実であれば気付かれるはずもないが、これは夢だ。友人は返答する。

『今度からは是非、こうなる前にその考え方へ至つてもらいたいものだよ』

責めるでもない冗談めいた皮肉。いかにも彼らしい言葉だ。ぽんやりと響くそれを聞くと、夢とは卑怯なものだと思った。敗北に敗北を重ね、あるいはそれだけならば良かつただろう。しかし今回、原因は完全に誠の非だ。自分勝手な独断と偏見、思い込みで感情に

走り、あげく関わりはあれど危険を迫られるはずのなかつた少女たちまで巻き込んでい。ここまでして、こんな言葉で済むはずがない。責められて当然。いや、罰せられて当然だ。なのに罰ではなく、ただの皮肉だけが降つてくる。

ふと、左腕に違和感を感じた。金属か何かが触れるような、そんな感触だった。弛緩しきつた筋肉に、精神も同様。重く氣だるく感覚が無い。麻酔を注射されてすぐ皮膚を抓られたらこんな感じだろうか。苦痛はないがかといって快楽とも言えない。よほどの特異もとい異常性癖ならそれも有り得たかもしれないが。鈍つた感度で何がどうなつているか把握できない。わかるのはただ、何かをされているというだけ。よりもよつて自分の体のことを、だ。痛みが存在しないことがどれほど恐ろしいものか、改めて実感する。何をした？

『充電だ』

問い合わせに、率直な答え。

ああ……。

なるほど、と納得した。消耗したバッテリーを再び使えるようにするには、充電する以外に方法がない。予備があるのなら、使い捨て同然に破棄して取り替えるという手もあるだろう。万が一、再充電が不可能なほど使い古した場合もそうだ。しかしそうはならない。予備が無い現状であれば、充電しなければ。そうして騙し騙しに使い回すしかない。

『馬鹿が。何をどう血迷つて現式真改を使つたのか、俺としては小一時間の説明してもらいたいがな』

文章してくれ。

『お前に舌が無ければそつなるかもな。喋れない被告が法廷に出たら、紙とペンに頼るしかないだろつよ。でも諦めろ。残念ながら、お前にはまだ舌がついてる』

誠は苦笑する。これまで幾度となく、その皮肉をこいつやつて返してきた。

重傷か？

『当然。しばらくブラックウェイドウは起動できない。指一本動かすための電力負荷だけで、この世とお別れできる。まだそうなりたくないだろ？』

いつだつてごめんだよ。

できるだけ本音に聞こえるよう心がけた。嘘ではない。どれほど苦痛であつても、たとえ迫り来る絶望の一文字に納得してしまつても、死にたいと望んだことはなかつた。これまで、一度たりとも見下ろす人物もそれはわかつてゐるはずだ。これは単なる言葉遊びか、さもなくば普段と変わらない皮肉の一種。

不意に分かつた氣がした。自分が怯えていることに。死ではなく、こちらを見下ろして喋つてゐる彼が恐ろしい。彼、そう男だ。今まで、夢で出会う人物は決まつていて。一度として勝ちを譲らず、とうとうそのまま消えてしまつた人。だが今回に限つて違つた。“彼女”ではない。見下ろす男は、彼女たちと同じ道を選ばなかつた。今となつては唯一といえる、生存に確証が存在する同胞。

ふとおかしくなつた。堪えようとしても、腹の底から沸き上がる滑稽さは抑えようもない。だから誠は笑つた。夢の中で、くくつ、と喉奥を鳴らす声を出し、堪えようともせず口元を歪ませる。

『……時々考える。実は俺のことを馬鹿にしてないか？』

心外だと言わんばかりの口調で、男は問いかけてきた。

いや違う、違うよ。あんたのことじやない。俺が笑つてるのは自分のことだ。

尚も収まらない。怪訝そうに男が首をかしげる氣配。それから思いついたように彼は言つた。

『こうして一歳年下で軍事訓練の経験も無い同級生にぶちのめされたイノウエ少尉は頭がイカれちまい、米軍屈指の馬鹿げた男になりました、と』

小説でも書くつもりか？

『ああ。自伝を一冊まとめようかとな。五〇年後くらいに』

あと五〇年も生きるつて？ 迷惑な糞じじいがまた一人増え
るわけだ。

『 そうだ。お前も一緒に連れてつてやるよ。一人仲良く年寄りにな
つて大往生だ。』

……それで？』

込み上げる自嘲の理由を、男は訪ねていた。

いやなに、あんたがそこにいるのがおかしいんだ。今までは
湊だつたのに、あんただ。生きてるのがわかりきつてる人間が夢に
出てくるつてのが、恐ろしく怖くて、そんなことを考へてる自分が
馬鹿みたいなんだよ。

『 ……ほう』

男は声を吐息に乗せて漏らす。そうするしかないようだつた。肯
定でも否定でも、思考するでも無い。ただ声に出す。まるで感心が
あるかの如く見せかけるため。つまり彼の感心は別のところにある。
誠の述べた内容でなく、単語に。

『夢。夢かね』

なんだよ。

『いや。……そうだな、お前には夢だ。今この時だけは、夢でいい
ここで言つことも無いだろ。夢なら夢らしく、さつさと消
えてもらいたいよ。そういうことは現実のあんたから聞くし、俺だ
つて逃避する期間は終わつたんだ。向き合つて覚悟はできてる。』

『 そう願つよ』

ここまで、ぼんやりとしながらも思考を保つていた頭が、不意に
怠惰となつた。考へることができない。白い靄がかかつたというよ
り、白い世界に取り残されたよつだつた。最初から閉じられている
目蓋が尚も重い。これ以上、どう脱力しろというのか。

手足は弛緩している。指一本、動かすことができない。いや、そ
れすら面倒だ。面倒だから何もしない。ただあるまゝに、重力へ従
つて肉体をベッドに横たえている。不快ではない、と誠は思った。
次の瞬間には不快という意味も忘れている。忘却は恐るべき速さで

侵食した。言語の次に感情を、感情の次に記憶を、記憶の次には目的を。そうして忘れてゆくと、全身へのしかかっていた重みが共に姿を消してゆくのがわかった。これまで無自覚だった、何らかの気負いだ。全てを心の底から捨て、失う。

何も無い世界。誠の意識はその中でゆっくりと落ちていった。底なし沼へ沈むとき、抵抗しては苦しむだけだ。ゆつたりと身を任せることに限る。

ただし彼はわかつていた。これが永遠に続くはずがないことを。まさしく、一時の夢でしかない。

どれくらいの時間が経ったのか。一日、半日、数時間か。もしかしたら一瞬だつたかもしれない。意識のなかでは一瞬というのが納得できる。奇妙な夢の世界で、白い闇とでも表現できる奈落へ沈んでいったのは、まさに瞬きの瞬間だつた。意識が覚醒した時、体が異様に軽いのがわかる。ただ眠つただけでこうはならないだろう。誠はこの感覚を知つている。睡眠薬だ。長距離を移動する際、不要なストレスを抱えないよう支給される錠剤と、よく似た目覚めだつた。

そして目蓋を開いた時、眼球はただ一点を見つめて止まる。こちらを見下ろしている、見知った顔。

「……湊？」

声に出してみる。彼女は淡く微笑んだ。幻影か。そう思つたが、存在感は確かなものだ。彼女は実在している。しかし、なぜ？

結論は一つだつた。今までの出来事が全て夢であり、自分はいつものように目覚めただけなのだと。そう、全てだ。織斑一夏との模擬戦も、学園も。いやもつと以前から。イギリス軍のISに攻撃されることも、自分の前から消えてゆく仲間たちも全て嘘だつた。深い安堵が訪れ、長い吐息が漏れる。目を瞑つた。肩の荷が取れたような気分になる。ふと、頭のどこかで声がした。

向き合つ覚悟はできる。

いつ聞いたのか、もしくは言つたのか。それはよくわからない。しかし思い出した瞬間、冷水を脳に浴びたが如く思考が明瞭となつた。目を開ける。こちらを見下ろす人物をもう一度見た。困惑に戸惑つ瞳は、湊でなかつた。

「デコノア……？」

「……」

シャルロットは俯き、答えない。その様子や現実を認識した失望感よりも、誠は自分の舌が気になつた。うまく呂律が回らない。自身の耳で聞く限りは間違いなく思い通りの言葉を喋つているのだが、どこかもつれている。

「なんでお前が

「

ここにいるんだ、と続けよつとし、叶わない。よつやく氣付いた。ここが自分の部屋でないことに。柔らかな照明と、ベッドの周囲には白いカーテン。消毒液の微かな匂いが鼻をつき、保健室だろうと予測できる。

「俺は

「

「まだ動いたら……！」

控えめな制止。それより早く上体を起こしかけ、シャルロットの発したものが警告だつたと知る。胸部から腹部にかけて激痛が走つた。軽く呻き、再び横たわる。着ているのはブラックワイドウ起動時に身につける、黒いアサルトスース。ただし胸元から下腹部までジッパーが下がられ、覗くはずの肌は包帯に隠れていた。

ベッドの上で息を吐く。唐突すぎる状況の全貌を把握しようと、頭を捻つた。だが寝起きそれは信用できないどころか、役に立たない。結局、考えようとしてくれない自分の中枢を見限つて、確実性の最も高い方法を選んだ。

「どれくらい眠つた？」

「……五時間くらい」

とこつことはすでに夜中なのだ。やや躊躇いを見せつづ、シ

シャルロットは続ける。

「あの後、一夏がここまで運んだの。それでさつきまでいたんだけど、さすがに疲れてたみたいで。ボクが交代してる」

「そうか……」

沈黙。重苦しい空気が流れる。だが長くはない。

「聞いてもいい?」

「ああ」

できれば拒否したかった。続く質問は今の誠にも充分に予想できる。それがどういう結果をもたらすかも。だがそんなことはできない。いや、してはいけない。これは避けてはならない門だ。シャルロットが望むのなら、答える義務がある。一時の感情で殺意も無しに殺そうとした、己の責務だ。

「井ノ上君は、ボク達を殺す気だつたの?」

「殺す気だつた」

「どうして?」

「……八つ当たりだな、多分」

平静を装つて言つ。後悔しているように見られなければ、それでよかつた。成否に関わらず、殺人の加害者が後悔などして許されるはずがない。そうしたいのなら、最初から殺人自体を否定していればいいのだ。戦争だろうが個人的な理由だろうが、人として最も醜悪な行為に及んだ者は、そうして許しを請うことが許可されてはいけない。

「あいつを見ていると、昔の自分を思い出す。それで いや」

ふと思いついた真実のため、言葉を区切る。数秒経て考えを整理すると、再び続けた。

「八つ当たりなんかじゃない。嫉妬だ」

「嫉妬?」

「ああ。ほんの少し前まで、俺はあいつとよく似た状況に立つてた。いろいろ違うけど、それでも仲間がいるってのは同じだった」

「レインジャー連隊の……?」

「いいや、それより前だ。けどそいつらは消えちまつた。一人だけ、残つてくれている奴もいるけど。……あの頃は俺も一夏と同じだつたよ。手の届くものは何でも抱え込んで、全部まとめて助けてやろうとしてた。自分にそうするだけの力があるって信じて。でも、できなかつた。それで嫉妬だ」

続きを述べることへ、さらに数秒を要する。

「俺と一夏は別人だと、それは言われなくたつてわかつて。けれど俺の無くしたものがあいつは持つて。お前みたいな仲間だよ、デュノア。自分がどこまでも惨めな負け犬にしかみえなかつた。だから全部、ぶつ壊してやりたくなつた。考えが甘くてむかつくなつた。現実は違うとか、あんなのは全部、建前だ。本音はもつと単純に、妬ましいなんてこの上なく女々しくて惨めなものだ」

苛立ちが募つた。他人に対してではない。自己嫌悪の表れとして。

「俺も訊いていいか？」

返事は無い。構わず続ける。

「どうして助けた？」

「……助けたのは一夏で」

「それはあいつの事情だろう。奴の考えなら、本人に訊く。今、ここにいるのはお前だ。どうしているのか、訳が知りたい」

僅かな躊躇い。シャルロットからそれが感じられた。しかし彼女は言う。

「一夏に頼まれたから。……それだけ」

彼女は言う。数時間前まで見せた姿は、どこにもなかつた。これでいい、と誠は思う。命令に背くことになるが、どうにでもなるだろ。自分は遠ざけられなければならない存在だ。

「俺が憎いか？」

「憎まないわけがない。君は……あなたはボクをお人好しだつて言ったけれど、それにも限度があるよ」

シャルロットはわざわざ呼称を改めた。秘められたのは明らかに拒絕。殺されかけたことと、一夏を殺しかけたことを咎める無言の

主張だ。ならば、と誠はある種に期待を抱いた。

「俺を殺したいか？」

伏せられていた視線が誠に向けられる。その両眼は一つの困惑を宿していた。発言の真意を探ろうとするものと、眼前でちらつかされた誘惑に首肯しそうになるもの。誘惑とはむろんのこと、憎んでいる対象の死だ。自ら手を下すことで憎悪を抱かせる人間を葬れる。シャルロットの瞳は、若干であるにしろ確かにその色があった。井ノ上誠の死を望む、期待が。

しかし、

「殺さないよ」

それまでと同じく、極めて静かな声音で返事はやってくる。一瞬、その言葉の意味を誠は理解できなかつた。感情を隠すことができず、彼は驚愕を裸身のまま晒すこととなる。そのままシャルロットを見た。見下ろす瞳は変わらず、誠の行為を咎めている。憎悪が消えたわけでもない。

なのに先ほどとは異なつた。憎悪よりもさらに深く、確固たるものとして輝いている意思がある。その目を収めた口が、言の葉を紡ぐ。

「ボクは殺さない。あなたと同じ人間にはならない」

「同じ人間には……？」

動搖のままに繰り返す。

「あなたは人殺しだよ。罪に問われていないだけの」

違う。

心の奥底、もう一人の自分が呴く。

「兵士はそういうものだ。殺人が殺人にならない人間だ。ＩＳを持った時点で、お前も同類だぞ」

「同じじゃない。戦争なら仕方がないかもしね。けれどあなたは、平和な時に殺そうとした」

違う。

呴きは訴えとなつた。井ノ上誠がこれまでの人生で経験した結論

を、声無き声で叫んでいる。

「あなたはきっと、自分を正義の味方だなんて勘違いはしてないと
思う。むしろ悪人だつて考へてる。だから、ボクに自分を殺させよ
うとした。死刑なんかで罪から逃げるために」

違う。

声は再び変貌し絶叫となる。

なぜわからない。

誠は言う。シャルロットの瞳をただ見つめて、声にできないそれを叫んだ。戦争なら仕方が無いなど、言い訳にすぎないのだと。正義は力の無い弱者の訴えであり、力を有した瞬間からそれは悪になるのだと。殺人は等しく殺人であり、力を持った正義は相対して悪でしかない。それを叫ぶ。ただ無言のままに。

「……話は終わりか？」

少女の首肯。

「なら、出て行け」

無言のまま、彼女は立つ。ドアが開く音と、閉じる音。人の気配が消える。

一人となつた誠は、今しがたまで居た少女の胸中を探ろうとした。彼女はまだ、正義を信じている。一夏や、ほかの生徒たちも同じだろう。彼等は何も知らず、また気づいてもいないので。力があるものは悪に等しい。そしてこの世界で最も力のあるIJSは、巨悪の根源とも称せるのだと。

通りすがりの生徒や同僚たちから手掛けりを得て、靴音をやや早足にして進む。目当ての人物を見つけたのは、昇降口のすぐ手前のことだつた。一目でわかる軍服は、今朝早くに見かけた生徒の一人、井ノ上誠が着ていたような戦闘用ではない。実用性より礼儀を優先した正装。アメリカ陸軍で佐官クラスの将校が使うものだ。

「ノーマッド中佐」

第一声。それまでゆつたりと歩いていた男は、わざとらしく立ち止まる。それから焦らすような間をとつて振り返つた。肩へ縫いつけられた部隊章が目に止まる。牙をむき出した獵犬と、その下部にある“A : W I A”的文字。

「織斑先生。何かご用で？」

カイル・ノーマッド米陸軍中佐の第一声は、それだつた。社交的に見える微笑を浮かべて、それは表面上でなく実際に笑つてゐる。千冬はこの男が嫌いだつた。態度が、ではなく存在そのものが受け入れられない。世の中にはそういう人間がいる。何度も言葉をかわし、絶対に分かり合えないと悟るのは珍しくもなかつた。

しかし今回はまったく別で、一目見た瞬間から生理的嫌悪を感じている。受け入れられない。いや、受け入れてしまえば、その時から自分だけでなく周囲の人間も破滅させられる。好き嫌いの上限を超えた危機感を抱いていた。

「用事というには些か異なります。もつおかえりですか？」

「ええ。役目は終わつたので」

「一目、会つていかなければよろしいと思ひますが。目を覚ましたとの連絡がありました」

「会つて話し、説き伏せると仰る？」

「どこか挑発的な口調。こちらが試されているような物言いだつた。「それもあります。失礼ながら、この件はあなた方の過信も一因と考へてゐるので」

「否定はできません。しかし、井ノ上少尉はそれほど馬鹿ではないし、私も時間が無限にあるわけではないのです。今日のところは、これで引き取らせていただくとしますよ。それに話しならばもうしましたから」

ぴくり、と千冬の片眉が吊り上がる。この男、ノーマッド中佐を呼んだのは千冬だ。意識を失つた誠のために。合衆国からそういう約束を取り付けられていたのだ。実際、カイルの処置によつて誠の容態はずいぶんと回復したように見えた。彼の持つてきた何らかの

薬品を点滴されたのは十数分前。六時間ほど意識がなかつた青年は、もつと覚めている。

だが、カイルの行なつたのはそれだけだ。なのに話しおした、と彼は言う。言葉通りの意味に受け取るのなら、いつたいどうやって、いつ眠つてゐる人間と話したというのか。

「以上ですか？」

カイルは言う。嘲りに思えて仕方がない微笑を浮かべたまま。「いえ、質問があります。構いませんか？」

「答えられる範囲でなら」

そう言つて男は頷く。

「井ノ上誠とは、何者です？」

当初より胸のうちに秘めていた疑問を投げかける。その裏で、千冬は自分がカードを切つたと感じた。彼女は最初の攻撃を仕掛けたのだ。小規模の攻撃で相手の出方を窺う。それこそ威力偵察のように。

「私の部下ですよ」

「はぐらかさないでいただきたい、中佐。井ノ上に家族はない。それならば、上官のあなたが身元を引き受けるのが普通ではありますか？」

「他に希望するものがいれば、そうはならないでしょ？」

「そこが疑問です」

答えながら、魚が釣れたと確信する。

「彼の身元引き受け人に、出てくるはずのない名前が出てきている。トーマス・F・ギブソン中将。所属はアメリカ空軍。なぜ陸軍所属である井ノ上の身柄を空軍が、それも将軍によつて保護されているのか？」

「それは機密に含まれるので、私の口からは説明できませんね。ただ、今回はご迷惑をかけた。一つお教えしましょう。中将はかつて、少尉の父と友人だった。それだけのことです」

「納得はしかねます」

初めて、カイルの微笑が消える。怪訝そうな目付きをした男に、
言った。

「それだけの理由で、あなたがＩＳ使える男を手放すとは思えない。いやそもそも、あなたがなぜＩＳに関わっているのか。カイル・ノーマンド……大尉」

「どういう意味か、わかりませんね」

わざとらしい嘆息を交え、カイルはいう。

「わからないはずはない。反ＩＳ派の人間として、あなたは有名だ。直接の暴動やテロには関わらなかつたものの、その主張は多くの人間にＩＳへの反感を植えつけた」

「過去の所業に関してはノーコメントとさせていただきますよ。その質問にもね」

とぼけたように肩をすくめる。ＩＳで追求しないほうが良い。あくまでこれはきつかけにすぎない。重要なのはこの次だ。

「わかりました。では最後にもう一つ」

「いいですとも、急ぎませんから」

皮肉げな返答。千冬は述べた。

「織斑一夏との模擬戦で、私と同行した教諭はブラックワイドウに對して強制停止信号を送りました。しかし、それは通用しなかつた」通常、強制停止信号はアクセスした瞬間に作用し、すぐさまシステムを凍結させる。これが可能となるのは学園に登録されたＩＳに限られるが、世代や機種に隔たりなく作用した。根底にあるＩＳのコアがほぼ同一だからだ。

「ありえないことです。さらに井ノ上は、戦闘中にも関わらず合衆国のネットワークに侵入し、自機の登録情報を一時的に隔離、結果としてこここのシステムにも未登録機として誤認させた」

ふむ、とカイルは吐息を漏らす。

「あなたはそれを恐れていらつしやる？」

「ええ。そうです、中佐。ブラックワイドウは信号を受信した。しかし、通じなかつた。拒否されたのではないのです。コアに行くは

ずの信号はそのまま行き止まりにぶつかつた。まるで、ブラックウイドウには「アそのものが無い、ISと似て非なるまったく別の兵器であるかのように。答えていただきたい。あなた方はいつたい何を造ったのです」

かつて、千冬はこれとよく似た危機感を一度だけ抱いた。今では当たり前に開発・研究され、要員となる子供たちが教育されている、ISという兵器が誕生した瞬間だ。得体の知れない未知の存在を、昔の自分は恐れていた。それを思い出す。言い知れぬ不安を押し殺せたのは、ひとえに篠ノ之束を信頼していたからだろう。それが正しかつたのか、まだ答えは出でていない。こういう問題には、せめてその答えに自分なりの納得をしてから対面したかった。

もちろんそんなことを知るわけがないカイルは、伸ばしてもいない額髪を撫でて千冬を眺めた。同じ通路の数メートルだけあるはずの距離が、ひどく遠く思える。というより、錯覚を感じた。まるで見下され、吟味されているような。

「織斑先生、あなたには恩がある。いろいろな恩がね。私個人としてはその回答を詳細に至るまでお話したいところだ。しかし残念ながら、これも機密に関わる。あなたと言えど、教えるわけにはいかない」

ほんの僅かな違和感。それこそ瞬きの間だけ垣間見えた。あるいは思い込みかもしれない。カイルから向けられた、言いようのない憎悪。この男は自分を憎んでいる。

「ただし

と、男は続ける。

「やはり黙っているのは心苦しい。ひとつだけ、ヒントを。篠ノ之束は天才だ。それこそ優秀な科学者百人、いや千人に匹敵する。たった一人で。では織斑先生、優秀な科学者を千人ほど集めれば、そのたった一人に匹敵すると思いませんか？」

カイルは笑う。底知れぬ悪意を秘めて。

「どういう意味です」

そう返答したとき、カイルは踵を返している。

「ノーマッド中佐！」

喉より出た抗議はいつしか怒声に変わっていた。それを背に浴びた男は、笑いながら振り向いて答える。

「物事には順序がある。あなたはまだ知るべきじゃない。出来ることなら、そのまま無知でいることをお勧めしますよ、織斑千冬さん。知らぬが仮と、この国では言つのでしょ?」

彼女は着陸地点を目視で確認し、自機が受信した着陸のルート誘導に従つて機動を変更した。高度は二〇〇フィート。兵装は全てセイフティがかけられ、マスター・アーム・スイッチもオフ。マニュアル通りの安全手順を踏まえ、確認してから管制塔へ無線チャンネルを開く。

「スカーフェイス1よりCP、作戦予定に従つて着陸に入ります。
認証はTH、タシゴ・ホテル グリニッジで一四〇〇時」

返答まで約三秒がある。暗号化無線特有のノイズが混じつた音声は、明瞭な響きで言った。

『スカーフェイス1、確認した。グリニッジ、一四〇〇時。着陸を許可する。おかげり、キャブテン 大尉』

その呼ばれ方を心地よく感じる。この管制官は好きだった。名前は知らないが直接会つたこともあり、人柄が良い。特に声を聞くと落ち着く。

彼女は手慣れた動作で着陸地点に接近。砂漠の真ん中にぽつりと出現した空軍基地は、慌ただしく動いている。受信状態の無線から、管制塔と誘導班とのやり取りが聞き取れた。

『大尉が帰つたぞ。ラプターが着陸する』

『東から別の機体が接近。少佐だ。タイフーンを確認』

それを聞いて、東方へと視線を動かす。複合カメラを望遠モードに切り替えると、そこに自機と同じ人型を成したシルエットを認める。口元が緩んだ。家に帰つたとわかっていても、やはり戦場へ身を置く以上は不安が付きまとつ。友人を見つけたというのは、それだけで安心できた。

『高度五〇、着陸』

三秒後、両足がコンクリートを踏んだ。もつとも、自分の足ではない。それに連動して動く機械の足。ラプターと呼ばれた機体が持

つ体だ。彼女はそのままシステムを待機状態とし、アイドリングを保持したまま除装。そして人型兵器は消失し、彼女がぶら下げたペンドントとなつた。

砂埃が舞う滑走路に立ち、髪を搔き揚げた。肩ほどまで伸びた短髪は、亞麻色をしている。身に纏つたアサルトスーツは首から下をすべて被つており、少女に似つかわしくない戦場の雰囲気を醸し出していた。疲労を小さな吐息をして表した彼女は、肩を軽く回す。その時、右腰の物体に手が当たつた。ホルスターへと収まつた九ミリ口径のベレッタだ。

「お疲れ様です、大尉」

不意にそんな声がかかる。年齢的にも成人に近い彼女とは違い、大人にならうと心がけているような少女の声だ。意図しているのか、無機質っぽさを出そうとする淡々とした口調は、背伸びをする子供のように思える。

少女はすぐ後ろに立つていた。ブロンドの短い髪は後頭部でボニーテールを成している。ACU迷彩の上下を着て、足は華奢で小柄な体に不相応なコンバットブーツを履いていた。両手で持つているペットボトルは、労いの品だらうか。

「ラプターのほうは」

「シャノン！ 会いたかったよ、ホントに会いたかった！」

言葉を区切らせて彼女が行なつたのは、有無を言わせず炸裂する抱擁。華奢な体が、それより少し背の高いだけの彼女に抱きかかえられる。ペットボトルが地面に落ちた。

「あー、やっぱ抱き心地最高。抱き枕になればいいのに。ねえ、シヤノン、抱き枕とか出ないの？」

「その予定はありません、大尉。それより暑苦しいです」

「大尉じゃないよ。ちゃんと名前で湊つて呼びなさい」

「わかりました。湊、暑苦しいからさつさと離れて」

僅かにも変わらないシャノンに対し、抱きしめているほうは妙にテンションが高い。正村湊まさむらみなとは先ほどまであった軍人の顔をどこか

へ消し、歳相応と取つていいであるう少女になつていた。ブロンズの髪を撫でながら、湊は言つ。

「抱きしめるのは最後にするつて言つたよね」

「いえ、記憶に無いけれど」

「あれは嘘よ」

「嘘も何も聞いていないわ」

「だつたら抱きしめればいいじゃない！」

「知らないけど。というか本当に暑い。特にあなたの胸が。邪魔でしうがない。嫌悪を抱いてくる」

「いいじゃない。大きくなくても魅力だとと思うけど。ステータスとか言つじやない」

力チリ、と小さな金属音。重機やヘリのエンジン音が満ちている中で、どういうわけかそれはよく聞こえた。撃鉄を起こしたシャノンのベレッタが、銃口を腹部に当たられている感触と共に。抱きしめた状態のまま、湊は固まる。表情はかるうじて笑顔を保つていてが、青ざめていた。

「あの、シャノン……？ 今ちょっとよろしくない音が聞こえて、

弾丸とか出そうなものが脇腹に当たつてる気がするんだけど」

「安心して。九ミリのパラベラム弾でも零距離ならアサルトスースを貫通するはずだから」

「すみませんでした！」

飛び退く。一瞬、シャノンが顔をしかめるのを目撃した気がする。

「シャノン、どうして残念そうな顔したの？ すじく失敗したって顔したよね？」

「私、胸がある女つて死ぬべきだと思つの」

「いろんな人が巻き添えになる願望だね！ この基地だけでも四分の一はやられるよ！」

「正確には三十三人。ここ女性は総数で三十四名だから。全体数で言えば確かに四分の一」

「シャノンしか助からない！ 気にしすぎだよ、もつと自信持つて

！」

「富がある人はみんなそう言つ」
か細いが健康的なシャノンの手が、ベレッタをスライドさせる。薬室にすでに一発、装填されていたらしい。パラベラム弾が排出されると、即座に一発目が送り込まれた。一見すると無意味な行為のようだが、脅しとしてはかなりの威力を引き出す。それも無表情かつ無言の怒氣をたぎらせていれば絶大だった。

「冗談、だよね……？」

「当たり前よ。だからもう一度、抱きしめてもいいわ。最期の思い出には充分でしょ」

「冗談じゃなかつた！」

嗚咽めいて喉を鳴らし、後ずさる。と、その背が何かに当たった。何をしている、お前たち

上から降つてくる声。湊より頭一つと半分は背の高い、男の声だ。

「ここは遊び場では」

「少佐、セクハラはやめてください！」

逆方向へ飛び退く湊。それこそ脱兎の如く、男から離れる。

「……いつ俺がセクハラをした」

唸り声を混じさせて男は言つ。湊と同様のアサルトスースに、栗色をしたクルーカットの髪。スース越しにもやや細身に見える体つきは、長い足と相まって実際以上の長身に思わせた。

「女の子に無断で触るなんて、それだけでセクハラです」

「貴様がぶつかってきたんだろう、大尉。　コンウェー中尉

湊の肩越しに、シャノンが呼ばれる。

「貴様も一部始終を見ていただろ」

「はい、ウインターズ少佐」

期待通りの返事らしい。デヴィッド・ウインターズは精悍な仏頂面で、ふむ、と頷く。

「では言いがかりなのもわかるな？」

「いえ、わかりません」

「何だと？」

鳩が豆鉄砲を食らつた、といつ表現が的確だひつ。自信たつぱりの顔は、一転して驚愕になる。

シャノンは述べた。

「普通の方なら今の出来事は事故となるでしょう。しかしどうかつた相手が少佐ですか。一般論で語るには問題が多く、また日頃の行動から考えても、意図して正村大尉と接触するよう仕組んだ行動、つまり常人にはまず理解できないほど高度に計画されたセクハラと断定します」

「貴様は俺に恨みでもあるのか？ なぜ貴様等は俺を変態と思うる。大体、どうしてそこまで回り道をしなければならんのだ」

「あれですよね、少佐」

湊が口を出す。

「ぶつかるか、ぶつからないか。成否の間に胸の奥から湧き上がってくるドキドキ感を味わいたいんですね。わかります。わたしもコンウエー中尉を抱きしめる時は、正面からか背後からか、それとも側面から攻めるかとか、いろんなドキドキ感を味わうので。日本流に言うとワクワクが止まらねえ、とか、ワクテカが止まらねえつてもので、あれは素晴らしい感覚であり、わたしとしても長らく虜に」

「貴様は黙つていろ、大尉」

一蹴される。こうなつては黙つていじけたふりをするしかなかつた。しゃがみこみ、しくしくという効果音を自分で口にしながら嘘泣きに入る。

「それで、へんた……ワインターズ少佐、どういうご要件ですか？」

「前半は聞き流すぞ。用があつたのはその大尉だ」

「やはりセクハラを」

「違う」

心無しか強い語氣で否定。

「俺も大尉も、たつたいま帰投したところだ。デブリー・フィングに

出席しなければならない。が、貴様等は抱きついたり何だりで向かう気配が無い。だから呼びに来た

「そういうことでしたか。わかりましたか？」正村大尉

「はい……」

子供を諭す教師のような口調で言われる。立つ瀬がない。一歳と言えど年下にそういうことを言われるとは、情けなくなつた。最も、湊以外の一人は完全に無視して話しを続いているが。

「それともう一つある

「何です？」

「コンウェー大佐から招集がかかつた。俺と大尉、それに貴様も

「父が？」

怪訝そうな、しかしどこか嬉しそうなシャノン。

「つてことは作戦ですか？」

ようやく復活を果たし、湊。

「詳細は知らん。が、中尉が呼ばれるのならば偵察行動の類いだろう。俺達は護衛か、奇襲か」

「でも奇襲ならわたしのフォックスチームだけで事足りますよ。と
いうか、少佐のジャッカルチームは……」

「役たたず、とでも言いたいのか？」

「いえ、部隊はすごいですよ。でも、その、少佐のタイフーンって、
こここの機体で一機だけステルス機能がありませんし

「指揮官だけいらない人つてことですよね」

「シャノン！ はつきり言っちゃダメ！」

警告は遅すぎた。視線を戻すと、デヴィッドは変わらずに立つて
いる。からうじて。若干、涙を浮かべたブルーの両眼が切ない。

「先に、行くぞ。……遅れるなよ

デヴィッドは踵を返す。去つてゆくその背中は、いつもは無い哀愁が漂つていた。声などかけられない。

「あのね、シャノン」

小首を傾げ、友人はこちらを向く。

「言葉のオブラーートって大事だよ？」

「でも大尉のほうもかなりダメージを負わせたと思いますよ」

「うん。 そうだね。 これからはもう少し敬おつか」

一人揃つて少佐を見送る。 彼は兵舎に向かって歩いていた。 泥酔より悲惨なおぼつかない足取りで。 と、右から一人の男性整備員が近づいた。 クリップボードに視線を落としていて、少佐に気づいていない。 ぶつかるかと思った瞬間、しかし少佐は流動的な足さばきで回避する。

だがそれで終わらなかつた。 数秒後、 今度は左から女性整備員が接近。 これもクリップボードを見ている。 先ほどと同じように避けると思われたデヴィッドは、 しかし派手にぶつかって互いに倒れた。 短く聞こえる、 女性の悲鳴。

「……」

湊は無言でその様子を眺めた。 隣でシャノンの嘆息が聞こえる。

それがデヴィッド・ワインターズの持つ最大の欠点だつた。 元はイギリス軍山岳歩兵で、 陸軍特殊部隊SASにまで入隊していたという経歴の持ち主。 最優秀を体現したような兵士であり、 最も難しい勲章とされるヴィクトリア十字章を一度も受けている。 実力はこの基地で間違いなくトップ。 場合によつては、 一個小隊分の戦力を一人で担うほどだ。

だがそれは作戦中のデヴィッドである。 平時の彼は、 どういうわけか女性とよくぶつかる。 意図していないのがさらに悪い。 原因も不明。 強いて言うならそういう星の下に生まれたとしか言い様のない現象だ。 これが事あるごとにセクハラと呼ばれる所以。

「本当に敬える?」

「無理かも」

シャノンの問い掛けに短く答える。 視線の先では、 デヴィッドが巻き込んだ整備員に手を貸していくところだった。

湊たちに招集がかけられた場合、使うのは決まって第一作戦室だつた。主に上級将校による作戦立案に使用される部屋だが、それほど立派なものではない。中にあるのはホワイトボードが一つだけで、間取りも入れて十人程度。空調設備も無い。下士官や兵を招集せず、指揮官のみである理由もこれだ。

最も、そうそう贅沢は言えない。これはあくまで奪つた基地である。三年前に亡国となつたカタールの半島北東部に位置するこの施設だが、元々は同国空軍の海上警戒基地として使用されていた。それが敵国の侵略を許してしまつたため、ガス田と共に制圧下に置かれる。その戦闘で勝利した敵も大規模な損害を被り、この基地には小規模の駐留部隊のみとなつた。そこを襲撃し、情報操作によつて各国軍事ネットワークからこの基地の情報を抹消、機材や人員を持ち込んで現在に至る。

「全員揃つたな」

湊とシャノンが入室するなりそう告げたのは、大柄な男だつた。白人であるが、日焼けのため肌は浅黒い。服はシャノンと同じACU迷彩の上下。ただし数倍は大きかつた。すでにいたデヴィッドは細身の筋肉質だが、こちらは全体的に分厚く頑強。アサルトスースや防弾装備が無くとも、拳銃弾なら傷も付きそうにない体躯をしている。

大男はシャノンを一瞥する。同じタイミングで、彼女のほうもそうした。ほんの一瞬、二人は頷き合う。シャノンのほうはやや嬉しげに。これが彼等の絆を表していた。大男の名はドウェイン・コンウェー。この基地における実質的な指揮官であり、またシャノンの義父である。

「ただでさえ暑い場所だ。手短に進めよ」

言つてホワイトボードを指さす。そこに貼られていたのは四枚の

資料。三枚は地図、四枚目はISと思しき写真だつた。

「昨日の一九〇〇時、情報本部より伝達があつた。この報告が遅れたのは、情報の信頼性が不十分だつたためだ。現在

」

「写真を示し、

「アメリカとイスラエルでISの共同開発が行われている。開発コードはXBG-101、シルバリオ・ゴスペル。情報では広域戦闘を主眼とした射撃機体とされ、軍用としては第三世代の中でも最高クラスの完成度と思われる。だが、この機体の開発情報はかねてより報告があつた。君らも承知のことだろう」

三人が無言で首肯する。

「問題は、これが次の段階へ進んでしまったことだ。報告によればすでに機体は完成しており、試験運用を開始する。場所はハワイ沖、日時ははつきりとしてない」

「では任務は、シルバリオ・ゴスペルの破壊ですか？」
デヴィッドが言う。静かに、大佐は頭を振った。

「違う。それ以上に重要なことだ。判明した情報によれば、この機体は無人状態で試験が行われる。それが問題だ。少し前、IS学園へ襲撃を行なつた無人機を覚えているだろう？」

IS学園。その単語が、湊には引っかかる。情報本部からの報告に、確かあの学園の記述があつた。内容は 。

「あの時、我々の情報本部は無人機の発した暗号化信号を傍受、解析していた。結果、わかつたのはその信号パターンが、記録に残っているかの白騎士の波長パターンと酷似しているということだ」

白騎士。世界で最初に誕生したISの通称。全ての始まりとなつた災厄だ。少なくとも、この場にいる四人は四人ともそう認識している。

「そして一日前から、NSA内部の要員が米軍ハワイ基地へそれと同じ信号が送られているのを確認している。すでに理解できただろう。試験運用される無人機、本格的ではないが明らかにハッキング、その場所、タイミング」

「……篠ノ之束が動く」

想いは咳きとなつて湊の口から出る。恐ろしく静かな声で、秘められた殺意を隠そうともせずに。

「そうだ、湊」

ドウェインは頷いた。大尉ではなく、湊と呼んで。

「可能性は多いにある。奴が直接あの場に出現するとすれば、我々にとつてまたとない機会だ。そうでなくとも、試験機を鹵獲し逆探知が可能かもしれない」

そして彼は一度、深呼吸を行なう。それから続けた。

「作戦名リベンジ・ルーズ。目的は篠ノ之束の殺害ないし捕獲、またシルバリオ・ゴスペルの鹵獲を最前提とする。コールサインは前者をデッド1、後者をデッド2とする。投入部隊は君たちの三個編隊だ。デヴィッド」「ヤー」

少佐は英國軍の応答をする。

「君のジャッカル^{ストードロン}中隊には米軍戦力の攦乱を任せる。作戦開始から五分後、ハワイ基地から離陸したスクランブル部隊と洋上で交戦、時間を稼いでもらいたい」

「交戦規定は?」

「君の判断に委ねる。撃墜、殺害もいとわない。ただし

「民間人への被害は出しません。そのために出撃まで待つのでしょう?」

一瞬、ドウェインは笑う。

「そうだ。それでいい、デヴィッド。湊」

「はー」

返事は奇妙な声になつた。冷たい聲音。なのにどこか期待が混じつている。そんな声だ。

「君はフォックス中隊からライトニング? 一個小隊を選抜し、試験実施空域の高高度でステルス状態を保つて警戒。開始命令と同時に急降下攻撃を仕掛け、デッド1殺害ないし2鹵獲を頼む。目標と地点は追つて知らせる。また成否に問わらず、撤収時にはシャノンの後援として行動するように」

「了解

軽く握っていた右の拳に、力が込められた。アサルトスースに包まれた手は、ぎしりと鈍い音を立てる。

「シャノン」

「はい、父さん」

少女はやはり、どこか喜びを示して応じた。

「お前は、ゴーストスパートン中隊を作戦地域周辺、半径二百キロに展開させる。各機から送られた情報を元に現地指揮所として行動、本部へ伝達。こちらの判断により目標をテツド1、2のどちらに絞るか、それとも両方を叩くかを決める。また標的の確認もお前に任せる。作戦開始後は各機のEDS（電波妨害装置）を起動し、ジャッカルおよびフォックスの電子支援に移行する。了解か？」

「了解です。絶対に、期待を裏切るよくなことはしません」

意気込み充分とばかりに、シャノンは言つ。その時、ドウェインが見せた表情を湊は偶然にも捉えた。悲哀にも似た、作戦とはまったく別の感情が揺れた一瞬。瞬きした時にはすでにそれは消えていて、錯覚かと思えるほどだつた。

「これより作戦中止が判断されるまで、該当部隊は最終防衛手段以外に一切の出撃を禁止する。また待機地点へ到着した場合、瞬発コードを待て。コードはアルテミスだ」

ドウェインは三人の顔を見回す。ここ数年間、常に行動を共にした仲間を。

「以上だ。各チームのコールサインは追つて知らせる」

ふと湊は、どうしてどうと疑問を抱いた。もう一人、本来ならここにいるべき人物がいる。そのはずだ。

解散の命令が出て、デヴィッドに続き部屋を出る。シャノンを待とうかと思ったが、やめておいた。同じ基地にいるというのに、あの親子はただでさえ会うことが少ない。それなのに実の父と娘以上の絆がある。貴重な時間は尊重するべきだろつ。

絆。

胸中で、ポツリとその単語が浮かび上がる。一瞬だけ、湊は過去

に想いを馳せる。ここにいない一人の顔が浮かんで、消えた。それだけだった。通路を進む彼女の頭には、すでに作戦要員の選抜しかない。

日の昇り始めた午前五時。IS学園で起きている人間は少なくない。元々、今日は休日だ。例外として運動部や教諭、それに用事のある何人かはいるだろう。ただ、それでもやはり少數だ。そんな中で、剣道部の道場は最も喧しいとして過言でなかつた。

打ち合わされた剣の音は、いつも鳴り響く竹刀のそれではない。もつと重く、暴力的でぐもつた音色。木刀だ。硬い木製の刀が一本、攻防の末にぶつかり合う衝撃音。道場では二人の人間による手合せが行われていた。一人は女で、防具の無い袴姿にボニー・テールの黒髪をしている。名前を篠ノ之箒という、この学園の女生徒だつた。彼女は上段より襲つてきた一太刀を受け流し、間合いを取つて相手を見据える。呼吸はすでに上がつていて、額から頬を伝う汗が疲労のほどを伝えた。

もう一人は男だつた。この学園にたつた二人だけいる男子生徒の片方。箒と同様の出で立ちに、木刀を上段に構えている。顔立ちは日本人のそれだ。クルーカットをした髪の毛も、やはり黒。しかし瞳の色だけが異なつていて、それは鮮やかな青色をしている。名前は井ノ上誠。アメリカからこの学園へとやつてきた世界で一人目のイレギュラーであり、現役の軍人。

それなりに剣の道を歩んだ者が居たのなら、この観客のいない手合せをすでに決着のついたものと判断しだろう。先述の通り、箒は疲労の色が濃く滲み出ている。ついで焦りもあつた。原因は他ならぬ誠だ。素人目にも疲れがわかる箒に対し、彼は身体機能として汗こそ流しているが顔色に変化がない。それが箒に焦燥を駆り立てた。初めてからすでに十数分が経つていて、普通ならばありえないほどの長時間を、この二人は戦つていた。だというのに、誠には疲れが見えない。それどころか、今まで箒の繰り出した技は全て受け流されている。アメリカ国籍を持つ半端な剣術家であるはずの彼

に勝てないという事実が、彼女を焦らせる。慢心は無かつた。油断も同様。それなのに、どうやっても太刀筋は阻まれる。

これ以上は……。

眼前の同級生を見据え、籌は思つ。長期戦は圧倒的に不利だ。彼女とて毎日のトレーニングは欠かしていない。体力には平均的な同年代の男より遙かに優れていたし、その自覚と自信もあつた。見誤つたのは、誠をそういう普通の男と判断した点だろう。現役の軍人、それも準特殊部隊であるレインジャー出身。体力、精神力、さらには筋力と、身体機能のあらゆる面で劣つてゐる。

仕掛けるか？

自問する。手のひらに浮き出た汗のせいで、柄が握りにくい。体力が劣つた時点で、短期決戦に持ち込むしかないというのはわかつていた。それは今になつて悟つたことでもない。問題は、技術面でも誠が籌を上回つてゐる点だ。

むろん筹とて、そういう可能性を考えなかつたわけではなかつた。友人であり幼馴染である織斑一夏と誠の模擬戦を見たのは、つい昨日のことだ。白いI.Sと、全身装甲の黒いI.S。後者は誠の機体であり、名称はブラックウイドウ。それが終盤、太刀を持ち出したことを鮮明に覚えている。近接戦闘に特化した一夏と、ブラックウイドウは五角以上に渡り合つた。尋常な実力ではない。

しかしどこかで、筹はこう考えてもいた。あれはブラックウイドウの機体性能に助けられたもので、本来ある誠自身の実力ではない、と。一見すると油断に思える結論だが、実のところで極めて現実的な考え方もある。ブラックウイドウの主兵装は銃器とミサイル。つまりは現代兵器であり、また近接戦闘用として銃剣がアサルトカービンに搭載されている。なので通常、何も知らない者が見ればブラックウイドウの腰にある日本刀は、単なる飾りとは思わないでも試験的な兵器であり、実戦運用はしないだろうと思うのは当然だ。銃を使う軍人が日本の剣術を習得していると考へるよりは、よほど現実的だらう。

ならば、と篠ノ之箒は考える。現実的な結論が一蹴された今、これは非現実の実現した世界ということか。それこそ、夢とそれほどに大差もないほど、ふざけた空想が具現化している。そういう世界なのだろうか。

何を馬鹿な！

下唇を強く噛む。歯が皮膚をちぎって、口内に独特の鉄臭い味が溢れる。鼻腔をつく己の血臭。そして鈍く伝わる痛み。それが箒に意思を取り戻した。流れる血を飲み込む。喉を掠れさせる液体が胃へ下るたび、ぼやけていた戦意がはつきりと姿を映し出してゆく。

これは最早、手合わせでは無い。真剣を用いた果し合いと変わらない。自分は勝たなくてはならないのだと、箒は言い聞かせる。

誠に動きがあつた。上段の木刀が滑らかに動き、たどり着いたのは下段の構え。向かってくる。顔に出さず、しかし確信めいた直感を箒は自覚した。一夏との模擬戦で、誠が最も使用したのが下段からの技。その構え自体得意としているのだろう。あるいは仕留めにかかるという覚悟の表明。

木刀を引く。正眼から、右脇に掲げる八相へ。自ら攻める構えではない。剣の構えというものには、それぞれに意味がある。それまでの正眼は流派によつて意味、字も異なるのだが、それでもおよそ全ての基本形となる。中心に刀身を置くので、どの角度から放たれる斬撃にも実質として対応可能。また攻めには速度を重視し喉もしくは肺を狙つた突き技が有効だ。遣い手によるが、無駄な動作もなく鋭く繰り出される突きは、どの局面にあっても必殺の決め手になりえる。

対して八相は防御に重きを置き、そこからの返し技を行なう。つまり相手の出方によりその意味を自在に変化させる剣だ。また切腹の介錯にもこの構えを用いるため、遣い手によつては稀に最後の一手として用いることもある。箒は前者を目的にこれを構えた。正直、誠の剣を搔い潜つて一撃を決める自信はない。万が一にあるかもしない偶然の可能性にすがるほど、彼女は愚かでなかつた。賭ける

のはより確実な方法。一撃か二撃か、誠は必ず仕掛けてくる。それを凌いだ上での返し技にて倒す。

冷静に……。

己の内心へ言い聞かせる。ただひたすら感情を希薄に。波風立たぬ心というが、それを超える。海面ではなく、深海のように。ただ冷たく、暗い。そんな心へと追いやつた。考える必要は無い。体が動くままに任せ、従うだけ。それで勝てる。

刹那、誠が動いた。機敏な歩法で空いた距離を詰める。数秒の間を取つて、さらにもう一度。両者は互いの剣が持つギリギリの間合いまで接近した。どちらかが踏み込めば決着がつく。その口火を切るのは筈でない。

誠の携えた木刀は、ゆらりと動く。持ち上げられ腰より少し上へ。来る。

静かに思った。ほほ無心の体現のなか、確信は事実としてだけ認識する。直後、悪寒めいた感覚が足元から這い上がり、うなじの辺りで蠢く。攻めてくると思った木刀は、止まらずに持ち上がる。攻撃ではない。誠は構えを変えた。下段から上段へと。

下段は偽物。本命は違う。悟った瞬間、心が乱れる。硬質の冷たい氷は無音のまま亀裂が走った。急がなければならぬ。上段の斬撃が襲つてくるより前に、先手を。焦燥は体を反応させた。チャンスはここにしかない。下段に備えたというのに上段に切り替えられた今、防御は少くない隙が生じている。防ぐことはできない。ならば攻勢に。

踏み込みと同時に、八相で構えられた木刀が横薙ぎに走り一閃を曳く。間合いは充分。木刀は誠の胴を的確に捉え、勝利を手にできると思われた。それが虚しく空を切る。

筈が踏み込んだ、その刹那の事である。誠はほんの半歩ほど後退した。繰り出された彼女の木刀は、退がつた体に惜しくも届かず終える。術中へ飛び込んだのだと、そう悟つた時はすでに遅い。上段から振るわれた斬撃。咄嗟に今しがた空振りに終わった得物を引き

戻し、それを留める。が、打ちあつた瞬間にどういうわけか弾かれた。

馬鹿な。

疑問が生じる。木刀は弾かれた。それはいい。問題なのは、箒の木刀を弾いた衝撃が下方から来たこと。誠は上段から斬りかかったのに、なぜ下から。

そして勝敗は解答より先に訪れる。崩れた剣と精神。置み掛けて一撃目が降つてくる。箒の木刀を弾いた後、即座に引き戻して同じ上段から斬り込んだのだ。顔面を碎くかと思われたその剣は、しかし寸前で止まる。文字通り目と鼻の先。急停止する衝撃は風となつて箒の髪を微かに揺らした。

「……まだやるのか？」

やや躊躇いがちな声。誠だつた。眼前より木刀が退く。彼は慣れた手つきで刀身を反転させると、鞘に収めたのと同じ格好で持つ。

「箒ノ之？」

「いや……」

怪訝な顔に、その一言を返すのが精一杯だつた。呆然と自分を打ち負かした男を見る。なんの感情も映さない虚無の瞳で。ただ見ているという事実があるのみ。何も思つてはいない。それは箒の胸中と一緒だつた。負けた事実以外に、まるで理解が及ばない。敗因も、過程も。不可欠なプロセスを無視して結果だけを突きつけられた、そんな気分だつた。

誠はとつと、しばらく箒を見つめる。眺める、と表記したほうが良いかもしない。観察するような視線を送つた後、見切りを付けたように踵を返す。勝利の優越など欠片も無しに。

事の発端は何だつたのか。誠は現在もよくわかつていいない。先日の一件以降、事情を知る人物とは誰とも顔を合わせていない。一夏にしても、一日に使つるのは最低限の挨拶に必要な単語が一つか二つ。

謝罪を入れようと思つたが、向こうから拒否されている。違うのは、模擬戦に居合わせなかつた鳳だけだ。しかし彼女も微妙な空気を感じ取つたようで、やはり積極的には一組へと来なくなつた。

むろん後悔など無い。これが当然なのだから。あれ以来、IS実習にも参加していなかつた。本調子でないのもそうだが、学園側がブラックウイドウの起動を危惧しているように思える。実質、新しくできた数名の事情を知らない友人を除いて、彼は常に一人で行動していた。ドクことカイル・ノーマッドとも、模擬戦の翌日に一度、電話で話したきりだ。

今日もそのはずだつた。変わらない時間に起きて、着替え、煙草を吸う。それから銃を一丁、点検して部屋を出た。まだ多くが眠つてゐる寮を後に、敷地の外へと向かう。約三十分ほどだらうか。それだけの時間、学園を取り囲む道路を走つていると篠ノ之箒がいた。

「暇ならば付き合え」

そう言われ連れてこられたのが四時半頃。一夏が使つているとう胴着と袴を借り、それから延々と手合わせをしている。勝率は、最初こそ五角に見えた。しかし徐々に体力の差が見え始めると、その先は繰り返し。呼吸を崩した箒にたたみかけ、討ち取る。手加減をするなど釘を刺されたため、それを体現した。むろん楽な相手では無い。だが箒には決定的に足りないものがあり、勝率も同じ箒所にある。いや、彼女でなくこの学園の全員に言えるだろう。命のやり取りを知つてゐるか否か。

誠の中に実戦経験が無ければ、おそらく箒の勝ち越しとはいかなまでも五角だつただろう。本物の殺人、それを加害者としても被害者としても心得てゐる場合、力の差は技量のみでまかなうことができるない。殺す剣と制する剣は、それだけ違つ。意図して後者を目指すのならともかく、そうでないなら尚更だ。

最も、勝利はしているものの誠はこの状況を理解しえずにいる。彼女がなぜ自分を選んだのか。それがわからない。わからないまま道場の縁側に座り込み、朝の涼しい風を浴びる。そうすれば眠気は

覚めるだろう。しかし晴らしたいのは思考にかかるた薄いもやで、それはどうやっても消えてはくれない。

「剣術を学んだことがあるのか?」

不意に声がかかる。肩越しに振り返ると、団つたらしく缶が投げられた。片手でそれを掴むと、内容物の液体が持つ冷たさが伝わる。ラベルは「j」がありふれた緑茶だった。道場の外に自販機があったのを思い出す。あそこで買ってきたのだろう。

「いいのか?」

「jの間はお前がくれたろう」

籌はそう言うと隣へ腰掛ける。一人分ほどのスペースを空けて。

「……何年か前に、上官から」

答えるながら緑茶を開け、一口飲む。よく冷えたやや苦い液体は、心地よく喉を落ちていった。

「アメリカはいろいろと手を出しているのだな」

「いや、アメリカ軍の奴じゃない。イギリス軍だよ」

「イギリス?」

微かに怪訝そうな顔。

「上官と言つただろう」

「少し複雑で。まあ、機会があつたら話す。ともかくイギリス軍の奴に習つたんだ。剣術自体は、あの人人が日本で覚えたものらしいけど」

「流派は?」

「聞いてない。俺はただ、言われたことをやつただけだ」

それでも勝つことは無いが、というのは飲み込んでおく。

「お前があれだけできるのだから、その師も相当に出来た方なのだろうな」

「戦闘は、確かに。ただセクハラが……」

「は?」

「いや、何でもない」

脳裏に浮かんだある男の真顔を忘れようと、やや力強く首を振

る。

「その内、説明するよ」

うやむやに述べる。それ以上の追求は無かった。あつたほうが、救われたかもしれない。この時になつて誠は考える。少なくとも会話を失わずに済み、それを取り戻そと自分から言葉を発する必要が無かつたのだから。

「悪かつたな、篠ノ之」

篠がこちらを見る。困惑、とは少し異なつた。予想していた、だが聞きたくなかったこと。そんな表情を向けてくる。彼女は答えた。「模擬戦のことは、いい。お前にも事情はあつたのだろう。最も、こう思つてる人間はあまりいないだろうがな」

「それもだが、もう一つある。その前の昼飯の時、嫌な事を言つただろ」

「嫌な？」

首をかしげられる。ややして、

「あの人を悪く言つたことか？」

「ああ。すまなかつた」

謝罪を述べながら、違和感に気付く。彼女は姉である束をことを“あの人”と呼んだ。まるで他人だ。血縁関係のある人物を指す名稱とは思えない。誰かに似ていると、誠は思つた。それが先日、たつたいま話題にしている昼食の場で自分が父親に對し使つた名詞とも氣付かずに。

「詫びることはない。私とあの人は、あまり関係の無いことだ

「どういつ……？」

それでも控えめに口にして、ようやく失態と悟る。自分と彼女は親しい間柄などでもない。それなのに、私情へ口を挟むべきではないのだ。

しかし篠の考えは違つたらしい。彼女はやはり口を噤んだが、やがて意を決したように言つた。

「井ノ上、お前に訊きたいことがある。私は……お前から見て専用

機を持つに値する人間か？」「

「何だと？」

顔を見返すと、こちらを向く真摯な瞳に射抜かれた。数秒、言葉を失う。その間に筹は続けた。

「お前はISを悪と呼ぶ。私は全面的に賛成こそしかねるが、それでもお前に正しさはあるのだと思つ。だが思つても、私は力が欲しい。……皆のよう」

彼女は俯いた。暗い陰を落とす表情から読み取れるのは、痛々しいほどの劣等感。皆のように、と最後に付け足したのだ。秘められた意思是説明されずともわかる。一夏だけでなくシャルロットにラウラ、そしてセシリ亞と鈴音。彼女の周囲にいるのは全て、専用のISを持つ候補生たち。言わば頭一つ抜きん出た集団の中で、彼女は過ごしている。そこにはどれほどの苦悩が伴つているのか。彼女だけが、専用機を持たないという事実を、果たしてこの時までどのよう受け止めたのか。

いや。

違う、と誠は思つ。彼女は確かに受け止めていた。しかしそれがどうして、この時にそんな質問をしたのか。意図が読めない。誠が一夏たちとほとんど隔絶しているからか。自身のコンプレックスを曝け出すのだから、吹聴の危険は一パーセントでも落としたいだろう。もちろん、誠にそんな意思が無かつたとしても。しかしこれもどこか外れているように思える。言葉を重ねた数は少ないが、彼女はそれほど弱い人間に見えなかつた。

それなら何故、自分に聞いたのか。考えてはみるものの、そう都合よく答案が落ちているはずがない。結局はその他の多くの疑問と共に、不明の烙印を押される。

「専用機を」

誠は言つ。自分の答えより彼女の答えを優先すべきだと考えて。

「ISを持つに相応しい人間なんて、この世のどこにもいない

「……時代に不相応だからか？」

「いや、違う」

以前に自分が言つた引用を、静かに否定する。これは、それとまた異なるものだ。

「ISだからじゃない。ISも、戦闘機や戦車、いやもつと根本的に銃や剣、ナイフだつてそうだ。あれは武器で、つまり人を殺すために作られた道具だよ。殺人に特化された道具を持っていい人間なんて、この世のどこにだつていない。別の生物ならまだしも、人が人を殺していい資格なんてないと思う」

「……なら、お前はどうして持つている」

しばし返答が遅れる。重苦しく息を吐き、まだ中身のある缶を手の中で転がした。それからようやくして、答える。

「俺は人じゃないから」

「……何を言つてる？」

「人じやないんだよ、俺は、もう。資格を無理やり奪い取つて、何人も殺したんだ。人でいて許される奴じやない」

「ならば、お前は何だ？」

「さあな。ただ、希望を言えば暴力の一文字でいい。純粹にそうあれば、どんなことだつてできる。後腐れも何もいらない」

ただ淡々と述べる。偽善だ、と思った。暴力という無差別破壊の単語に甘えて、自分を犯罪者から除外しようとしている。これは出来の悪い自虐であり、偽善。カイルを初めとして今までを知る人々は、この暴力であればいいというのを否定しないだろう。むしろそう決断したのだと受け止めるはず。

しかし本人はそう思わなかつた。こんなものは決断でも何でもない、ただの言い訳だ、と。罪人の文字が怯え、殺人に正当性を持たせるために使つていい。それは正義であり、人を救うための代償であり、殺された側の心情を見ようともしない、つまりは偽善。そうとしか考えられなかつた。

だが幕の口にした言葉は、そんな自虐の悦なびどこへ成りと飛ばすようなものだ。

「……その覚悟があれば、私は専用機を持つてもいいのか？」

意味を図りかねる。誠は簾を見た。今しがたとは全く別の意思を灯した、彼女の双眸を。どれほどの力をもってしても決して覆せそうにない光。意味するところは何なのか。

「どうしてそこまで専用機にこだわる。お前は、篠ノ之、何を焦つて」

寸前で区切る。何を焦つているのか、などこれほど馬鹿な質問もない。最初から彼女は焦燥に駆られていたのだ。周囲に集まり始めた人々の中で、自分もすぐに追いつくと言い聞かせている。だからではないか、と誠は己を叱咤した。彼女が早朝からトレーニングを日課としていることも、何度も自分へ挑んで来たことも。それらは全て、"いつか追いつく"ではなく"すぐに追いつく"という心情の表れだ。

「悪い、篠ノ之。だけど、何でそんなに専用機が欲しい？ 競争心で手にしていいものじゃないぞ」

「そんなつもりはない。私は、力が欲しい」

「どうして？」

「……お前は、認めないだろ？」

苦虫を噛み潰したように、言つ。

「俺が認めようが認めまいが、言つだけ言えよ。理由を全部知りたいとは思わない。けど、少しきらいは知らなきや何も言えない」やや突き放すような口調。それが効いたようだ。簾はゆっくりと口を開き、そして述べた。

「一夏を守りたい」

「……それは、独占欲か？」

「違う。私は純粹に、あいつを守りたい」

「お前がやらなくて誰かがやるだろ？」守る役目は、お前が果たさなくたっていい

「わかつていい！」

押し殺した絶叫。それも悲痛だった。彼女は全て理解している。

自分が歩みでなくとも、すでに代わりはこるところへと。その上で言っていた。

「私は……このままでは、一夏はどこか手の届かない所へ行つてしまつ、そんな気がする。それが怖い」

「実力の問題だ。あいつの中でお前の存在が消えたりはしない」
言いながら、自分の発したそれに恐怖する。これは簞に向けた言葉なのか、それとも自分への戒めなのか。

「それでは駄目だ！ 私は一夏の背中を守りたい。他の誰も押しのけて。私が守りたい。私が……私がそうしたいからそうするのだ……」

留められた、それでも強大な葛藤が感じられた。先述の通り、彼女は全てを理解している。なのにその言葉を出した。そうしたいからやうする、と。理解の上で、その全てをこの一言の下に跳ね除けた。

これを聞いた誠に芽生えたのは、ただ一つの羨望。自分もこいつあれば良かつたのか、こいつあれば全ては起らることもなく済んだのではないか、と。空想とも言えるものが脳に浮かび、胃へと落ちた。そして述べた。

「俺は、もうやつを言つた結論でケリをつけたつもりだ。だからお前がこいつ側に来るのを、手招きして誘うなんてできない」

僅かに簞の顔が俯き、陰を帯びる。

「けど」

ど。その言葉が続いたときは、俯いた彼女の表情はやや驚いてい るようだった。

「お前が本当にそう思つてるなら、そつすればいいと慰ひ。止めはしない。身勝手な意見でしかないけど、お前は自分を信じたつてい」と思つよ」

ほんの少し。本当に僅かだが、簞の表情から陰りが消えた。変わつて芽を出したのはもつと明るい、希望とでも言つべきもの。

緑茶を飲む。まだ冷たい。一口ほど流し込んで、缶を脇に置いた。

その時、置いてある木刀の柄に指先が触れる。硬質の、人斬り包丁を模した武器に。いや、広義でいえばこれも人殺しの道具だ。打撲だけで人は簡単に殺せる。誠をそれを掴み、幕に言った。

「もう一度、やるか？」

「……ああ」

淡い微笑みが返る。その顔は清々しいなどお世辞にもいえない。しかし覚悟はあつた。全てを噛み潰し、踏み越え、その上で口にした目標を歩む覚悟が。

午後二時過ぎ、誠は商店街へ赴いている。さすがにこの時は戦闘服でない。カーゴパンツにシャツとジャケットを組み合わせた私服。足元もいつもの軍用ブーツでなく至つて有り触れた登山靴だった。足首はしっかりと固定されるため、バランスの不安が無い。これらのコーディネイトは誠でなくドクことカイル・ノーマッドによるものだ。ファッショントリビュートとして鈍感といかないまでも興味を示さないのが誠なのだから。実質的な保護者といえるカイルが選ばなければ、果たしてどうなつたわからない。

両端に様々な店舗が続く歩行者天国を進む。歩くたび、右ふくらはぎに硬い金属質の感触。カーゴパンツの内側、そこにホルスターと収まつたシグがある。I.S.を使役する軍属の人間。それは必ずしも安全でなくてはならない。警護が無いならば最低限の備えを、と。これは合衆国政府からの命令でもあつた。しかし実際、強制力は無い。そもそもあらゆる国家に縛られないI.S.学園なのだから、所属が軍であろうと生徒である期間、命令に従う必要はどこにも無い。なのに平和の中で銃を隠し持つ誠は、人一倍の警戒心だけで説明がつかないだろう。

すれ違う一般人の集団を抜けながら、同じ民間人の服を着た誠には自覚があつた。ここまで彼とすれ違つた人々は、誰一人として銃を持つた軍人がいるなど考えていない。そんなものはナンセンスであり脅威であり、また不必要な存在である。比喩でない本物の戦力、もとい暴力はここで必要とされていない。当然だ。であればこそ、誠が至つたのは自分が想像以上に臆病だつたという結論である。

そう思い立つたのは巨大なショッピングモールの前を通りかかつた時だつた。マーケットからゲームセンター、果ては映画館まで備えているらしい巨大なビル。正面入口には上映中らしき映画の宣伝がなされていた。誠の持つている戦闘服に似た、しかし迷彩が微妙

に異なるそれを着た兵士が一人。米軍がモデルなのだろうか。ヘルメットとゴーグルで顔は隠れていて、役者の表情を窺えない。しかし肩に見たことのない、おそらく架空と思しき部隊章が縫いつけてある。ガスマスクをかぶった骸骨と、SOCIOの文字列。題名は“*The snow laying thick is gray*”と、英文表記のまま。然るによほどマイナー作品なのか、何かの記念による先行上映だらう。その兵士はよくあるM4やカラシニコフ小銃でなく、シグのSG552ライフルを携えている。キャッチコピーもやはり英文。“*At the moment, can you pull a trigger?*（その瞬間、貴方はトリガーを引けますか？）”。

単なる文章。創作物の短文。そのはずだが、誠の心臓を跳ね上げさせ、胃を締め付けるのに充分過ぎた。

引けない。

彼は自分自身に佇む兵士の姿を投影し、そして思う。一瞬、それこそディスプレイへ走ったノイズよろしく過去の情景が蘇る。夕日の中、重い唸りを上げる輸送機へ向かっている華奢な体。不安そうに振り返ったその顔へ、元気づけるように笑いかける自分がいた。

引けない。

再び繰り返す。誠は恐れていた。あの時別れた少女が死んでいることを。そして同時に、生きていることも。相反する感情は決して相容れず、なのにどこかではまだ求めている。湊、と。これまで何度も無く呟いた名前をした少女は、ここにいない。もし現れれば、それこそトリガーを引かなければならぬ。これが理由だ。平時でありながら武器を持ち歩く、言い訳。

自身の安全管理という命令を建前にした、現実からの逃避。そう、これは逃避だつた。死亡を願い、生存を望み、再会を夢見る。そして万が一にでも再びまみえた時は、敵として撃たなければならない。米軍の兵士として、テロリストは射殺するのが道理だ。しかしそんな真似ができると誠は悟っている。だから銃を持っていた。いつ

でも自ら命を絶てるよう。課せられた責務から逃げられる唯一絶対の道を、肌身離さず持ち歩く。

「動くな……」

束の間、感傷に浸つていた意識を現実へ引きずり上げたのは、背後から耳元へ吹きかけられた声だった。

「じつとしている」

低い女の聲音。ハスキー・ボイスとはどこか違つた。無理して低く抑えている。背中に何かが押し当てられた。

「動くな。動けば撃つ」

「……」

無言で嘆息。台詞からして銃のつもりなのだろう。指鉄砲も、確かに字だけはそう書くから間違いとも言い切れない。脅しになるとは思えないが。呆れ顔に苦笑を交え、指摘した。

「一つ言つとな、鳳。映画やドラマじゃよく銃口を押し付けるけど、拳銃つてのは銃口を押し付けると弾が出なくなるんだぞ」

「ありや、マジで?」

間の抜けた解答。思わず笑いを堪えるのも忘れて振り返ると、今日も今日とていい笑顔をした鈴音が立っている。

「さすが軍人、物知りめ」

「いや知つておけよ、それくらい。お前、代表候補生だろう」

「知識はいらない。気合いで勝つ」

「言つて恥ずかしくないか?」

無駄に自信たっぷりで言わると、そんなツッコミも引きつった。と、

「まったくです」

同意は鈴音の背後より届く。そこへ視線を移して初めて気付いた。誠の他にもう一人、呆れるのも疲れたと言わんばかりに顔をしかめた人物がいる。いや、果たしてそんな表情をする原因は鈴音だけだろうか。

「オルコット……」

その名を呟く。先日の模擬戦に居合わせた数名の一人は、やはり
というべきか視線を逸らして俯いた。つられて誠も顔を背ける。

「……あのさあ

「二人の間にいる鈴音が、顔を寄せて訊いてきた。

「井ノ上、あんた一体なにしたわけ？」

「殺しかけた

「はあ？ 誰をよ

「オルゴシト、デュノア、ボーデヴィッヒ、織斑」

「……」

「声に出さず絶句、ではない。声すら出ない。

「これまで」

「あ？」

よつやく発せられた言葉に耳を傾ける。

「一組じゃないのを悔しがつたことは何度もあるけど、一組で良かつたと思ったのは初めてだわ。 でもまあ、いいか」

「いいのか？」

驚愕が混じる。いくら何でも軽すぎた。鈴音のほつは調子を取り戻し、おひ、と勢いよく頷く。

「それはそれ、これはこれ。結局は全員生きてるんだし、とりあえずは保留。言及なし。この話題は終わり。今はもっと重要なことがあんだから。 でしょ、セシリア？」

「え？ え、ええ。そうでしたわね」

不意に話をふられて狼狽えながらも、セシリアは頷く。首を傾げざるをえなかつた。自分たちの命やその被告より急ぐ事情とは、いつたい何なのか。

「井ノ上、ちょっと手伝いなさい。気が乗らないなら、言及しないことの交換条件とか、何でもいいから適当に理由作つて」

「いや、条件とかは構わないけどな。それで、実際のところ何だつてんだ？」

「あれよ

前方を指さす。人ごみ溢れる商店街、ただそれだけの光景だ。よくある休日の「コマ、それのどこか緊急事態なのだろう。と、そこへ紛れた一名の人物が目に止まる。普段なら、それこそ針山に一本だけある金の針を探すように注意深く観察したのならまだしも、絶対と言つていいほど見つからなかつたに違いない。発見できたのは、その一人を鈴音がまつすぐ指し示していたから。

「デュノアと織斑……？」

「そう！」

三つ編みにしたブロンドの髪と、並んで歩く黒髪。よく見れば手まで繋いでいた。傍から、といつより誰が見ても恋人同士。

「まさかお前等、あれを邪魔しろとか言うのか？」

「違います。さすがにそれはやりすぎですわ」と、セシリア。

「でも」

鈴音が続ける。

「抜け駆けは見過ごせないってわけよ。もしシャルロットがあわよくば、なんて考えてたらその時は……」

「間に飛び出すのか？」

「一夏を殺す」

ひゅん、と。背筋に駆け巡った未体験の冷たさ。これまで殺意はいくつも実感した。耐性はできているはず。なのにそれは恐怖となつて誠の胃を締め付け、喉まで悲鳴を押し上げた。理由は直後に悟る。これまで感じた殺意とは、どれも誠自身に向けられたものだ。他者への殺害意思を何の隔たりすらなく聞かされたのは、これが初めて。

「いや、な、鳳。冗談にしても……何だ。あんまり笑えないからさ」

「冗談？」

ゆつくり、鈴音がじらじらを向く。

「ひつ……！」

今度こそ悲鳴が出た。顔が引き攣り、青ざめる。鈴音の目が笑つ

ていない。まっすぐ、至近距離から向けられた双眸。どこまでも純粹で後腐れの無い、透明な一つの意思によつて彩られた色がある。

心を病んだ者の眼だつた。

「一夏はあたしのもの。あたしのものなの。あいつがそれを望まないなら、仕方がない。それなら殺すしかないじゃない。殺すしかない。殺すしかない」

「お、おい、鳳！ 落ち着け！」

「そ、そうです、冷静におなりなさい！」

誠とセシリ亞。二人がかりで鳳の両肩を掴み、揺さぶる。力無く前後へ動いた鈴音の頭は、数秒してようやく我に返つたらしく。

「ちょ、わかつたから！ 大丈夫、〔冗談だから！〕

一人を振りほどいて飛び退く。それから呼吸を整えて、彼女は言う。

「あんたたち、〔冗談くらいわかりなさいよ」

「あが〔冗談か」

「そつは聞こえませんでしたわ」

セシリ亞と共に頭を振る。やれやれ、とわざとらしく。

「さつきの遠慮は何だつたのよ、あんたたち。……まあいいや。ともかく、井ノ上！」

「ああ、手伝うよ」

「よく言った、それでこそレインジャー。情報のプロ

「いやそれ、レインジャー関係ないだろ」

「え？」

今度は純粹に疑問を浮かべて、鈴音。

「特殊部隊つてみんなCIAじゃないの？」

「アホか。俺は陸軍だ」

「だつてこの前に見た映画は、CIAの特殊部隊の人気が記憶喪失になつてたんだけど」

「ジョン・ボーンは特殊部隊じゃなくて暗殺者だからな。といふか、正式にはCIAに特殊部隊は無いから。まず軍部じゃないし

「へえ。ま、その話はまた今度よろしく

「……」

もはや何も言えない。完全に主導権を握られた。セシリ亞を見る
と、諦めが肝心です、と田で諭される。

「……わかつたよ。それで、どう追うんだ」

「よひしい。聞かせてあげよう」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、鈴音は述べる。不思議と、誠は面倒
だと思わなかつた。

雑踏の中、男は先ほど購入したサングラス越しの視界に、目標と
なる一名を捉えている。

「鳳？」

ジャケットの襟へ付けたレシーバーへ、軽く吹きかけ呼び出した。

『聞こえてる。セシリ亞、そつちは?』

『問題ありませんわ』

左耳に押し込んでいるイヤホンから、共に追跡している一人の声。
「目標はこっちの十メートル前方、話しながら歩いている。オルコ
ット、お前から見て九時方向だ。通り過ぎるのを待て」

『わかりました』

普通の歩幅を維持し、目標もといシャルロットと一緒に夏を追う。一
瞬、やけに馬鹿馬鹿しい気持ちが生まれたのは当然か。

『何やつてんだ、俺は。』

自分の行動に呆れる。尾行を開始してそろそろ十分ほど。それま
でに複数の出来事があつた。まず鈴音が言い出したのは、三人分の
無線機が必要だということ。どれだけ本気で尾行する気だと聞いた
ところ、返ってきたのはあの眼だつた。

『抜け駆けは許されないの』

殺意たっぷりの瞳でそう言われたら、どうにかするしかない。幸
い、I.S学園の周辺だというのがよかつた。学園の仕入れに使うで

あらう軍用備品の販売店を見つけ、財布にある軍部から支給されたクレジットカードで購入。それほど高価な品ではない。通信距離は一〇〇メートル前後の小型無線機だ。双方向通信のため、電話とさほど変わらない感覚で使える。セットでマイクとイヤホンも買い、それから今度はサングラスを買つてきた。

サングラスは変装云々の理由でない。もつと現実的な購入理由だ。これを掛けていれば、他者に自分の視線を悟られずにする。尾行においてそれは重要だ。目立たず、ひたすら静かに観察に徹しなければならない。目標が振り向いて視線が合つ、という事態も避けられる。

「しかしあいつら、一体何してるんだ？ わざわざからビの店にも入らないで」

『多分、水着を買いに来たのだと思うのですけれど』

セシリアが言つ。

「水着？」

『井ノ上、あんた忘れたの？』

と、今度は鈴音。

「何を？」

『明日から臨海学校でしょ』

「ああ

「そういえば、と思い出す。

「そんな話してたな、みんな。臨海学校って何するんだ？」

『遊ぶのよ』

「……学校行事だよな？」

学校 자체これが初めてのためよくわからないが、さすがに遊ぶだけというのは無いだろ？ そもそも、それではただの旅行だ。

『たまにはハメ外して遊ぼうって感じの企画よ。思い出作りとか、適当な名前はあるだろ？ けい』

「オルコット、そなのか？」

『ええ。そういうものですね』

「そういうものなのか」

鈴音だけならともかく、セシリ亞まで肯定するとなると本当なのだろう。改めて、軍とはまるで違うのだと実感する。

『ほら、井ノ上、集中しなさいよ』

「あ、ああ。悪い」

宙を漂っていた視線を一夏たちに戻す。と、動きがあった。

「何かの店に入つたぞ。ここからじやよく見えない。鳳、わかるか？」

『だめね。こっちもよく見えない』

『わたししくが行きましょうか？』

予想した進行ルート上に先回りしているセシリ亞が言つ。確かに、誠や鈴音よりも近い位置にいる。が、

「よせ。オルコット、待機しろ。日本人が多い中で、イギリス人は目立つ。戦術的な問題だ」

『……仕方ありませんね』

やや拗ねたように、しかし納得したようだ。

「悪いな。鳳、俺達で行くぞ。反対側の店の前で合流する」

『反対側？ 直接行つたほうが早くない？』

「向こうが出てきたら鉢合わせになるぞ。お互いに顔を知つてゐるんだ」

『なるほど、そういうことね。わかつたわ』

歩調を崩さず、目的地に向かつ。一夏たちはまだ出てこない。と、前方から鈴音がやつて來た。

「やっぱ水着ね」

『何だ？』

合流の第一声に首をかしげる。彼女は一夏たちの入つた店を示す。それでようやくわかった。店先に並んだ無数の水着は、男女問わず多種多様。

「行くか？」

「もちろん。あ、ちょっと待つて」

合流場所にした店を見る。喫茶店だ。

無線機に彼女は言つ。

「セシリ亞、あたし達の合流したとこ、喫茶店みたい。中に入つて、窓際から一人が出てこないか監視して。あたし達は直接追つから」

『わかりましたわ』

それから向き直り、

「井ノ上、行くわよ」

「了解」

鈴音に先導され、店の中へ。出迎えるのは店内で流しているJ-ポンプ。以外に広い。すでに別の客が何人かいるが、充分以上に余裕がある。

さて。

と、誠は軽く息を吐いた。ここからは慎重に動かなければならぬ。広いとはいえ限られた空間だ。偶然の遭遇は低くない確立で起つ。前方一八〇度を注意深く観察し、その上で動かなければ。また、あまり立ち止まっているのも危険。向こうとて行動する。

「何をお探しですか？」

不意打ちよろしく、そんな声がかかった。いつからいたのか、女性店員が営業用とは思えない自然な微笑みを浮かべてこちらを見ている。

「あー、えーと」

「新しい水着を買おうかなー、とか思つて。明日から臨海学校なん

で

慣れない対応にうろたえていると、すかさず鈴音が答えた。と、店員の顔に納得の一文字が浮かぶ。

「ああ、それではEIS学園の生徒さんですか」

「わかるんですか？」

「ええ。毎年、この時期はよくいらっしゃいます。先生方も。よかつたですね」

後半、誠が言われる。

「よかつた？」

「つかのお店、学園の方は割引してます。値段を気にせず、お好きなものをプレゼントできますよ」

「はあ……」

その後、店員に案内される形で水着選びが始まる。話の流れから察するに、ここでも自分が斬ることになるのかと思つ。いや、それ以上に、

「鳳

小声で囁つ。

「ん？」

「俺達、恋人か何かと勘違いされてないか？」

疑問をぶつけると、鈴音は気にした様子も無く答えた。

「んー、考えてみれば当然かも。普通、男と女で水着買いに来るつて言つたらそれしかないし。まあ、そういうフリしどこ

「お前がそう言つたら俺は構わないけど」

「……もつもつと嬉しそうにしたらどうつ

「嬉しいなー、光栄だなー」

脛に衝撃。痛みに耐えかね、うずくまる。

「お、お客様、どうされました？」

「気にしないでやつてください、ひょつと靴紐がほどけたみたいなんで」

「え？ いえ、でも……」

「大丈夫ですつて。でしょ、誠？」

あつかけからんと見下ろしてくる。J-POPで呼ぶところの演技まで付けて。

「……ああ」

鈍い痛みが残る右足を氣合いで堪えさせ、立ち上がる。

「こいつ……。

邪氣の無い笑顔でよくこれだけできるものだ。そう思い、危うく感心すら覚えそうになつた。そしてしばらく味わつていなかつたある言葉が蘇つた。やはり女は怖い。

昼下がりの喫茶店。窓際のテーブル席で、誠は数分前にやつて来たコーヒーを啜る。

「いつまでそうしてるんだ？」

向かいでテーブルに突つ伏した鈴音へ、訊く。その隣ではセシリアが、貴族よろしく紅茶の入ったティーカップを優雅に傾けていた。

「だつてこれだけやつて何の収穫も無しつて……」

「水着、買つてやつただろ？」「

「それはそれ、これはこれ。というか、セシリア、何あんたはそんなんに落ち着いてられるわけ？」

「起こつてしまつたことは仕方ありません。それに、わたしくはまだ巻き返せる自信がありますわ」

さらりと言つ。追跡終了からすでに一十分ほど。鈴音が、まだ未練がましく向かいの店を見る。

あの後、結局は一夏とシャルロットを見つけることはできなかつた。いや、正確にはできたのだが、事情が違う。誠と鈴音が発見したとき、件の二人は床に正座して説教を受けていた。相手は織斑千冬と山田真耶の教師コンビ。さすがに割つて入るなどできるはずもなく、また巻き込まれるのもごめんだつたため、早々に鈴音の水着を買ってセシリアと合流した次第だ。

「お前、そんなに自信がないのか？」

「んなわけないじゃん。ただ出遅れた感があるだけよ
やや強気に言つ。

「それなら」

「と、セシリア。

「いい加減、機嫌も直したほうがよろしくてよ？ まるで子供です

わ

「……わかつたわよ」

のそのそと体を起こし、テーブル脇のコールボタンを押す。彼女

だけまだ何も頼んでいない。店員が来るとアイスティーとフライドポテトを注文した。

「そういえば」

注文が終わって店員が去つてから、セシリ亞は言つた。

「ちゃんとお礼言いましたの？ 水着、買つていただいたのでしょう」

「あ、忘れてた。ありがと、井ノ上」

珍しくかしこまつて言われる。

「いや、気にするな。俺の金じゃないし」

「は？」

「え？」

二人分の疑問符。直後、全てを悟つたように鈴音。

「あんたまさか、その財布つて盗品？」

「違う。政府からクレジットカードを渡されてんだよ。買い物は全

部、向こうの経費から引かれる。だから俺には関係無い」

「つまり市民の税金を好き勝手に自分の私利私欲で行使してる、か」「間違つちゃいけないけど、もうちょっと別の言い方をしてくれ。どう

この政治家だよ」

実際、このカードを使う機会は滅多にない。学食は自分の貯金でどうにでもなる値段だし、それ以外は自販機くらいしか利用しないのだ。学園への編入前に渡され、使つたのも今日が初めてとなる。

「初めてのカード払いが女物の水着と無線機とサングラスつて、聞きようによつてはかなり変態みたいよね」

「買わせたのは誰だ」

迫力無く睨むと、屈託の無い笑顔が返つた。

「まあいいじやん。一人で戦争映画観るよりは楽しめたでしょ？」

「戦争映画？」

いつそんなものを観ようとしたのか、まったく心当たりがない。

そもそも、充分に体験したのだから観ようとも思わないが。

「違うの？ 映画館の前で突つ立てたでしょ」

「映画館……ああ、あれか」

ようやく思い出す。一人歩く中、たまたま田にした宣伝用の看板。そしてキャッチコピー。“その瞬間、貴方はトリガーリーを引けますか？”。

それをじつと見つめて佇む自分は、確かに観客の一人にしか見えなかつただろう。いや実際、あのままふらりと中に入つて、今頃は作品を観ていたかもしれない。そういう考え方を胸に秘めて、言つ。「観たかつたわけじゃないよ。少し、興味が湧いただけで。……まあ、確かにこっちのほうが楽しめたかな」

「でしょ？」

やはり太陽顔負けの笑み。自然と周囲まで伝染し、誠とセシリアの頬も緩んだ。と、アイスティーアとポテトが到着する。

「そういえばや、井ノ上」

ポテトを食べながら、鈴音。

「あんた、自分の水着あるの？」

「無いことは無いな。昔、騎兵隊の中佐から貰つたのがある。サー・フインを見せるとか、是非使ってくれとか言われて」

「どこのキルゴアよ。本名はランスじゃないの？」

「たまに思うのですけど、あなたは別の世界から来たような気がしてなりませんわね」

ずいぶんな酷評だ、と思つ。

「まあでも、せっかくの臨海学校で水着は軍の備品です、つてのは空氣読まないにもほどがある」

「そなのか？」

「当たり前でしょ。せっかくすぐそばで水着売つてるんだし……」

数秒、鈴音は唸りながら思考する。と、

「んじゃさ、今度はあたしが買つてきてあげよつか？」

「いいのか？」

「任せなさいよ」

自身ありげに胸を張る。

「それで、どんなのがいいの？」

「男用なら別に何でもいい」

「答えになつてませんわよ」

指摘はセシリ亞。最も、鈴音は氣にしてなかつたらしい。

「何でも、か」

そう言つて腕を組み、考へ込む。口には煙草よろしくポテトをくわえていた。するとじばらくして、

「あ、そうだ」

につ、と笑い、こちらを見る。その瞳が一瞬、悪戯を思いついた子供のように輝いたのは氣のせいだらうか。

「井ノ上、スク水つて知つてる？」

「！？」

鈴音の隣、セシリ亞が口に含んでいた紅茶をそのままカップへ吹き出した。突然の反応に、誠が案じるより早く彼女は言つ。

「あ、あなたは何を言つてるのです！ 買つてくるつていつたい

」

「いやいや、想像してみなさいよ。井ノ上がスク水着たら、きっと

“似合つ”と思つわよ

「井ノ上さんが……」

律儀に想像したのだろう。セシリ亞の視線が宙を漂い、そして顔が青ざめてゆく。とてつもなくグロテスクな生物を見たかのようだ、口元を抑えた。

「すみませんが……わたし、ちょっとお手洗いに行つてきます」

そう言つて席を立つ。去つてゆく同級生の後ろ姿を見送りながら、

「それで、スク水つて何だ？」

「男にとつては大人気極まりないつてくらいいの水着よ。きっとあんたも気にいると思つわ」

その割りにはセシリ亞の反応が氣になるが。

「まあ、それじゃあそれで」

「オッケ。任せといて」

デスクへ置かれた書類に目を通し、カイル・ノーマッドは煙草に火をつける。いつまで経っても慣れない佐官用の軍服を着た彼は、思案していた。書類はアメリカとイスラエルの共同で行われる、第三世代ISシルバリオ・ゴスペルに関するものだ。いや、正確にはそれに関わりがあると思しき報告。試験運用を実施するハワイ基地に、何らかのハッキングと思しきデータが流れ込んでいるという。

電子戦チームを送るべきかな……。

煙をたゆらせ、独りごちる。原因はどうあれ、自分たちが対処しなければならない。ISが関わるとなれば、それは国家の安全を左右する。それには軍部だけでなく、NSAも対応しなければ。不意に懐で携帯電話が鳴る。誰だろうか。取り出して相手を見ると、実質的にカイルが保護者である井ノ上誠だつた。

「どうした？」

『いや、あんまり重要なことじやないんだけどな』

「ほう?』

珍しい、と率直に思つ。いつも、仕事の話でしか電話などしてこないのに。少し嬉しく思つたのは、擬似的に親である立場のためか。

「何だ?』

『いや、本当に大したことじやないんだけど。鳳鈴音つて知つてるか?』

「鳳……ああ、中国の代表候補生か」

名前だけ、以前に見たファイルで記憶していたのを思い出す。

『あいつが今日、成り行きで俺の水着を買つてくれたんだけどな』

『ほう、よかつたじやないか。ああ、そういえば臨海学校だつたらな。お前の水着といえど、中佐のあれしかないし』

言いながら、喜びを覚える。どうやら学園でも馴染めているらしい。状況がよくわからないだけに、こういう話は頬が緩む。

「それで、どんな水着を?』

『スク水』

「……」

今、電波が乱れたのだろう。そう信じたい。いや、そうであるはずだ。とても有り得ない単語を聞いた気がするのは、きっと何かの間違いである。

「すまない、誠。もう一度言つてもらえるか?」

『あ? ああ。スク水だよ、スク水』

「ごんつ、と。鈍い音と共にデスクへぶつかつた額へ重い衝撃。頭を上げると角に血がついていた。

『ドク? 大丈夫か?』

お前が大丈夫か!

言いたい台詞は、しかし喉から出でこない。

「ああ、大丈夫だ。ところで、それはお前が着るわけじゃないよな?」

『いや、着るために買つてもらつたんだけど』

煙草を握りつぶす。火種が熱い。が、気にせず手のひらで鎮火した。

「なあ、誠

『何だ?』

「一応、中佐に貰つたのも持つていってくれ。頼む。お願ひだ」

『え、そんなに必要なのか?』

『必要だ。だから、頼む』

『あ、ああ、わかつた』

「本当に頼むぞ。……じゃあな」

電話を切る。独りのオフィスで、カイルはデスクへ突つ伏すと誰にも見られるはずのない涙目を隠すように、腕を枕代わりにした。そして呟く。

「育て方、間違えたか……」

3 (後書き)

初つ端の部分を丸々掲載し忘れてました。申し訳ありません。

たつた二人の更衣室の中、昨日に鈴音から受け取った紙袋を開けた誠は、そこにあつた一着の水着を広げて立ち尽くす。紺色をした、肩から股間にかけてまで生地のあるそれは、どう見ても男性用ではない。そしてようやく悟る。スク水がスクール水着の略称であったと。

「誠、お前……」

後ろで声が聞こえる。一夏だ。音速突破の勢いで振り向き、異形を見る目をしたルームメイトに述べた。と、開いていた距離に気付く。先ほどまでは真後ろにいたはず。なのに現在の距離、およそ三メートル。簡単に言うなら更衣室の真ん中あたりに誠を残し、一夏はドアのそばまで退がっていた。

「違う、織斑、これは違う！　俺は何も

「わ、わかつてるから、な？　だから来ないでくれ」

詰め寄ろうとしたのを、やんわりと制止される。視線がさりげに悪化していた。病人を見るような憐れみと、変質者を目の当たりにした軽蔑。この二種が交じり合つた瞳。

「別に、さ……お前の趣味とか、『気にしてないから

「違うから！　これは本当に違う！　確かにこれでいいとは言つた

が

「それでよかつたのか……そうか」

「だからそうじやない！　俺は悪くないんだ、被害者だ！」

「誠

一転、真剣な声音が響いた。正面からじつと見据えてくる目。蔑みの欠片すら無い、真摯な色を帶びていた。

「安心しろよ、誠。誰にも言わない」

「織斑一夏は、そう言って微笑んだ。ここしばらく見ていない、親

近感あふれる表情だつた。彼はドアを開け、更衣室を後にする。

親

「……」

一人、手元を見た。紺色のスクール水着はまだそこにある。と、何かがその隙間から落ちた。ひらひらと宙を舞つて床に落ちたのは、一枚の紙切れだ。拾い上げて、見てみる。日本語で書かれた短文があつた。

『これがスク水だ！ 気に入つたかね、井ノ上君よ。本氣で着たらダメだぞ！ 追記。紙袋に普通のやつがシャツとセットで入つてから、そつちを着るといいよ』

「……」
無言で、メモを握り潰す。紙袋を見た。よく覗いてみれば、確かにもう一着が入つてゐる。こちらは普通の、色鮮やかな海パンとアロハシャツだつた。

それから数分後。砂浜を歩く誠の所へ、数名のクラスメイトが近寄つては離れていつた。もちろんスク水など着ていないし、それが原因でも無い。何より、件のスク水は人気の無い浜辺で燃えているはずだ。では、というと、いうなれば雰囲気。殺意と覚悟の元、潮風が吹く浜辺を砂漠の戦場よろしく闊歩するその様は、行楽地において異端であり暴風雨のように危険だつた。

「あ、井ノ上く ひつ！」

それに気付くのが遅すぎた女子が一人。布仏本音のほとけほんねという名前だつたと、誠は記憶してゐる。身を翻して逃げようとする前に、低い聲音が捕まえた。

「Wait (待て)……」

びくりと、少女の身が固まる。脅迫のそれではない。強烈な暗示ないし金縛りにでもあつたようだ。

「こ、殺さない、で……！」

「I do not murderer you. Are you

good? (お前を殺したりしない。いいな?)

「い、イエス！ マイ、グッド！ ヘルプ、ヘルプ！」

通じてゐるのか通じてないのか、判断できない。が、大した問題で

もなかつた。少なくとも、誠の中では。

「You should answer a question. Where is the Chinese girl? (質問に答えてくれればいい。中国女はどこにいる?」

「わからないよ、英語で言われたつて英語は苦手なんだからあ！」目に涙を浮かべ、いや、嗚咽すら漏らし本音は喚く。煩わしかった。深い溜息の後、言い直す。

「酢豚はどこだ？」

「す、酢豚？ 知らないよ、ここの海だよ、中華料理なんてないよお！」

鋭い舌打ち。それが本音にとつては、誠の思う以上に効果をもたらしたのだろう。嗚咽すら止まり、喉に詰まっている。そういう反応を教えられたことがあった。人質が極度の緊張下におかれた時、例えば後頭部に銃口を突きつけられ、さらに撃鉄を起こす音が聞こえた時だ。そういう場合、脳が麻痺して呼吸困難に陥る者も珍しくないという。

そうなつては困る。せつかくの情報源を、無駄にできない。

「鳳鈴音だ。奴は、どこにいる？」

「そ、それなら向こうのほうでオリムーを探して……」

方角が震える人差し指によって示される。妙な生き物らしき名称を聞いた気がしたが、どうでもいい。彼女は確か、一夏のことをそう呼んだ。それで充分だった。距離にして約一〇〇メートル、砂浜を歩くツインテールを目視。右手が得物を求めて右腰を探り、空を切る。いつも、というより戦闘服姿ならばそこにホルスターとシグがあつたからだ。しかし今は無い。結論する。得物は無し、否、素手で充分。

ゆつくりと本音へ視線を動かし、告げた。

「ご苦労、布仏……。手間を取らせたな」

「め、滅相もありません！」

敬礼を返された。本来なら同じく敬礼で応じるべきだろう。しか

し戦場で、それも標的を目の前にして悠長な事はやつていられない。ふつ、と殺気が消える。いや、隠れたのだ。ライフルや戦闘服、防弾ベストに手榴弾やブーツなど、必然であろういかなる装備も身に付けない。それでも兵士だった。たとえその格好が海パンとアロハシャツに持参したビーチサンダルだけであろうとも、否定はできない。獰猛で、狩りを行なう瞬間まで息を潜めて時を窺う、エリートの瞳と身のこなし。物真似によつてできる動きではない。

一〇メートル。砂地を進む。熱せられた粒子がサンダルを越えて足に触れる。熱い。だが動きは止められない。感覚を消す。痛覚を無視。痛みという単純かつ確実な危険信号を削除した。

三〇メートル。呼吸を静かに、薄刃のことく研ぎ澄ます。気配を消した。過去の狙撃訓練を活用する。自分はここに存在せず、形を成さず、風景の一部であると。そう言い聞かせた。

六〇メートル。両腕から力が抜け、筋肉は弛緩した。心地よい脱力感。戦闘以外の状況で、一番良いのはリラックスのことだ。最も危険で行動を強いられる瞬間にこそ、スイッチを切り替えればいい。誠にはそれができた。

九〇メートル。すでに目と鼻の先にいる。足をコントロールし、踏み下ろす速度を制御した。よりゆっくりと、砂を歩く。

九五メートル。不意に目標が振り向いた。

「あ、井ノ上」

朱色をした水着姿の鈴音は、そう言つて笑う。その途中、誠の中でスイッチが戦闘へと切り替わった。無言の貫手。顔を狙つたが、足場が悪い。顔面を抉るかに見えた必殺の一撃は、間一髪で真横を駆け抜ける。

「……え？」

遅れた反応。貫手をゆっくりと引き戻す中、鈴音は自分に降りかかる危険を理解しようと務めていたらしかつた。

「あの、井ノ上」

「Do you understand English? (英語

がわかるか？）

先ほど、本音とのやり取りで学んだ。まず確認をするべし。口喧嘩も交渉も、双方に意思伝達が成立しなければ意味を成さない。さすがに代表候補生が英会話もできないと思えないが。

「え？ あ、えと、まあ、多少は……」

「OK. You do not have to think about anything anymore. It is over here. I can disappear from this world. Will that feel now be splendid? (よし。もうお前は何も考える必要は無い。ここで終わるんだ。この世界から消えることができる。そいつは素晴らしいことだろひへ。)」

「は……？ 終わるって……あ

察したらしい。命懸がいつたとこいつひへ、引きつった笑みを浮かべる。

「もしかして、怒ってる……？」

控えめな問いかけ。ふつ、と笑いが漏れた。それは止まるることを知らず、くつくつと喉奥を鳴らす。次に口を開いた時、英語でなく日本語だった。

「怒ってるか、だと？ なあ、鳳よ。そいつは本気で言つてるのか

？ ええ？ 鳳鈴音よ」

「い、いやあ、本気といつか、その、ね？ 確認しといつかなー、つて」

「なら確認は済んだな。……生憎と中国の宗教は知らないんだ。祈りはキリスト、カトリックで許してくれ」

少女の肩にそっと手を置く。もう逃すことはない。これで終わりにしてやれる。

「いや、あの、井ノ上……ちよ、待つて、にゃ」

猫に似た悲鳴を上げるより先に、誠は行動した。声を失った悲鳴が砂浜を越えて海を渡る。それはこの上なく平和な光景だった。

砂浜を歩く。実に心地よい。日差しもさることながら、潮の香りと波の音が素晴らしい。

「死ぬ……」

どこからかそんな声が聞こえる。ふと見れば、少し前にこしらえたオブジェがあった。浜辺に作られた砂の山に、顔だけ突き出した鈴音。額に“中国の墓”と書かれた張り紙が、中々良い味を出している。生まれてこの方、おそらくは最も爽やかな顔でそれを眺めた誠は、同級生たちで溢れる浜辺を歩んだ。

いつの間にかビーチバレーが始まっていたらしい。クラスメイトの一人が珍妙な二つ名で自身を称し、ボールを打ち込んでいる。何とも和やかであり、水着姿の少女たちが集団でスポーツに打ち込むという様は、少なからず男の心というのを掴んだ。約一名、女でなく男も混じっているが。

何であいつは煩惱の欠片も無くあんな真似が出来るんだ？

シャルロットと、もう一人はラウラだろうか。一人と共にチームを組んで戦っている一夏を眺める。清々しいほどに異性への興味を感じられなかつた。

まあ、織斑だしな。

単純に結論付ける。そもそも、真剣に考えるのがおかしい。

と、目に止まるものがあった。トタン屋根で出来た掘つ立て小屋。でかい看板が掲げられ、そこには“海の家”とある。これを本気で海という苗字の人物の住まいと考える人間は、まず有り得ない。しかしそこは誠だ。海に来るのが初めてならば、娯楽にも疎い。頭を捻り、計算し、ようやくそれが喫茶店めいた物だと気付いたのは、近づいて店へ立てかけられたメニューの一覧を見たときだつた。

財布を探る。海パンの右ポケットから取り出し、中身を確認。ここでクレジットカードが使えるとは思えない。現金に決まつてゐる。所持金は一万と七八〇〇円。もし店側が各メニューの値段をひと桁

ほど間違えて表記していないのなら、一日中だつて過ぎせる金額だ。入り口付近のベンチへ腰掛け、やつてきた女性店員に囁つ。

「ジントニック」

「え？ あの、失礼ですけど未成年では……」

財布から一枚のカードを抜き取り、見せる。米軍の身分証明証。「えと、アメリカ軍の方……？」

「そういうこと。未成年じゃ、入隊できませんよ」

堂々たる嘘だ。心の中でイエス・キリストに詫びる。店員のほうは納得したらしい。専門知識があるはずの無い民間人に、これは役立つ。例を言うなら、いつも吸つてる煙草の購入などがそうだ。

「失礼しました。ただ今、お持ちいたします」

営業なのか自然体なのか区別しにくい笑顔で言う店員を微笑んで見送り、浜辺を眺める。いつの間にかバレー大会に教師二名が参戦していた。と、

「あれ、井之上君？」

声がかかる。髪を後頭部で一箇所、ツインテールのようにまとめた長髪の少女がそこにいた。見るからに活発そうな顔つきは、実際にそうなのだ。クラスでは最もよく話す人物。その性格も一番理解している。先ほど、奇妙な二つ名を上げていた少女。

「せつかく海来たのに、もうリタイヤ？ 一緒にバレーしようよ」「いや、俺はいいよ。お前みたいにはできないし。えーと……」「ん？」

何と名乗つっていたか。首をかしげる少女の前で、例の一一つ名を記憶から探る。そして、

「ああ、思い出した。“常夏のバルクホルン”だつたな」「全然違うけど！？」

心外だとばかりに少女は言つ。一瞬、誠は本氣で驚いた。すかさず食いついてくる。

「いやそんな真顔で驚かないでよ！ 井ノ上君つてそんなキャラだつけ？」

「俺は俺だ。とこりうか、バルクホルンじやないならお前の存在意義は何だ？」

「存在意義！？ 壮大すぎるでしょ！ “七月のサマー”デビル”だよ！」

七月のサマー”デビル”。その名を舌の上で転がしてみる。なんとかくそうだった気がしてきた。いや、本人がこれだけ言つのだからそうなのだろう。

「腑に落ちないが、まあいいか」

「腑に落ちてよ、そこは。って、あたしの名前、ちゃんと覚えてるよね？」

「当たり前だろ。……谷本、だよな？」

「何で不安そうなの……」

額を押さえ、谷本癒子たにもと りょうこは落胆に頃垂れる。さすがに本名は冗談のつもりで間を取つたのだが、悪ふざけが過ぎたらしく。

「悪い。からかいすぎた」

「気にしてないよ。この前、一緒にお昼食べた時もこんなだつたし。もう慣れたよ」

苦笑を浮かべ、言われる。そういえばそんなこともあつた、と思ひ出した。一夏との模擬戦が終わり、医務室で目覚めたその翌日のことだ。それ以来、幾度か連れ立つた記憶がある。活発なだけに、女子というのをあまり気にしなくて済むのが良い。実際、学園で一番親しいのは彼女だろう。

「それで？ 女の子たちの水着を遠目に眺めて、一人気ままにくつろぎタイム？」

「今はお前のを間近で見てるけどな。まあ、年寄りに運動させんなよ

「年寄りって、一歳差でしょ？」

それを聞いて思い出した。編入してすぐ、誰かに年齢の話をしたと思っていたが、癒子にしたのだ。これまでの対応が自然すぎてすっかり忘れていた。最も、誠にとつてその接し方が気兼ねもなく助

かつたのだが。

「一歳も違うと、いろいろと変わるんだぞ？ 例えば一八歳つて聞くとまだ子供つて気がするけど、一〇歳になつた瞬間に大人つて感じに変わるだろ」

「そう、なの？」

「そなんだ。まあ、そういうわけで俺はのんびり目の保養に勤しむ

「結局はそこに行くわけ、か」

残念そうに、顔を背ける。思わず苦笑が漏れた。

「そんな顔すんなよ。旅館に行つたら、卓球くらいは付き合つてやるから」

「んー。それじゃあもう一つ」

「何だ？」

びしつ、と誠を指差し、

「バレーで負けないよう応援すること」

そう言つて笑う。

「了解。しつかりと」

「オッケ。では少尉、行つてきます！」

「おう、行つてこい」

互いの手のひらを思い切り打ち合わせ、ハイタッチを決める。それで氣合いが入つたのか。意氣揚々とバレーコートへ向かう癒子の背中を見送る。

ふと氣付いた。先ほど頼んだジントニックが、まだ来ていない。それほど手間のかかる品とは思えないが。

「捜し物はこれか？」

突然、背後から男の声が聞こえた。来た当初、店内を見回した時にはいなかつた人影が一つ。いや、二つ。海パン姿の男の後ろ、テーブル席に腰掛ける水着姿の女性がいる。前者は赤髪の短髪で、後者は薄い金色をしたセミロング。どちらも日本人の顔立ちではない。日焼けをしているが、間違ひなく白人。

とはいって、人種の特定は容易だ。なぜならばそのどちらも、誠は面識がある。

「未成年が飲酒ってのは、あんまり感心しないぞ？」井ノ上

「薄く、男は笑つた。

「スタンリー……」

「久しぶりだな」

ファーストネームで呼ぶと、スタンリー・ジョンキンスはより一層に笑みを深める。同僚のそれを、不快とは思わなかつた。

隣へ腰掛けてジントーラークを飲んだスタンリーは、ほのかに酒の香を含んだ息を盛大に吐いた。

「俺のだ」

「子供はジュースにしどけ」

誠の頭に手が置かれ、乱雑に髪の毛をかき乱す。やられたほうは鬱陶しいという顔をするものの、しかし振り払つ気になれなかつた。と、

「任務中に飲酒もどうかと思いますよ、大尉」

「リラックスは大事だぞ」

軽く切り返され、店内から声を発した女性、アリス・ミラーは諦めたように小さく嘆息した。それに同情し、声をかけずにはいられない。

「あんたも苦労してるな、中尉どの」

「ありがとう、少尉。けど、私の心配より先に自分の彼女を気遣つてあげたら？」

「彼女？」

首を傾げる。するとスタンリーが面白そうに笑つた。

「驚いたぞ、誠。さつきの子、中々可愛いじゃないか。お前もようやく色気がわかるようになつてきたな」
癒子のことだ。それ以外にあるまい。

「馬鹿言うな。あいつは友達だ」

「その割りにはずいぶん息が合つてたじゃない」と、アリス。

「単純に気が合つてだけだよ。それで?」

酒のことは忘れ、スタンリーに囁く。口調も自然と変わった。

「NSA特殊作戦グループの実働要員が一人も、はるばる日本まで何しにきたんだ?」

「昔の話だ。今は名称が変わった。T-OPS、ゴーストハウンド部隊だ。出世したんだぞ? 僕は空中機動部隊指揮官、そっちのミラー中尉は副長だ」

「へえ……」

そういえば、と思い出す。カイルからそんな話を聞いた。対IS戦術部隊として、正式に承認されたのだと。

公式に、軍部でないNSAやCIAに攻撃チームというのは存在しない。戦略上のアドバイザーとしてそういう人員を引き抜いても、戦闘には用いないとされている。最も表向きには変わりなく、現実にはやはりそういう違法な部隊は存在していた。秘密攻撃隊、暗殺チームなど。呼び名は様々に別れるものの、実在している。

中でもNSA保有の部隊が一新され、T-OPS、つまりタクティカル・オプスと呼ばれるようになったのは最近のことだった。もちろん、正式に承認、といつてもその存在を合衆国政府が容認したわけではない。T-OPSは、実働部隊だけでなく電子戦や諜報戦など、様々な分野のチームの総称である。誠も、正確な立場としては陸軍でなくこの一員だ。架空の部隊で身分を偽るのは珍しくない。中でもスタンリー・アリス、それにカイルまでもが所属するゴーストハウンド部隊は、隠さなければならぬ最大の機密といえるだろう。

「ゴーストハウンド。亡靈の獵犬。担当する作戦は対IS戦略。つまり今や世界最強の兵器となつたISへの対抗手段となること。合衆国が特別なわけではない。」

いる。たった一機で国軍戦力に匹敵する超兵器。そんなものは在るというだけでも危険だが、消失はそれ以上に危うい。一機の損失で、既に狂ってしまった地球上のパワー・バランスがさらに悪化するということだ。ISにはIS以外に勝つ者が無い。そんな方程式が完成してしまっては、有事の際にどれほどの損失が出るのか。これは突き崩さなければならない計算式であり、武力均衡を取り戻す第一歩といえる。ただ一人のIS操縦者が起こした気まぐれで世界大戦に発展しかねない世の中なのだ。それに甘んじているほど、各国軍も政府も弱くない。

当然だつたはずだ。

またしても映像がよぎる。昨日、映画館で見たのと同じよつて。夕日と少女。いや、それだけではない。もつと大勢がいた。彼等は皆、あつて然るべき最終安全装置だつたはずだ。

「そりやおめでとう。……で？」

それらを雑念と切り捨て、頭から無理やりに振り払う。

「用事は？」

「お前の様子見とこつちの任務、半々だ。あと、一応は知らせておこうと思つてな」

後半、スタンリーの表情が曇る。楽しいおしゃべりでないのは、確實だつた。

「ミーチャム曹長つて、覚えてるか？」

「Dボーイズの？」

スタンリーが頷く。Dボーイズ。これはむろんのこと愛称だ。レインジャー隊員がその上にいる特殊部隊、デルタ・フォースと呼ばれる部隊員を呼ぶときに使う。

ミーチャムの名前を聞くのは久しい。非公式部隊であるデルタは、同じ非公式のNSAチームとも関わりがある。会つたのは数回だが、実際にはそれ以上に助けてもらつていて。後に聞いた話によると、誠がレインジャーへ入隊できたのはカイルとミーチャムが裏で動いたからだという。

会つてちゃんと礼を言つべきだな。

誠はそんなことを考えていた。スタンリーが次の語を紡ぐまで。

「あいつは死んだ。一日前のことだ」

死んだ、と。スタンリーは言った。そう告げたのだから、誠は認識する。言葉はわかつているのだ。なのに脳が混乱に襲われた。

「死んだって」

「KIA（作戦・戦闘中の死亡）だよ、戦死したんだ。お前も無関係な話じゃない」

いつの間に取り出したのか。スタンリーは右手につまんだそれを、誠の眼前に突きつける。青いプラスティックでコーティングされた、メモリースティックだった。

「ミーチャムのチームは、カタール北部で作戦展開中だった。そこに陣取つてた武装勢力が、フランス政府からIRBM（中距離弾道ミサイル）を輸入するという情報があった。目的は両者の交渉妨害と、IRBMの破壊」

弾道ミサイル。その名が使われなくなつて十年ほどは経つ。ISの登場によつて使われなくなつたのでなく、ISに破壊された兵器。発端はかの白騎士事件だ。どこからかハッキングを受けた各国軍事ネットワークは、二三四一発を超える大陸間弾道ミサイル、つまりICBMが日本へ発射することとなり、そして撃墜された。二三四一発。当時、弾道ミサイルは多弾頭化によつて一発で広域に影響を与えるようになつたため、どれほどの大国であつても保有数は一〇〇を越えていなかつた。つまり二三四一発というのは、非公式や確認されなかつた誤差も含め、日本を攻撃可能な弾道ミサイル、その九割をも上回る数字である。

これによつて現代における弾道ミサイルとは、その有用性を完全に無くしたに等しい。ほとんどが失われ、さらにはISという一発限りでない上にそれ以上の戦力となる兵器があるので。開発経費は当然ながら無駄とされ、打ち切られている。見方によれば、航空および陸上兵器よりも悲惨な末路を辿つた。そして残つた少数のIC

B Mや、それより射程の短い I R B Mはやはり闇市場に流れている。かつて想定された銃声の無い、非目視による機械同士のサイレント・ウォー（静かな戦争）は、こうして幕を閉じた。再び、完全ではないにしろ有視界戦闘へと移行し、危険度を濃密にした小規模戦争の連續は、果たして進歩か退化か。

「 I R B M破壊なら、 N S Aの関係する問題じゃないだろう。交渉妨害なら、わかる気もするけど」

と、誠は答えた。いかに非効率的とはいえ、大量破壊兵器をテロリストに流したのだ。どの国でも行われているが、その違反性は強い。取引現場を抑えたのなら、アメリカにとつてフランス政府に圧力をかける絶好の機会となるだろう。綱渡りの均衡にあるこの時代、国家間の政治的交渉に N S Aのような組織は関わって当然だ。

しかし、と思い返す。それでも自分には関係の無い話だ。そういう分野にはそういう専門家がいるし、一介の兵士である自分とは直接的に何の関わり合いがない。視点を変えれば、スタンリーがもたらしたこの情報は「一ード・トウ・ノウの原則を破ることにも思える。「それだけなら確かに、あなたが知るべきではないわ」

これまで沈黙にあつたアリスが言つ。

「けれど、誠、重要なのはそこじゃない。その後なのよ」

「後……？」

「そうだ」

スタンリーが引き継ぐ。

「ミーチャム達は任務を完了し、回収地点へ向かっていた。その途中、何者かに襲撃されたようだ」

「武装勢力か？」

「上層部も最初はそう考えた。だが、彼等が納得できない理由があつた。ミーチャムは最後の交信で、敵の飛行場を発見したと言い残している。あの場所にそういう施設があるという記録は無い。誰かが抹消したみたいに、綺麗さっぱりと記述が無かつた。そこで N S Aの情報支援隊は残存していたカタール軍ネットワークを探つた。

すると、そつちにはミーチャムが発見した施設と同一らしい空軍基地の記録が断片的に残っていた

そしてメモリースティックが差し出される。

「これはあいつが最期に送信し、からうじて受信できた記録カメラの断片映像だ。私見だが、誠、この映像はお前と俺達に向けて、ミーチャムが伝えようとした警告だと思う」

警告。その単語を噛み締めた。

そつとステイックに人差し指を伸ばす。掴むかにみえた指先は、だがそこで止まつた。約五センチほどの距離を置いて。不可解な行動はそこからだ。誠は目を閉じる。静かに、瞑想でも始めたようだ。刹那、指先からステイックに、一瞬だけ光が交差する。静電気に似ていた。高性能のハイスピードカメラがあれば、その様を確認できただかもしれない。誠の指先から迸つた一筋の電流がステイックへ当たり、間髪入れず戻つた様子を。

数瞬、閉じられた目蓋の奥で眼球が動く。人が夢を見るときに似ていた。しかし彼が見ているのは夢でない。電子機器に保存された途切れ途切れの映像を、脳に直接送り込んで再生。その作業が終了するまで、およそ三秒かかった。そして目を開く。

「……どうするんだ？」

ようやく言葉が出るまで、さらに十秒。この不可解な行動で誠は何を知ったのか。その声は疲労の色が滲み出ている。

「こっちの人員を失つた。俺達の仲間を。表向き、米軍は報復体勢を整えている」

「実際は？」

「様子見だな。情報が少ない上に、断片ばかりだ。クリスチャンが死んだかどうかわからぬ」

「なんだと？」

不信感が驚愕を上回つた。思わず、スタンリーの横顔を見る。

「死体を確認したと、そう聞いた」

「そう言う以外に道があるか？ 齊威が去つたというのは、簡単で

効果的だ。短期か長期か、向こうが行動を起こすまでは士気を保てるし、その前に次の一手で仕留めればいい」

「……まるで政治だな」

皮肉げに呟く。アリスにも聞こえたのだろう。彼女は言つ。

「戦争はいつだって最も単純な政治よ、誠」

「ごもつとも。殴り合つだけでいいんだからな」

「そうだ」

と、スタンリー。

「殴り合つて、最後にリングへ立つていればいい。犠牲は関係無い。……気に入らないか?」

「気に入らないよ。ミーチャムが警告を『与えてくれたのに、俺達は何も行動しないなんて。死に様にすら報いてやれないってのは、これ以上無いくらい酷な話だろ』

「お互いにな」

肩を叩かれる。スタンリーは立ち上がつた。背後でアリスも続く。

「俺達は行く」

「何の任務だ?」

「自分のほうに集中している」

一閃、切り捨てられる。

「だがな

」

スタンリーが続けた。

「今、自分で言つた言葉を忘れるなよ。俺達は何も行動しない。もしも篠ノ之束が目の前に現れても、殺すな」

「いいのか?」

男の顔を見上げ、述べる。

「機会があればすぐにでも、と。あんたはそう考えてると思つてた」

「俺はそうだ。けど、俺もアリスもお前と同じ兵士だ。命令には従う。曰く、歴史が捻じれたら正しい修正の時期を見ないといけないらしい。コンウェーたちは急ぎすぎた。俺達は違う。じゃあな

脇を通り抜け、二人の友人は立ち去ろうとした。が、

「教えてくれよ」

誠が言う。視線を海へと向けたまま。二人が立ち止まる。

「どうして“クリスチヤンたち”じゃなく“コンウェーたち”何だ？」

「生死不明の男をリーダーと見て、そいつは正確だと思うか？」

解答に頷く。

「じゃあもう一つ。スタンリー、あなたの言つ“俺達”に、俺やドクは含まれるのか？」

ゆっくりと、こちらに視線が注がれるのを感じる。誠はそれに応じて、見返した。するとスタンリーが微笑む。邪氣の無い純粋な笑みでもって、彼は聖書の一節を述べた。

「A s k , a n d i t s h a l l b e g i v e n y o u . (求めよ、さりば与えられん)」

そしてアリスと共に踵を返し、離れてゆく。日は明るい。にも関わらず、周囲は静かだった。いや、本當なら騒がしい。誠の脳がその音を拾っていないだけで、喧騒に包まれている。打ち付けては退がる波を見つめ、彼は立ち上がった。

煙草に火をつける。一口吸い込むと、頭がぐらりと揺れた。それでも映像は消えてくれない。夜が近い。空は夕焼けに青の色彩が混じり、恐ろしげな紫へと変色している。冷えた潮風が凧いだ。少しだけ肌寒い。

浴衣に草履を履いた誠は、旅館の中庭で佇む。懐には携帯電話。先ほどアドレス張から一人の人物の電話番号を出し、結局はかけることなく沈黙を保っている。相手はドク、カイル・ノーマッド。

『あいつは死んだ。二日前のことだ』

昼間、スタンリーよりもたらされた報告が耳の奥で再生される。カイルは知っていたのだろう。昨日、電話したときにもわかつていたはずだ。談笑とも言えないふざけた雰囲気の裏、友人が一人この世と別れた。何故、知らせなかつたのか。そんな疑問が浮かんだが、当然であると思う。必知事項は関係無い。カイルは、知らせるつもりだったのだ。だからスタンリーとアリスが来た。自分たちの任務のついででも、カイルがそう命じたとみて間違いない。

NSA特殊作戦グループ。もとい、現在はT-OOPS所属ゴーストハウンド部隊。獵犬を指揮しているのは、他ならぬカイルである。彼の階級は中佐。大尉と中尉のスタンリーたちは、直属の部下だ。ある程度、任務外の行動も命じられる。

しかしカイルへ電話をかけようとしたのには、もう一つの理由があつた。ミーチャムの残した映像。誠以外、あの場では誰にも見えることができなかつた。いや、そもそも井ノ上誠を知らない人間が見て、理解できる行動でも無い。指先から迸つた静電気も、それを介してメモリーステイックに保存された映像を観たことも。超能力と変わらないような現象。人間には不可能な能力だ。そしてそれからすると、この十七歳の青年は人間でないということにもなる。人に似た生物。そんな彼が観たのは、砂漠にぽつりと出現した空

軍基地である。周囲で曳光弾が飛び回り、砲撃か手榴弾かによる爆発で乱れたノイズ混じりの戦場。ミーチャムの主観視点で撮影されたらしきそれは、最後に上空を見上げる。自然と見たのではなく、そちらを向くように言われたようだった。仲間の誰かが警告を発したのだろう、と推測する。音声は含まれていなかつたため、確實ではないが。ともかく、ミーチャムの警告とはそこからの一瞬が全てだった。月が輝く夜空に浮かび上がった、人型大のシルエット。

「ブラックワイドウ？」

最初、誠はそんな妄想を抱いたほどだ。知らない内に夢遊病患者となつた自分が、ブラックワイドウを纏つてカタールに飛び、仲間を攻撃したのかと。それほど、敵機は誠の所有する機動兵器と酷似していた。

いや、むしろ認めたくなかったのだ。あれがブラックワイドウなら、錯乱した自分が撮影者もといミーチャムたちを殺したのだと、そうあつて欲しいと願つた。

『コンウェーたちは急ぎすぎた』

またスタンリーの声が蘇る。コンウェー。そのファミリー・ネームを聞くのは、懐かしさすら感じた。浮かび上がる教官の顔と、一年下の少女。リーダーであるはずの男を差し置き、その名を中心人物へ上げたのは、何故だったのか。生死不明は、そのどちらも同じはずだというのに。もしくは、名前を上げた方は生きているのだと、そう言われているかのようだ。

ミーチャムたちを襲つた人型兵器、存在しないはずの空軍基地。そしてコンウェーの名前。それらが誠の中で結びつき、答えを導き出す。彼にとつて最悪の、しかし否定し難くもある解答を。誠はその真偽をカイルへと聞きたかった。答え合わせとも言える。どうしようもなく結論が欲しい。だが一方で、やはり恐怖が勝つた。知ることの恐怖だ。知識を得るとは、それだけ危険を理解することに等しい。欲する知恵だけを得るというのは、ありえるはずのない身勝手だ。もしくは欲する真実だけを、とも称せる。

誠はすでに、その両方を推測していた。だから電話も出来ない。確固たる裏付けから逃げるため、煙草に火をつける。

「あ、井ノ上君！」

背後からやつて来た人物に、あるいは救われたのかもしれない。声だけで誰かはわかる。誠は振り向き、言つ。

「谷本。ああ、悪い。そういうえば卓球やるんだつたか？」

「卓球？」

昼間のやり取りから察した疑問を投げかけると、谷本癒子は首を傾げてみせた。浴衣姿が妙に新鮮。月明かりに相まって、普段は決して無い少女らしさが浮かんでいる。

「昼間のこと？」

「そう」

頷くと、首を振つて否定された。

「あれはいいよ。それより、どうかで鈴音見なかつた？」

「鳳？」

予想してなかつた名前。昼間の悪夢もといスク水が蘇る。今頃は灰になつて飛んでいるだろう。

「あいつがどうかしたのか？」

「どこ探してもいのよ。夕食にも来なかつたし、部屋にも戻つてないみたいで。一体どこ行つたのやら」

「……」

嫌な汗が背筋を伝つた。悪寒が走る。

「井之上君？ なんか顔色悪いよ、煙草の吸いすぎ？」

癒子が顔を覗き込んでいた。その視線は時々、煙草に向かつている。

「一応、未成年なんだからや。こんな見つかりやすい場所で吸つたら、まずいんじやない？」

「あ、ああ……」

ペンドントのように首へかけていた携帯灰皿へ、短くなつたそれを落とす。軽く息を吸つた。おそらく正解であり、触れたくない推

測がここにこもる一つ。

「井之上く つー？」

肩を掴む。驚愕にびくついた顔へ、囁くように告げた。

「谷本、俺を助けてくれ。一人じゃ無理だ」

「た、助け？ あたしが、井之上君を……？」

「そうだ」

力強い肯定。不意に気付いた。癒子の顔色がどこかおかしい。血色が悪いというわけなく、その反対だ。夜だというのに妙に明るく、赤く見える。

「俺についてきてくれ」

「え、ええ！？ き、急にそんな 」

「嫌か？」

「嫌とかじやなくて、いやむしろ大歓迎だけど…… でもあたしつて、そんなに 」

狼狽している。当然か。彼女を巻き込むことになるのだ。軽い自責の念に駆られる。それでも、頼れるのは癒子一人だった。

「いいか？」

語を遮つて訊く。念を押すように。至近距離、まっすぐと目を見る。わずかに潤んだ癒子の瞳に、鏡よろしく自分が映つていた。

「……はい

どこか惚けたような瞳に反し、咳きは力強い。返された答えを、何度も自己の内で確認する。肯定。谷本癒子は、共に行くことを選んだ。

「よく言つた。来い！」

「え、ちょ 」

有無を言わせず、その体を抱きしめる。するとやはり少女なのだ、と改めて思った。クラスでは体力的に優れているが、それでも華奢。全体的に、自分とは比べ物にならないほどか細いと知る。

同時に胸中で別の語を紡いだ。ブラックワイドウ、部分展開。フライトユニット、つまり肩と背面、脚部だけを出現させる。その姿

はこの世に有り触れる最強兵器、そのものだ。

「なに」

「しつかり掴まつてろ！」

地を蹴る。垂直に。飛行機能をオンへすると同時にシールドを開。己と癒子をその環境から防護する。高度五〇メートルまで上昇するのに、十五秒ほどかけた。これでも癒子に気を使つたつもりだ。シールドがあるとはいえ、五感から来る急激な環境変化は体調悪化を招く。

「大丈夫か？」

やや口調を強く、尋ねる。

「平気だけど、^ビに行くの？」

「ああ。ちょっと……いや、その前に少し悪い」

「え？ な！？」

体勢を変える。右腕で頭、左腕で膝裏を支えて抱きかかえる。

「な、え、井之上君、なんでこんな格好」

「^ビの方が安定してる。正直、さつきの飛んでたらお前を落としたかもしれない」

言いながら前進。^{ナイトヴィジョン}あまり時間も無い。急がなければ。

同時に暗視機能をオンへ。本来のブラックウイドウならフルフェイスマスクのカメラ映像に投影されるが、今回は違つ。肉体を直接、ブラックウイドウの暗視モードに接続して、網膜を媒介にマスク内部と同じ状況を作り出す。簡単に言うなら、機体の機能を借りて自身の目を猫のそれにしたようなものだった。

「あの……」

と、癒子。

「何だ？」

「あたし、そんなに重い？」

「は？」

反射的に顔を見ようとすると、

「ダメ！ いま顔見ないで！」

「おい、馬鹿、落ちるだろ！」

一方は誠の顔を逸らそと手で押し、一方はせめて前方の視界を取り戻そと癒子の手を退けようとする。空中で起こったささやかな馬鹿騒ぎは、当の本人たちを除いて知る者がいない。

「わかつた、わかつたつて！ だから手をどけろ！」

「ホントに見ないでよ！」

「見ないうて言つてるだろ！？ それよりちゃんと掴まれようやく、手が退けられる。代わりに胸元で浴衣を引っ張られる感触。癒子がしがみついている。

ずいぶんと滑稽な姿をしているのだろうと、誠は思った。これがアサルトスースならまだしも、浴衣とは。写真に撮られれば、生涯の笑い種にされること間違いない。

「重くないぞ」

角度を変え、地上を観察しながら囁つ。

「え？」

癒子が顔を上げた。反射的に見返しそうになるのを堪える。また暴れられては面倒だ。地上に視線を向けたまま、答えた。

「だから、重くなんてない。むしろ軽い」

「……うん」

返事は小さく、風圧が無いといつて聞き取るのがやつとだつた。いつもと正反対にしおらしさを感じる。

と、地上に探し物を見つけた。砂浜に突き出た物体。安堵と一緒に、失敗を確認したとき特有の嫌な感覚がやってくる。胃が締め付けられるようだ。

「降りるぞ」

行動を伝え、実行。速度を抑えた降下で砂地に到着すると、癒子を下ろす。それからブラックワイドウを停止した。要所にあつた金属の質感が消え、草履が砂を踏む。同時に暗視モードが消えた。視界は元に戻る。おぼろげに、それでもはつきりと癒子の姿を捉えられたのは、夜空に出た満月のおかげだ。

「あの、なんで海……？」

「あれだ」

首を傾げる少女に、目標物を指さす。浜に盛られた小さい砂山に、突き出たのは人間の頭ほどの物体。いや、それは間違いない。

「あれって……あ、待って」

先に足を踏み出した誠を追う。物体との距離は十メートルほどだつた。明るい今夜、それは少しばかり近づけばすぐにわかる。砂浜から出た人の顔と、潮風にたなびくツインテール。額の張り紙は文字こそ読めないものの、何が書いてあるかは充分にわかつていた。何しろ、誠が書いたものだ。

「やはり……」

小さく咳き、胸の前で十字を切つた。今日、この地で友人二人の死を知つたことになる。この馬鹿馬鹿しい終焉にミーチャムを並べるのはどうかと思ったが、すぐ考え直した。勇者と無能、あるいは英雄と卑怯者。どれだけ人格に差があつたとしても、それは生前に限られる。死人に口無しという言葉が物語つていた。命とは等しく同じ価値でしかない。とすれば、命を持つて警告を送つたデルタ・フォースの友人は、ここに眠る彼女と変わらないのだ。

「やはりって、なにが」

問い掛け、誠の背後からひょっこりと顔をのぞかせた癒子は、彼の視線を追つて地に埋もれる彼女を見る。そして息を呑み、

「り、鈴音！？」

叫ぶと同時に駆け寄つた。その手が亞麻色の髪の毛に触れる直前、

「よせ、触るな！」

鋭い警告に、びくりと身を硬直させる。大股で近づくと、誠は物言わぬ中国人の前に片膝をつく。とりあえず張り紙を取つた。

「井ノ上君、これ、いつたい、なんで……」

「事情は後で説明する。手伝つてもらいたいこともある。だけどな、先に弔いをしないと」

「弔い！？」

「静かに」

背を向けたままそう告げる。癒子が黙つたのを確認し、誠は静かに口を開いた。去つた友に情愛と悲壯だけを込めた言葉を、そうして紡ぐ。

「こんな事になるとは思わなかつた。すまない、鳳。言つたとおりキリスト教で悪いが、許してくれ。……いつくしみ深い神である父よ。あなたがつかわされたひとり子キリストを信じ、永遠のいのちの希望のうちに人生の旅路を終えた鳳鈴音を、あなたの御手にゆだね」

「委ねられるか！！」

告別の言葉を遮つた怒声は、重い衝撃を伴つて誠の額を襲つた。

「ぐつ」

ぐぐもつた呻き声。頭突きの一撃は皮膚を素通りして頭蓋を越し、誠の脳を搖さぶつた。屈強な軍人も、予想できない必殺の攻撃にはあえなく陥落する。砂地にどさりと仰向けに倒れ、掠れる声で警告を発した。

「逃げる……死人が来る。アンテットが、化け物が出やがつた……」「誰が化け物か！」

一喝。怒声が海原を渡る。

「鳳、死んだんじや」

「残念ながら死んでないわよ！ トリックでも何でもないわ！ 大体、逃げるつて誰に……あれ？」

怨念めいた絶叫が止む。

生きてたのか。……よかつた。

胸中に咳き、十字を切つて感謝する。これで無意味な殺人者ではなくなつた。一方で鈴音はといふと、ここに居合わせた三人目に驚いたような目を向けている。

「癒子？ なんであんたが？」

谷村癒子は答えない。鈴音に続いて不審を抱いた誠が上体を起こ

すと、目の前に浴衣姿の少女が現れる。彼女は誠を見下ろし、述べた。目元に妙な影がかかっていて、表情がわからない。

「井之上君……ついてこいつて言つたよね？ あれ、どういう意味？」

妙に低い声だった。普段ならば、その周囲を占める烈火の如き感情にも気付いただろう。脳震盪寸前で留まっている現状の誠に、冷静な分析能力は伴わなかつた。右手で額を押さえつつ、幾らかの建前もとい言い訳すら混じらない真意を述べる。

「ん？ ああ、俺一人で鳳の死体隠すのは面倒だろ？ だから手伝つてもらお」

拳が振る。誠の脳天めがけて。癒子の放つたそれは中指の第一関節を頭頂部に命中させる正確さがあり、半日間の死人体験をした鈴音の頭突きよりも強烈な氣がした。損傷した脳に、重複する攻撃。誠は一瞬、視界いっぱいに白い光を見た。声すら上がらない。目を剥いたまま、上体がぐらりと揺れたかと思うとうつ伏せに倒れる。

四肢を痙攣させる兵士を見下ろしたのは、浴衣を纏つた鬼神か。先ほどまで淡い恋心めいた感情で赤くなつていた顔は、別の赤に染まつてゐる。

「一人で頑張つて！」

言い残し、踵を返す。誰も声をかけられなかつた。氣絶直前の誠と、生き埋め上体の鈴音だけが取り残される。波の飛沫が浴衣を濡らした。そろそろ満潮も近い。

「あのや、井ノ上」

鈴音が言つ。

「……なんだ」

「あたしが死体とかそういうのはもう無しにして、何て言つて誘い出してきたの？」

記憶を探る。癒子を連れ出すとき、自分は何と言つたのか。

「俺を助けてくれ。一人じゃ無理だ。俺についてしてくれる」

「……それ、どんな状況で言つた？」

「谷本の肩を掴んで」

沈黙。冷たい砂の粒子が良い具合に脳を醒ましてくれる。そこでようやく理解した。

「あのせ、井ノ上」

「何も言つた。俺は織斑とは違つ。一般的の男だ。ただ混乱してただけだ。それだけなんだ」

早口で一気にまくし立てた。思い返してみれば、あれではただの告白シーンだ。癒子が取り間違えて当然だろう。浅はか過ぎた自分に苛立ちを覚える。この状態も然るべき、いやむしろ軽いくらいだ。

「……そう。ま、それはいいとして、さつさと助けてくれない?」

「ああ……」

のそのそと起き上がる。肩が異様に重かつたが、仕方無い。元々、このために来たのだ。埋まっている中国少女の前まで生き、ブラックウイドウを右腕だけに部分展開。硬質の手で鈴音の頭を包む。

「冷たいけど我慢しろよ」

指先どころか筋肉の動き一つも見逃さず、トレースして動く機械の手。それでも心持ち慎重になつてしまつ。重機以上の腕力があるのだ。その気になれば人の頭など紙くず同然に潰せる。今夜、そんなグロテスクな光景は見たくないし、これ以上、友人を失いたくもなかつた。

「痛くしないでよ」

「わかつてる。というか、そういうことと言つたな」

「どういうことよ?」

「痛くしないで、とか。一般的の男だつて言つたろ。集中力、散らすだろうが」

一瞬、浮かんでしまつた妙なイメージを振り払う。機械の手のひらの向ひ、冷ややかな視線を感じる。

「……変態」

「いいや、極一般的だ。大体な、こつちは一年もアフガンだぞ。むき苦しい連中に囮まれて女の一人もいやしない。いやまあ、基地全

体でいいことは無いけど、部隊には誰もいなかつたさ。それが突然、IS学園なんて九九・九パーセント女子校に放り込まれてみる。間違いを犯さなかつただけでも表彰もんだ」

「今度、あたしにその話をしたらぶつ飛ばすからね」「はいはい。ほら、引っ張るぞ」

最新の注意で力を込め、引き上げる。ゆっくりと。月明かりの差す浜辺で機械の手に掴まれた少女が砂から出てくる。それも水着のままで。他人事であれば抱腹絶倒しかねない光景だった。

「おはよう、鳳。反省したか？」

「反省しました。だから下ろしてください」

いじけた声で言つ。ゆっくりと地に降ろした。腕の部分展開を解除する。その途端だつた。鈴音がくしゃみをして、へたり込む。自分を抱きしめるように両肩を抱えた。震えている。

「大丈夫、じゃないか」

「当たり前、でしょ……」

夜に水着で海岸をふらつく。そんなのは風邪を引きたいといつているようなものだ。しかしこの場合はそれ以上にまずい。砂に体温を奪われたところへ、さらに夜風を食らつているのだ。

「井ノ上、もうちょっと近く来て」

掠れた声。健康状態のそれでは無い。さすがに責任と罪悪感を覚える。隣に片膝を降ろした。

「何だ？」

「他意は無いの。絶対に。だから、なんていうか……」

言いくそろに後半を濁す。察するのは容易。

「……わかつたよ」

「つー」

その行動で正解だつたのだろう。鈴音は息をのんだが、何も言わなかつた。自分を抱きしめているのが一夏でなく誠だと言つ状況を、じつと享受している。

「……」

言葉は無い。しかし誠は次の行動へ移っていた。再びブラックウイドウを部分展開させる。ただし実体ではない。シールドのみを起動し、自分と鈴音を包み込むよう。これで風とある程度の冷気を凌げる。

だが足りなかつた。腕の中にいる少女は、今もまだ寒さに震えていた。これは現状でどうにもならない。体温が低下しているのだ。飲食物か、暖房が必要となる。体力があるなら運動という選択肢もあつたが、いくら鈴音だろうと無理だろう。消耗しきっている。

仕方が無いか。

軽く息を吐き、それから吸い込む。肺を半ばほどまで満たして心拍を落ち着けると、誠はそれを行なつた。

肌の感覚が無い。麻痺しているのだと、鈴音は自覚していた。すでに痛覚すら無く、思考も奇妙に形を変えて一定にならない。ぐにやりと歪んだ頭の中にあるのは、ただ単純に寒いというだけだった。だから田の前の男、井ノ上誠へしがみつく。硬い胸板に顔を押しつけ、包み込む腕に成すがままとなる。

「鳳」

不意に呼ばれる。顔を上げると、自分を抱きしめる男は静かに訊いた。

「心臓に持病があつたりするか？」

「え？ いや、無いけど……」

「わかつた」

不可解な質問に、疑問が生まれて消えた。考えたくない。それだけの余裕はどこにもありはしない。思考は苦痛だった。

奇妙な暖かさを感じたのは、その時である。微弱な電流で全身の表皮を刺激するような、そんな感覚。あるいは錯覚だろうか。いや、それにしてはリアルだった。

なんだる……。

声に出でさず、咳く。あるいはのない電気に、ではない。自分自身に對して訊く、つまり自問。答えが出る前にそれも消失した。

「あの、セ」

「ん?」

顔を見上げ、別の疑問を訊く。

「彼女とかにも、こういうことした?」

「は?」

まじまじと見返される。別の熱が出てきた。顔だけが熱い。それを誤魔化し、何より悟られないようわざとらしく慌てる。

「だ、だつてセ! なんていうか、手馴れてる気が……」

「気のせいだ。彼女なんてできたことも無い」

「でも、湊つて」

口を紡ぐ。それが聞いてはならない、言わば禁忌なのだと理解した。だが、遅い。誠の表情からほんの少し、優しさとでもいづべきものが消える。

「どこで訊いた?」

「え、と……」

誤魔化せない。見つめる瞳から、逃れられない。

「……あんたが一夏と戦つたって時、シャルロットの前はあたしが付き添つてたの。あたしと、あんたの上官だつて人が

「上官?」

「ノーマッド中佐つて、そう言つてた」

誠の瞳が、驚愕に見開かれる。

「あいつが来たのか?」

小さく頷いた。若干、なぜかわからないが罪悪感が生まれる。

「注射みたいのをしてすぐに出でていったけど。そしたら寝言で、湊つて呼んでて……」「めん」

嘆息めいた吐息が聞こえる。鈴音は、自分に向けられた失望だと感じた。信頼を裏切られたのだと、誠が思つていると。だが違う。そうわかつたのは、彼が口を開いてからだった。

「湊は仲間だ」

静かに、自分を抱きしめている男の口が動く。

「仲間だった。……俺はまだそう思つてゐんだけどな

「……向こうは？」

「おずおずと訊く。間近の顔に苦笑が浮かんだ。

「わからない。死んだんだよ、もう」

一瞬、吐き気すら覚える。死んだ、と。その単語を直接、誠の口から聞いた瞬間だ。腹わたを抉られ、かき回されるように。不快感の塊が現れる。見ず知らずの人物の死を知つただけで、こうまでなる。それだけ人間の命は軽く奪え、重く喪失感を覚えるということか。そうでなければ、誠の友人だというのが原因かもしれない。

「本当は、さ」

紡がれたその先を、俯きかけた顔を僅かに上げて聞いた。

「レインジャーにはあいつが行く予定だつたんだ。俺はまだ、入隊過程を終了していなかつた。だから一足先に、あいつと他の仲間たちが……。湊の奴は、不安そうな顔するもんだから、笑つて送り出してやつたよ。けどそのすぐ後、あいつらの乗つた輸送機は撃墜された」

まるで老人のように、誠は疲労が濃く滲む吐息を漏らした。ふと抱きしめる力が強まつたと思うのは、気のせいだろうか。

「助けてやれなかつたのに、許してもらえるわけないのにな」

「助けて、井ノ上」

しがみつくように。それまでただ抱かれるだけであつた鈴音は、未だ力の回復途上にある腕で誠を掴む。硬い胸板に頭を預け、彼女は言つた。

「どうやつて助けるつてのよ。あんたの責任なんて、ビコにも無いじゃない……！ その子も、憎んでるはず無いでしょ

掠れて消え入りそうな声。喉が痛い。ひどく意識が虚ろだつた。眠つたらだめだ、そう言い聞かせる。ここで自ら意識を閉ざしてしまつたら、全てが無かつたことになるだらう。明日、目覚めてから

誠に聞いても、この男はきっとはぐらかして済ませるに違いない。それだけはしたくなかった。彼が打ち明けたのなら、残しておきたい。そうすることとで井ノ上誠の名前とでもいえるものが保てると、そう感じた。

感覚の戻り始めた足に、水滴のような感触を覚えた。膝の当たりが濡れている。ポツポツと、小ぶりの雨でも降つたかの如く。瞬きして初めて、涙が出ていたことに気付いた。

何でよ。

声に出さず、問いかける。田の前の男へ。どうして背負い込もうとするのか。プライドで片付けでいいものではない。全ての原因が自分にあると、そう思い込もうとしているかのようだ。それが無償に物悲しく、そして打ち明けてもらえただけ信頼されたというのが、異常に嬉しい。

「……そうだな」

彼は囁いた。どこか否定するような余韻を混じえて。

「ところで、鳳」

口調が変わる。それまであった奇妙な哀愁を一蹴して、いつもの声になつていた。抱きしめたまま、彼は囁つ。

「旅館に戻つたら、少しでもカルシウムを取つておけよ」

「え？」

思わず聞き返した。話題に関連性が無い。この話をこれ以上、続けたくないという表れか。それにしても次の語句は、まだ選択の余地があつたように思える。

「いや、なんて言つたかさ。友達として心配するよ、これは」

「何が？」

「だつてお前、当たつてゐに当たつてゐる感触が乏しいって。さすがに成長がどうこういうのを通り越して」

涙が枯れる。いや、引く。言われて気づいた。今、誠に抱きしめられている格好だ。それはいい。問題は鈴音の胸が、誠のみぞおちのあたりに密着していたということだ。

誠の言葉が終わらないうちに、訪れた変化は一つ。一瞬の羞恥心で顔が赤くなり、それを超える怒りが沸き上がる。無言のまま振るわれた拳がアッパー・カットとなつて彼の顎を打ち抜いた。骨に食い込む感触。満足感を得る。

「あんたねえ……」

続けようとしてそれが不毛であるのを知った。眼前で仰向けにひっくり返る青年が一人。ピクリとも動かなかつた。

「バカ」

ぱつりと呟く。意識を失つた誠の脇腹をつま先で少し小突き、潮風の寒さに震えた。盛大に溜息をついた後、とりあえずは更衣室へ向かうべくその足を進める。

海岸沿いの堤防に、その車は沈黙を崩そともせず存在していた。車種は黒のダッジネオン。プレートも制作元同様にアメリカ、ペンシルベニアのナンバーをしている。運転手の乗る左座席に男、反対の助手席に女を乗せたそれは、窓をほんの数センチだけ開けている。換気のためだろう。何本目になるのか、男のほうは煙草に火を付け、車内を副流煙で満たす。連れを気にした様子は微塵も無い。また女のほうも、普段からこういう態度に慣れているのか。眉一つ動かすこともなかつた。

男はゆつたりと煙を吐く。昼間、井ノ上誠と話した時とはまるで違う身なりで。スタンリー・ジョンキンス大尉は、かつて空を支配した戦闘機乗り達がそうであつたように、米空軍のエンブレムが縫いつけられたフライト・ジャケットとカーゴパンツを身に付けている。

「なあ、アリスト」

備え付けの灰皿に煙草の先端を落しながら、相棒へ呟く。そちらも、身なりはほとんど同じだ。違うのはスタンリーのジャケットが青基調であるのに対し、アリスト・ミラー中尉は赤がメインのものを着てているという点。

「どうしたの？」

煙たさを微塵も感じさせないはつきりした発音。実際、彼女は煙を吸つていなかった。どういう原理になつていいのか。月明かりに漂う白煙は、アリスの周囲に近づこうとしない。見えない何かに阻まれているようだ。エアカーテンでもここまででは遮断できないだろう。

相棒のお越している未知の現象へさしたる疑問も抱かず、スタンリーは言つ。

「誠の奴、あれは馬鹿なのか？ 狙つてゐるよつにしか思えないぞ」「今しがたの出来事を尋ねる。よく見れば、ダッシュボードにライフルスコープが置かれていた。通常のものよりやや大きく、バッテリーケースが付属している。暗視モード搭載の代物か。

「あの子なりの処世術だと思つけれど」

「大したもんだね。抱きしめといて、貧乳を指摘するか？」普通

「年中、飽きもせずに女の子を追いかけてるあなたとは違つて。経費がおかしな減り方してるのは、今こゝで説明してもらいたいものよ」

痛い所を突かれる。吐き捨てるように短く笑つて、煙草を吸つた。一見すると、この会話に違和感は無い。仲間の、というより年下の友人、もしくは弟のような誠の行動をはたから眺め、苦笑する兄と姉のやり取り。そんな風だった。しかし疑問点は、注意深く言葉の端々を分析することで浮き彫りとなる。

一人は、誠が鈴音に對して何といつたか知つていて。音の通る夜とはいえ、海岸から数十メートル離れる距離の会話を、聞いたことになる。人間の聽力では明らかに不可能。あるいは盗聴器の類いを誠に仕掛けていたか。昼間、そういう余裕はあつただろう。だがなぜ、仲間であるはずの彼を監視しているのか。

「あんな、アリス。男つてのは……狼なんだよ」

「なに馬鹿なこと言つてゐる。経費から風俗店のお金出すなんて、横領もいいところよ」

「おい、そんないかがわしい店に行つた覚えは無いぞ。ストリップバーで一杯やつてるだけだ」

「そのお金はどこから?..」

「それは、なんだ、」
「…領収書を部隊の貯金箱宛てにしてもらつたり」

「やつぱり経費じゃない」

額を抑え、呆れられる。

「ノーマッド中佐にバレたら、いつたいどうするの」

「大丈夫だ。あの人は生身の女になんて興味ないのさ。ありやあ、根っからの機械フェチだよ。だから俺が幾ら使おうが、支障が無いなら気にしないってことさ」

自分で言つてツボに入つたらしく。一ちらを睨むアリスを差し置いて、込み上げる笑いを堪えようともしなかつた。

「それにもしても、あの子はあなたと違つて纖細ね」

「ああ? 誰だ?」

「誠よ」

憂いを帯びた小さな溜息。弟を心配する姉のそれだつた。

「どこが纖細だよ。不器用なだけにしか見えないね」

「ええ。不器用で、纖細。あなたみたいに楽観的な生き方をすればいいのにね」

「褒め言葉として受け取つておくだ」

笑いの残滓を漂わせ、煙草を灰皿へと捩じ込む。一瞬、横田アリスの顔を窺つた。悲しげで、後ろめたそうな目をしている。

「なんて顔してんだ、相棒」

肩を叩く。後部座席を探つて紙コップと魔法瓶を出し、冷めたコヒーを一杯注ぐ。それを飲み込む。口内で煙草の後味と交わつた。この瞬間が何とも堪らない。最も、隣で憂鬱な顔があつてはそれも半減したが。

「あの子は、自分をよく知つてゐる。どれだけ危険で、どうこう」とをする必要があるのか。だからああやつて道化をやつてる

「なりきれてないけどな」

「そう。そこが駄目なの。自分が一人じゃ生きていけないって、寂しがつてるっていうことを誤魔化してるから。任務と義務を盾にして、大人みたいに振舞おうと無理してるの。子供にそんなことを強いるなんて、酷い話よ」

「どういう道であれ、選んだのはあいつ自身だ。俺達が口出しすることじゃない。自分で選んで悲観するのは、ただの腑抜けたクズだ」「一杯目を注ぎながら、スタンリーは言った。

「本当にそう思つてるの？」

黒い液体に口を付けたとき、咎めるような言葉が送られる。アリスが、軽蔑こそしないまでも疑惑を含んだ眼差しを向けていた。

「誠は選択なんてしてない。あの子は、この場所を強いられた。選べるはずの道を隠して一つしか提示しないのは、不公平で済むことじゃない。その上、後になつてから“お前が選んだ”なんて追い詰めて、これじゃあタチの悪い詐欺でしょ？」

アリスは言つ。一息に、若干のヒステリックを混じえ。おそらくはそれを自覚したのだ。無言のまま傍聴に徹し、コーヒーを啜るスタンリーへと彼女は述べる。

「……すみません、大尉。言葉が過ぎました」

大尉、と。それまでファーストネームを呼び合っていた者たちとは信じられないほど、事務的で仕事関係を意識した口調だった。

「まったくだ、ミラー中尉。感情に流されるなよ。……まあ、自覚があるならいい。お前の長所でもあるんだ」

変わらないな。

本当に告げたかったそれを、胸中へと呑くだけに留める。アリスは変わらない。過去のまま、まるで色褪せることなく存在する写真のように、ここへ存在していた。

彼女との付き合いはすでに十五年近く、だらつ。二十一歳のスタンリーが空軍へ入り、戦闘攻撃機の操縦手として配置された時から、全てが始まる。二歳年下のアリスはその後席でフライトオフィサー

を務めた。白騎士事件の直後、戦況が今より遙かに熾烈で混沌とした中東の空を、彼等は生き延びている。何事であれ、一番の苦境となりやすいのは最初だ。有力国家が通常兵器を売り始めたとき、武装勢力や弱小国家はそれに飛びつき、考えるより先に力行使した。誠が経験した現在より、遙かに危険な過去。敵も味方も無いような弱者の空を、スタンリーは忘れたことも無い。ISが存在しなければ、彼は今も空軍にいたはずだ。当然、アリスと一緒に。誤射・誤爆が当たり前の戦場において、一人は撃墜数二八を残している。現存し、生き残っている米軍パイロットの中で、この数字はトップだつた。もしあのまま時代が急変しなければ、その称号を得ないもののパイロット稼業は続いているはず。

あの頃から、アリスはこうだった。飛び抜けて優秀でありながら、自分以上に他人を庇おうとする。誰に命じられるわけでもなく。それが原因で危険な橋を渡つたのも、一度や二度ではない。それでも彼女は変わらなかつた。

人によれば、これを成長していないと見ることだろう。だが、スタンリーは違うと言い切れる。彼女は成長している。ただ自分の根底にある意義を見失つていらないだけだ。言い方をえれば、確固たる自分を持ち続けている。それがアリス・ミラーだつた。

「ともかく、アリス、あいつのことは俺達が口出しすることじやない」

「わかつてゐる。けれど……」

疲れたように額に手をやり、彼女はブロンドの髪を搔き上げる。

「やつぱり、私は軍人に向かないのかもしね。子供に銃を持たせるつていうのは、どうしても納得できないから」

「ああ、知つてゐるよ。お前は軍人より兵士に向いてる。理由は問わず、ただ死すのみつてな。いいか、アリス」

飲み干した紙コップを後部座席へ放り捨て、また煙草を取り出す。ジッパーで火をつけながら、彼は言った。

「お前は考えなくていい。俺が命じたことをそのまま実行して、撃

て。理由や善悪の追求は俺が受ける。お前はただ従えばいいんだ」ゆつたりと煙を吹かす。素知らぬ顔で。

「……告白のつもり？」

「ああ。何回目だ？」

「十七回目」

そう言ってアリスは微笑む。

「今回も駄目か」

「ご明察」

率直に美人と称せる顔へ浮かんだ悪戯っぽいそれに、自然と苦笑が漏れた。

「本当に条件は変わらないのか？」

「変わらない。あなたと私が軍にいる限り、絶対に一緒ににはならない

「理由くらい、そろそろ教えてもらいたいけどな」

「いつか教えるわ」

「そうかい」

もう一口、煙草をやる。

「面倒な女に惚れたよ、俺も」

「同情します、大尉」

互いに笑う。自分達の恋愛事情が予想以上に厄介なのだと、改めて認識し、その複雑さにおかしさがこみ上げて。

「それで」

折を見て、スタンリーは切り出した。口調が変わる。顔を出した

無感情な余韻は、軍人の姿か。

「シリバリオ・ゴスペルとかいうあれば、どうなった？」

「それに関して、ノーマッド中佐から連絡があつたわ」

アリスは言い、身をかがめる。座席の下へ手を突っ込んで、取り出したのはノートパソコン。スリープ状態でそうしてあつたらしい。開き、電源スイッチを押すとパスワード画面が表示され、手慣れた動作で打ち込む。そしてデスクトップに移行してから操作を行ない、

一つの画像ファイルを表示した。写っているのは、人型大の白い機械。ISという名をした、現代の魔物。

「これがその機体。もうヒツカム空軍基地に持ち込まれている」

「試験中の即応体勢は？」

「監視のためにAWACS（早期警戒管制機）としてE-3セントリーが二五〇〇〇フィートで同行。護衛は同基地の第一三空軍からの要請で、グアムのアンダーセン空軍基地から第三六航空団所属のF-16中隊が。即応体勢としてヒツカム空軍基地の第一九戦闘飛行隊が待機する予定になっている」

「第一九つていうと軍鶴連中か。イーグルのF型だつたな」

無言の首肯が帰る。イーグルとはかつてスタンリー自身も乗ったF-15E戦闘爆撃機、その原型となつたF-15戦闘機の愛称だつた。傑作と呼ばれた鷲は、米国だけで複数の派生型を誕生させている。F型とは、その一つであるF-15F戦闘機の指す。

ストライクイーグルと呼ばれたF-15Eは、F-15が元来持つていてる巨大な積載量を利用し、対地攻撃へ転用するために開発された。実際、それは対空武装と追加燃料となる増槽を^{ストライク}搭載してもまだ充分な余裕があつたからだ。最も、この機体は攻撃の名を冠するか否かで全く異なる。外観はほとんど大差無いのだが、その中身というと約六〇パーセントを再設計された次世代航空機。現在のところ、保有する各國ないし勢力でロシアのフランカー戦闘機と双頭を成している。

そしてF-15F、愛称をハーストイーグルという機体は、正確に言つならイーグルそのものでなくストライクイーグルが原型となつた。対地発展させた最新鋭機を、今度は制空戦闘機へ作り替えることで誕生する。コンセプト以外にE型との違いは、搭乗員が一名になつたこと、構造材質の軽量化、そしてエンジンの小型化などが挙げられた。

「そこまでしてやることかね。正直、馬鹿らしく思える」

「同感よ。けれど、事情はわかる」

「事情はな」

本来、ISはアラスカ条約により軍事転用が禁止されている。それがどれほどの効果を持ったのか、現実は言つまでもない。今回のシルバリオ・ゴスペルがそうなら、"シユバレツ・ハーゼル"と呼ばれるドイツ軍特殊部隊、さらには誠の体験したという"ブリムストーンの悲劇"を引き起こしたイギリス空軍試験部隊など、軍によるIS運用は半ば公にされた状態だ。その中で、正式に第三世代機と発表された軍用機はこれが初めてとなる。その性能を、合衆国政府は知らしめてやりたいのだろう。かつて最強の国家と呼ばれた名残か。イスラエルと組んでも一歩抜きん出た力を欲する、野心が見え隠れしていた。

「いつの時代も変わらないよ。新兵器の発表は、子供の自慢だ。新しいオモチャを手に入れて見せびらかす、ただのガキだ」

「それも同感」

と、アリスは苦笑する。

「……で、ハッキングは？」

「情報分析官がヒツカム空軍基地に向かって、結果が報告されてる。けど……」

言葉が淀んだ。続け難いことがあるのか。

「けど、なんだ？」

「ええ。……ハッキングには、エシュロン・システムの第三管理衛星。つまりNSAのものが使われてる」

エシュロン。それはNSAの誇る最大の戦力ともいえる組織の名だつた。その名の元となつたエシュロン・システムは、電子情報収集技術の結晶とも呼べる。世界中に配置された傍聴もとい盗聴施設により、その効果範囲にある全電波、つまり電話やインターネットはもちろん、電波を用いる全情報をリアルタイムで監視するというものだ。もちろん、米国が無許可でそれを配置しているわけではない。秘密裏にそういう処置を行なつた場所も存在するが、ほとんどは他国の同意の元に行われている。日本だけでも青森と沖縄にこれが存

在し、全国をカバーする形となっていた。

その中で、管理衛星とは NSA のエシュロン本部へ送られる情報整理目的の静止衛星である。総数は三。しかし第一衛星は現在のところテブリ（宇宙「ミミ」）の衝突で損傷したため、実質的に第一と第二衛星のみ。

「なるほど。つまり犯人であるうクソ女は、こっちの状況を全て掴んでるわけだ。その報告、Eメールで中佐から来たのか？」

「そうよ」

「じゃあ俺達が今ここにいることも、向こうは承知の上なんだろうな。全く、殴り殺してやりたい。逆探知は？」

「出来たけど、それでわかったのが第三衛星が使われてるってこと」

「接続元は不明か」

「違う、スタンリー。そうじゃないの」

警告するような口調。一瞬、アリスはノートパソコンを見た。ディスプレイの右下に表示されている、マイクロFFのマーク。音声認識モードのことだ。本来、マイクを接続しなければ意味が無い。だがアリスにとっては違つちじい。ほんの一瞬、暗闇の中で小さな光が迸る。青白い光だ。それはアリスの指先から飛び出てパソコンへぶつかり、次の瞬間には消えている。同時に、ディスプレイは光を失つた。電源を停止。昼間、誠がやつたのとまるで同じような現象により、電子機器は沈黙する。

スタンリーが指摘した。

「今から消したって同じだ。情報は全部筒抜け。俺達が演習中の規模を知ってるなら、向こうはその奥まで知ってる」

「そうね。けれど、篠ノ之東にプライベートな話まで聞かれるのが嫌なの」

「さっきまでプライベートの極みみたいな話を……いや、あれはパソコン使う前か？」

「冷やかすように笑う。

「スタンリー」

「ああ、悪い。ただの冗談」

煙草を灰皿に押しつけ、そう言った。笑いを混じえて。それが続かなかつた。気付いたとき、真横にあつたはずの顔が一センチ先にある。それでも反応の余地はあつた。しかし出来ない。脳も体も痺していた。頭がシートへ押し付けられる。唇を塞ぐもつ一つの唇。動搖するより先に、相手の舌が口内へと入つてくる。妙に甘つたるく思えた。

約十秒。そしてアリスの唇が離れた。

「じひやじひやうるさいからよ」

そつと囁いてくる。赤く染まつた頬に、愛おしさを抱いた。腕を掴もうと伸ばした手が優しく留められる。そうして乗り出していた身体は離れていた。

「なあ、一つ教えてくれ」

ぽんやりした頭で訊く。

「この先つて、つまりこの車の中で」

頬に衝撃。平手を食らつ。効果のほどは絶大。冷水を浴びたよう

に頭が冷めた。

「目は覚めた?」

「バツチリと」

「それじゃ仕事の続きを」

先ほどまでの口調に戻る。

「逆探知は成功した。それでわかつたのは、第三監視衛星が間接的

じゃなく直接的に操作されてるといつこと」

「……何?」

報告が、理解の範疇を通り過ぎた。

「直接的?」

「そう。つまり簡単に言えば、彼女は私たちの知識の枠を軽く数世紀くらい飛び越えた通信機器で衛星を操作してるのか、自分から宇宙空間まで足を伸ばして衛星をパソコン感覚で使つてゐつて」と。

「……どうする?」

「俺に訊くな」

額を抑えた。本当に頭が痛くなりそうだ。むしろ笑いたくもなる。「前者は考えたくない。あのクソったれが運動にでも目覚めたんなら、後者のほうが遙かに現実的だ」

「宇宙服を着てハッキング?」

可笑しそうに言つ。

「……お前、今のそれは素で言つただろ」

相棒の珍しく単純な思考に新鮮味を感じながらも、呆れた風を装つた。アリスは首を傾げる。

「何か変なこと言つた?」

「どびつきり間抜けな発言を。お前は眞面目なくせに、どびつてこういう所で抜けてるんだろうな。ISは本来、何の名目で開発された?」

「本来」

氣付いたらしい。目の色が変わる。

「宇宙空間を想定したマルチフォーム・スーツ……」

「そして暫定ハッキング犯は、ISのコアを作れる個人。これが全部、コンウェーたちの計画ならハズレだが、まず有り得ない。こいつはフルハウスの揃つた手札だよ。中佐はハッキングに対処したのか?」

「いえ、私は報告を受けただけだから」

「そうか」

考え込む。伸ばしてもいらない顎鬚を撫でるよに、手をやつた。数秒、小さく唸り、

「アリス、少し出かけてくる」

「え?」

聞き返した時、すでにスタンリーはドアを空けて外界へと赴いていた。その手がある物体を握っている。チエーンで繋がったキー ホルダー、いやドッグタグ。ただし普通のものより幾らか厚みがある。「出かけるつて、大尉!」

「ちょっと様子を見てくるだけだ」

「どこによ」

「ヒツカム空軍基地」

スタンリーは笑う。その目は、思いついた策略を自慢するかのように、一瞬だけ光った。

旅館の一室で目を覚めした誠は、いよいよ頻繁になつてきた錯覚を慣れたように振り払つた。見慣れない天井も、いつもと違う和式の布団も、数秒後には自分の状況を再認識して気にすることがない。朝日が差し込んでいる。充電してあつた携帯電話を見ると、ほんの少しの驚愕が沸き立つた。午前六時。いつもより一時間ほど寝過ぎてしている。

疲れているのだろうか。考えてから、それもそのはずと納得する。鈴音に気絶させられ、意識が戻つたのは十分後。冷えた身体を引き摺つて旅館までたどり着き、一度目の風呂へ入つてようやく寝た。髪の毛を搔きながらのそのそと起き上がり、あくびを一つ。隣を見る。すると珍しい光景があつた。いつもなら、つまり学園ならまだ熟睡中であるはずの一夏が、そこにいない。布団はもぬけの殻で、簡素に置まっていた。笄やラウラを始め誰かが起に来たのなら、まづ間違いなく騒いでいたはず。それならば誠も目を覚ましただろう。だがそうでないのだから、結論から言つて一夏が自分で起きたとなる。

「雨でも降るかな」

寝惚け眼で咳き、とりあえずは頭のもやを払うため洗面台へと向かつた。冷たく透き通つた流水をすくつて顔を洗う。それを二回。一度目で目覚まし、あとの一回で目ヤニを落とす。それから持参の歯ブラシで口内を洗浄し、水でゆすぐ。備品のタオルで拭い、息をついた。

浴衣とはいえ、朝起きたときに和服というのは悪くない。生地が薄いため早朝特有の冷氣をよく感じられて、どこか気だるい眠気も姿を隠す。難点はポケットが無いため、煙草とライターを持ち歩けないことか。部屋には灰皿があつたが、しかし吸殻を残すわけにはいかない。教師と生徒の部屋割りは、旅館側も把握しているはずだ。

とすると、生徒の部屋からそんなものが見つかった場合、どうなるかは田に見えている。だから昨夜も外で吸つたのだ。引率の教師陣の田を搔い潜つて煙草を持ち歩き、隠れて一服するところのは骨が折れる。

「井ノ上君、起きてる?」

乱雑なノックと共にそんな声がやつて來た。ビトなぐ、といつより明らかに不機嫌な響き。

「起きてるよ」

やや声量を上げる。すると扉が開き、仏頂面をした谷本癒子が顔を出した。

「なんか用か?」

「当たり前でしょ。織斑先生から伝言。専用機持ちは特別講習をするから、一時間後に一階のホールへ集合するよ!」

「特別講習、ね」

事前連絡に無いはずの予定を、小さく繰り返す。むろんのこと、アサルトスースは持つてきている。それ自体は持参するよ!にとの連絡があった。ただし使う機会が無いだろ!とたかをくくつていたのも事実。これには出発前、鈴音の豪語したせ台詞が関わっていた。曰く、こんなのは非常事態の備えでどつかの馬鹿が戦争でもしない限り使わない、とのこと。

今頃、向こうにも特別講習の連絡は伝わつただろ。一体どんな顔をしているか、見てみたい気もする。

「わかった。ありがとう、谷本」

「別に……」

そっぽを向かれた。いつになく刺々しい。

「何で怒つて」

言葉を区切つた。昨夜、自身の起こした行動を思い返したからだ。原因はあれと見て間違いない。不機嫌は当然だつた。彼女を傷ついているのだから。

「谷本、悪かった」

「……遅いわよ」

小さく、呟くような返事。秘められた重みを確かめるように誠は沈黙し、深い息を吐く。

「そうだな。……少し、時間もらえるか?」

頷きが返る。

「ありがとう。そっちで

窓際を指さす。そこだけ洋風で、一つのテーブルにチエアが二つある。

「待つててくれ。今、緑茶入れるから」

今度は何の返答も無い。代わりに行動で示された。布団脇を通り抜け、癒子は窓の方に向かう。

それを横目に見てから、洗面所隣の給水器に近づく。置かれている急須へ茶葉を開け、熱湯を注いだ。湯のみを一つ、取り出して茶を注ぐと、ほのかな草の心地よい香が鼻腔をくすぐった。これで茶柱でも出でてくれれば勇気付けられるが、と思ってから、自分が心底、他人頼みな生き方をしてるのだと嫌気が指す。

茶柱が景気の良いことの代表格ならば、それは転じて天運に任せるようなものだ。極端な話を言えば、およそ大勢の人間が持つ信仰と同じ。信じる者は救われると信じ、願う。

馬鹿な話だ。

湯のみを手に取り、歩きながら思う。神に祈つて救われるのなら、現世の努力など必要でない。どれほどの幸運も、もしくは悪運や悪行も、祈るだけで手に入り救われるとは、努力どころか人生そのものを作るか否かも不明な存在へ委ねることだ。自身もキリスト教徒でありながら、誠はそう考える。信仰の否定ではない。彼はただ、独自の解釈に基づいて神を信仰していた。

神は存在したのだろう。塵から人という存在を創造したのだろうと彼は思う。だが、それはあくまで過去の物語ないし眞実に過ぎない。現在の眞実では無く、いつか遠い昔に実在した話だ。つまるところ、今の世界に神はない。いや、存在 자체は人の理解が遙かに

及ばない所にあるのかもしないが、少なくともイエス・キリストは死んだ。ならばそのキリストに感謝の念を祈ることはあっても、自分に何かを望むというのはお門違いだらう。神を信じることは、救いを求める」ことではない。ただ在ったことなのだと認識し、歴史の一部として記憶することだ。これが井ノ上誠の持つ、宗教論とも称する解釈であり、信仰。

この理念に基づくならば、誠にとつて神とは歴史上の人物もしくは存在でしかない。つまりどれほど些細な救済を望むこともあります、運と神とは別物と割り切つているということだ。自分の決断には、自分で終止符を打たなければならぬ。癒子を傷つけたことも、誠自身が今まで行なつた選択も、そう言つた点では等しく同価値だ。

「……」

互いに沈黙したまま、癒子の田の前へ湯のみを置く。そして向き合う席に腰掛けた。

「謝つてすむことじやないのは、わかつてゐる。でも、谷本、悪かつた」

返事は無い。重い鈍痛が肺を締め付ける、そんな気がした。

「……井ノ上君はさ」

俯いたまま、彼女は口を開く。

「昨日のこと、どこまで本氣だったの？」

「どこまでつてのは」

「とぼけないで」

鋭い語氣。誠が口を噤む。

「そいやつて誤魔化さなくとも、意味はわかるでしょ

「……ああ」

口が乾く。僅かに残つた唾液がやけに苦かった。やむを得ず湯のみを取り、熱い緑茶を啜る。

「どこまでが本気だったかは、正直言つてわからない。混乱していたのも事実だし、お前をこの学園で一番に信頼してゐるのも事実だか

「ら

「そう……」

間が空く。再び訪れた沈黙は、現実より数倍は長く思える。窓の外、海鳥の鳴き声が聞こえなければ、時が停滞しているとも言えるほどに。

「それじゃあ、さ」

癒子が言つ。

「井之上君は、あたしのことをどう思つてるの？」

「……どう、か」

繰り返して囁く。その返事に、何と答えたらよかつたのか。誠にはこれが差し伸べられた手にも思えた。彼女へ好意を抱いているのは間違いない。それは否定し難く、嘘偽りの無い真実だ。だが、それは友人の域を越えているのだろうか。

もしここで頷けば、誠自身は救われる。より強い支えを持ち、その支えを守るという使命を与えられるからだ。軍や政府の命令を差し置き、井ノ上誠が個人として力行使しよつと思える目的ができる。ただ従うのでなく自分の意思で守るというのは、この上なく幸福なことだ。今の彼に、優麗にして甘美な蜜に思えるほど、魅惑的な決断である。それが谷本癒子に自分と関係を持ち、同じ道を強いることになるとしても。彼女に降りかかるであろう危険を考えても、四対六で幸福が勝る。

しかしそれは許されることなのか。もし、癒子への好意が友人としてのものだつたとして、誠はまた、それも昨夜とは比べ物にならないほど彼女を傷つけることになる。人として、決して認可されではない所業だ。

「俺は」

震える声を発する。わからないでは、終わらせることができない。人間としてそんな答えをしてはならない。そう信じ、思い込んでいたとも言えた。妄想的なまでに尊厳を重んじる。あるいは妄執か。だが続けることはできなかつた。兵士としての本能、あるいは第六感。そう説明して信じる人間がどれほどいるだろう。ともかく誠

を突き動かし、窓越しに上空へと目を向けさせたのはそういうものだつた。科学的に立証されない、生物が持つ不可思議な能力。何かが来る。欠片ほどの証拠も無しに、確信した。この世に存在してはならないものが、ここに来る。

「谷本、伏せろ」

声は異常に落ち着いていた。身体の認識に脳が追いついていない。背後、窓際に置かれた私物のバッグへ駆ける。旅行用のそれはすでに半分開いてあって、乱雑に突っ込んだ手が今に限り求めてやまない物質を掴んだ。無骨なシグと九ミリ径パラベラム弾を満載したマガジンを一本。押し込み、スライドを引いて初弾を装填。

あるいはブラックウイドウを起動するというのもあった。しかし、向こうの正体が不明である以上、得策とは言い難い。間違いなくやつてくるのは危険そのものだが、目的がわかつていらない。ブラックウイドウは起動と同時にステルスマードを使えない。若干のロスターイムがどうしても生じてしまうため、その間は確実にレーダーへ捉えられる。空から降つてくるというのなら、相手は生身で無いだろう。ISAか、それに匹敵する何か。状況がはつきりとしない以上、わざわざ姿を晒すことはない。

「井ノ上君

癒子が発した瞬間、誠は彼女の元へと近づき、頭部を庇うように左腕で抱きかかえる。そしてシグの銃身で叩くように窓のロックを解き、開け放つた。窓から吹き込むのは潮風。隔たりは無くなつた。上空へシグを向ける。拳銃弾の短い有効射程と威力で、どれほど効果があるのか。

「なにして

「黙つてろ」

有無を言わさぬ物言い。ただ一言、そこに秘められた本物の殺意と憎悪で癒子を沈黙させた。

雲が漂う空。その合間にある青空へ、何かが光つた。それは瞬く間に点となり、大きさを増してゆく。高速の落下物、いや飛来物

はまっすぐこちらに向かっているようだった。セイフティを確認。ロックされていない。指先がトリガーへと触れた。速度から考えて、地表に衝突するまで三秒。それほどの速度でぶつかり、被害はどうなるのか。この旅館が無事に済むとは思えない。

脳から思考することによつて命じ、ブランクワイドウを部分展開。昨夜、鈴音を守るためにやつたのと同じ、シールドのみの起動。自身と癒子を包み込む。直撃されでは一溜りも無いが、でなければ多少はマシになる。それでも無いよりは、という程度だが。

ふと昨日の行動がどれほどの失態だったかと思う。部分展開とは言え、レーダーに捉えられる実体を出現させるとは。確かに鈴音は生命の危機にあり、また自分の責任であつた。だが、言い訳にはならない。もっと冷静に対応することもできたはずだ。

来る。

静かな確信。飛来物は速度を緩めることなく誠たちの方へと向かい、だが直撃とはならなかつた。どこか別の、すぐ近くに落ちる。まずい。瞬時に悟る。衝撃波がここに来るだろ。シグを持つたまま、両腕で癒子を屈ませて庇う。

「……？」

衝突から一秒が過ぎた。何も起こらない。あの飛来物自体が幻だつたのか。そう思えるほど、情景は微動だに変化しなかつた。いや、幻なはずがない。網膜にブランクワイドウの短距離レーダーを投影させる。すると光点が一つ。ここから百と数十メートル西に示されていた。

「そうか」

一人、悟る。飛来物の正体を。シグのセイフティをかけ、立ち上がりつた。

「谷本、悪い。部屋に戻つてろ」

「井ノ上君」

「いいから、行け。後で話す。さつきの話も含めて、絶対に答える。けど今は無理だ」

言いながら、胸中では怒りが沸き立っていた。特別講習。その意味を理解して。

『俺達は何も行動しない』

スタンリーの言葉が蘇る。だが彼はいつも言つた。

『Ask, and it shall be given you. (求めよ、さらば与えられん)』

『えられるとは、一体何を指したのか。もしあの大尉がこの状況を予想し、あるいはこうなると事前に承知していたのなら。これは自分に与えられた好機だろうかと、誠は考えた。確かにこれは、求めてやまなかつた事態である。

アサルトスーツに包まれた両足が土を踏む。先導するのは織斑千冬と山田真耶。それに続き、誠を含め六人の生徒。一夏、セシリ亞と鈴音、そしてラウラとシャルロット。この一行で最後尾を歩く誠は、スーツに備え付けられたホルスターと、そこに収まっているシグの感触を心地よく思う。学園に来てから、この姿で拳銃を持ち歩くのは初めてだった。入り組んだ市街ならともかく、ISが普及した学園ならばブラックウイドウを用いればいい。いや、それ以前に何らかの脅威があれば教師陣によつて対処されるだろう。実質、武装の必要は無いに等しい。

では今回。これは教師側を信用しないという誠の覚悟だ。奴がいる。ただし殺すかどうかはわからない。どちらにしてもそういう準備が必要だと、彼は考えていた。

「なに怖い顔してんの」

「ん?」

気付くと鈴音が隣にいた。初めて見るISスーツ姿で。買い物の時と同じく、セシリ亞と一緒にいる。よほど仲が良いのか。

「おまけにそんな物まで持つてきてるし」

視線でシグを示してくる。

「一応聞いておきたいけど、空よね？」

「いや」

首を振つて静かに否定。

「そんじや、アレでしょ。モーテルガン」

「あなた、それ本氣で言つてます?」

セシリ亞が言つ。

「だつてさ、じゃあ何で銃なんて持つてきんのって話じやん」

「銃どころかエリを持つてるわたくし達が言つても、あまり問題の
よつには聞こえませんけれどね」

「身も蓋もないこと言わないでよ。でしょ、井ノ上?」「え?」

名前を呼ばれ、気付く。

「ああ、そうだな。同感だ」

生返事。こちらを非難する訝しげな目付きが来るのは必然だつた。

「聞いてなかつたでしょ」

「いや、聞いてたぞ」

「じゃあどう思う?」

「それは、な。まあ、いいと思つよ」

「聞いてなかつたんですね」

やれやれと肩を竦め、セシリ亞が述べた。当たり障りの無い返答
のつもりが、逆に墓穴を掘つたらしい。

「また何か企んでます?」

「そういうわけじゃない」

先日の模擬戦のことなのは間違いない。否定はしたが、しかし口
だけになるという感は否めなかつた。この先、今ここで引き返さな
かつた場合、彼女たちを再び巻き込むことになる。生命に関わると
は思えないが、それでも危険へ引き摺り込むだらう。

だが、どこかでこう考える自分がいることも誠は知つていた。そ
れがどうした、と。この場の全員でないにしろ、鈴音やセシリ亞が
友人であることは認めざるを得ない。では友人は味方の同義語とな

るかというと、必ずしもそうではなかつた。何らかの形で国同士が敵対した場合、個人の友愛など関係無しに状況は覆る。ならば彼女たちが学園在学中に命を落とした場合、どうなるだろ。米国内であるなら証拠を容易く隠せるものの、IS学園では難しい。となれば、交渉の席に移る。これも形ばかりのはずだ。個人の暴走によるIS操縦者の損失。言つてみれば、勝手に持ち出した他国の核兵器発射コードを道に落としたというような、馬鹿げて、それ以上に重要な失態。最悪、戦争状態になりかねない。

そこが好機となりえるかもしね、誠が鈴音たちの危険を顧みない考えを浮かばせるきっかけでもある。操縦者の損失は、ISの損失だ。量産機ならまだしも、ここにいるのはどれも個人特化された専用機持ち。代用が容易く見つかるとは思えない。そしてISは一機で一個軍に匹敵する。言い換えれば、それはただの少女を殺すことで最低でも一個軍と同等の戦力を削ぎ取れるということ。

「こういうことか？」

ふと、スタンリー・ジェンキンスを思い出す。彼はそういう結果を望んで、わざと思わせぶりな表現で述べ、今この場に誠がシグを携行するよう仕向けたのか。いや考え過ぎだろうと思つものの、完全には否定できない。

スタンリーは友人だが、根っからの軍人だ。その相棒、アリス・ミラーも同じと言えた。特にスタンリーの方は、いざというときに仲間を切り捨てることができる。例外は唯一、アリスくらいのものだ。そして軍人とは総じて国家の手足。IS登場によつて世界の正義たる立場を失つたアメリカは、力を取り戻そうと躍起になつている。そこに持ち込まれる複数のIS操縦者の死亡。つまり他国が力を失つた証拠は、合衆国を強気にするだろ。その上での戦争状態、勝つ見込みは充分にある。そういう状況が誠一人の犠牲で手に入るのなら、安いどころの話ではない。鴨が葱どころか具材と鍋を抱えてやつて来る、そんなものだ。

「鳳、オルコット」

呼びかけは、誠の意図したものではなかつた。彼は一人の名前を呼びつつ、内心では動搖する。何を言い出すつもりかと。その先に続く言葉はわかつてゐたが、それでも口が止まつてはくれない。

「もし俺が馬鹿なことしたら、とりあえず逃げてくれ

「……はあ？」

一拍置かれた鈴音の声。秘められた言葉は察するまでも無い。またよくわからんことを何を言い出した、と語つてゐる。口には出さないが、セシリ亞も同様。

「井ノ上、あんた一体

「全員、静かにしろ」

冷水のような聲音が響きわたる。織斑千冬の一言は、鈴音を黙らせるのに充分な威力を持つてゐた。旅館から十数分で到着したこの場所は、周囲を覆う森林の一箇所だけ失われた空間。小川沿いに海へ向かう途中の空き地。そこには先客がいた。誠の想像した人物に近いまでも、しかし全く異なる少女が一人。

「篠ノ之？」

呴く。佇む筈はどこか後ろめたそうな顔をして、こちらと視線を合わせようとはしない。千冬が彼女へと一瞥を向け、続ける。

「今回の特別講習は、急遽、今朝になつて決定したことだ。本来、臨海学校の予定には組み込まれていない。だがそれを考へても

「堅苦しいのはそのへんにしどこうよ」

あつけからんとした、ほのかに漂う緊張感とおよそ無縁であるような響き。その人物は不意に現れた。千冬と生徒たちの間に、割つて入る形で。小柄な体躯に常に微笑んでいるような柔らかい目は、だが決して安心感を得られはしない。頭に着けた兔の耳も、その風貌をより一層に場違いと思わせる意外の効果はなかつた。

「せつかく東さんから大発表があるんだから、もっと楽しく行こうよ、ちーちゃん」

「……」

千冬が黙る。邪氣の無い、穏やかな聲音で言われて。

「束、つて……」

鈴音が独り言のように呟いていた。いや、それは実際、独り言だったのだ。この場にあるはずの無い、自分たちとは明らかに格の違うはずの存在を曰にして、それが現実なのだと認識するのは時間が必要する。篠ノ之束はそういう存在の一つだった。

ただ一人、妹である篠を除き、この場にいる全員が篠ノ之束を見ていた。そのほとんどは非現実的な遭遇を認めようとして、惚けた眼差しを向ける。だからこそだろう。束はおそらく、自身へと向けられた別の視線に気付いたのだ。明白でただ一片の否定すら行えない殺意に射抜かれ、それを無視するが如く受け流し、井ノ上誠と視線を合わせた。

「ふうん……」

持ち合わせる温厚さに変化は無く、束は囁くよじた声を漏らす。

「君が一人目だね？」

続く言葉を聞いたとき、その感覚は白昼夢といくに相應しかつた。それまで数メートルの距離があつたはずの天才は今、誠の眼前へと来て彼を見上げている。

駄目だ。

今朝、旅館の部屋で覚えたものと同質かつそれ以上の確信を持つて、直感する。この女は存在するべきではない。この世に在つて良い者ではない、と。誠の全神経、細胞の一片に至るまでが警報を鳴らしている。この女は、殺さなければならない。今すぐにでも。

「井ノ上誠つて言つたつけ。面白い身体してるね、君」

微笑が深くなる。知つているぞ、と。そう告げられている気がした。脅迫の様子は微塵もなく、ただ事実を知つていると。篠ノ之束はそう言つている。

「自分では至つて常人だと思つてますがね」

「謙遜することないよ。だつて君、下手な戦闘機くらいなら交換できそうだもん。例えばさ、ハーストイーグルくらいなら君一人と喜んで交換してくれるんじゃないかな？」

「……そういう提案をしたことは無いので、答えるに答えられませんよ」

「これは挑発だ。安い、子供じみた行動でこちらの出方を伺つてい
る。乗つたほうが負けるとは誰の目にも明らかだ。しかし、

「そつか。そういうえばさ」

束は続ける。口調も態度も、まるで変えずに。楽しげに言つ。じ
つのところ、彼女は楽しんでいるのだろうか。

「ハーストイーグルつて、あれを設計した人の名前、君に似てなか
つた？ 似たような名前してたと思うんだけどなあ

「そうでしょうね。俺の親父ですから」

「ああ、やっぱり。そのお父さん、今は」

あらゆる事象に禁忌とされる不可侵領域が設けられるように、こ
れは誠にとつてその一つだつた。彼はその瞬間、全力で自制心を呼
び覚まそうする。しかし根深く住み着いた本能へ、理性が立ち向か
える域には限界があつた。意図するより早く誠の右手は動き、腰の
ホルスターへと走つてシグを抜き取り、銃口を束へと突きつけてい
る。

「親父は死んだよ」

怒声より一步手前という口調で告げ、ハンマーを引く。ダブルア
クションのシグはそうしなくとも撃てるが、これには一つの理由が
あつた。

一つは脅迫。銃という、見方によつては人類史上最凶の大量破壊
兵器は、剣やナイフと違い外見的にその威力を連想させることが難
しい。故に撃鉄を引くというのはこちらが本気であるのだとわから
せる、一番手つ取り早い方法であつた。これに効果なしと判断した
場合、続く手は威嚇射撃か、危険の少ない手足もしくは下腹を撃つ
こと。

一つ目は、誠の心情が大きく関わる。より少ない力で、素早く、
確実に対象の命を終わらせてやりたい。それにはハンマー一つ、起
こすために引き金へかける力も煩わしかつた。

「そつか」

束は笑い、一言を述べる。突きつけられた拳銃を、だからどうじたと跳ね除けるように。

「井ノ上

「待つてよ、ちーちゃん」

飛びかかる寸前といえた千冬を、束が制した。

「久しぶりにラボの外に出たんだからさ、もつちよつと話させてくれないかな？」

「だが

「大丈夫だよ。この子は殺せない」

片眉が吊り上がる。今この女は何と言つた、と。わかっているはずの言葉を改めて認識すべく、誠は自問した。

「殺さない理由があるか？ 篠ノ之束」

「無いね。理由なんて、君には履いて捨てるくらいあるんじゃないかな。手つ取り早く済ませたいなら、敵討ちとかいいよね。お父さんだけじゃなくて、いろんな人が当てはまるでしょ？」

「そうだ」

引き金を絞る。まだ遊びがあつた。それでも突きつけられているほうが死の一歩手前にいることへ、変わりはない。だが束は笑つたままだ。

「君は友達が多いみたいだからね、誠君。今と昔でまったく違うけど、たくさん友達がいるよね。特に君と似たような人達がたくさんいる」

「何が言いたい？」

「質問だよ。ただの知的好奇心つてやつ。そのせいで、君は殺したことでも殺せない。君はさ、誠君、どっちの側なのかな？」

その意味は、恐るべき速さで誠の脳髄へと直接に伝わつた。彼女がどういつ意図をもつてしてこれを訊くのか。真意は何なのか。それら全てが伝わり、理解したその瞬間、彼は引き金を完全に絞つた。鼓膜を打ち、脊髄を震わせる破裂音。これまで幾度となく味わつ

たはずのそれが、いつもより盛大で激しく響き、そしてより一層の物悲しげな余韻を残す。排出され回転しながら宙を舞う薬莢が、地上に落ちた時に小さな金属音を奏でた。一人の人間の死を物語る訃報。そうなるはずだった。

「これが答えてことでいいの？」

変わらない声音。笑いかけてくる響きで、篠ノ之束は言う。その眉間から二センチほど離れた空中に、回転しながら立ち止まる弾丸があつた。

「だから言つたのに。君が殺したいとかそういうのを置いといて、物理的に殺せないの？」

言葉が終わると同時に、弾丸は回転するのを終えると地面に落ちた。殺人兵器の名残すらない、ただの金属片として。

「……」

無言のまま、誠はさらに撃ち込んだ。立て続けに五回、銃声が破裂する。至近距離の発砲炎と立ち昇る硝煙に、一時的だが視力が弱まつた。

「気はすんだ？」

霞がかつた視界の奥で、その声は消えない。五発分の金属が音を立てて落ちる。

「いや、もう一度だ」

誠は述べ、次の手を行なう。シグをさらに突き出し、束の額へ触れるか触れないかの位置まで銃口を近づける。彼女が何らかのシールドを張っているのは間違いない。ならば、と考えたのだ。そのシールドの内側へ入れば、殺せるのではないか。

「やめといたほうがいいよ？ 無駄弾どころか無駄死するから」「弾が跳ね返るとでも言いたいか？」

「うん。それに近いね」

愉快を体現した微笑み。束が続ける。

「君はさ、きっとこのシールドはある一定範囲に張られていて、外部から来る攻撃を止めると思ったんでしょう？ だからこうやって、

明らかに内側であるはずの距離まで銃口を持ってきた。けど残念だね、誠君。これは外部から来る攻撃を止めるんじゃなくて、一定範囲に入ってきた攻撃を止めるんだよ。意味はわかるよね？」

「……つまり、内側となつた時点で防護壁。だから破ることはできない。あんたが自分の意思で解除しない以上、銃だろうがナイフだろうが、あんたに傷一つ付けられない」

「そう。さすが頭が良いね」

「撃つたらどうなる？」

「君が危険だよ、ものすゞく。弾丸は発射されると同時に前方へ動くことができなくなつて、この距離だと発砲炎も防がれる。弾丸が止まつても、炎は銃身の中を縦横無尽に駆け回つて温度を上げ、最悪の場合、弾倉に残つてゐる弾丸を全て爆発させちゃうから。そうなつた場合、運が良くても右手くらゝは諦めもらわないとだね。」

「信じる？」

「さあな」

両者共に動くことがない。その周囲を取り巻く人々も。

束の言葉は、半信半疑といった程度に誠を迷わせた。彼女がストレートに忠告を与えるとは思えない。束は全てを知つてゐる。あるいは当事者である誠以上に。ならば始末したいと思つてゐるはずだ。そう考えるのが至極妥当。そうでなかつた場合。つまりこの言葉が真実であつたのなら、理由は別に考えられる。束が誠を利用したいと思つてゐるのなら、この忠告は確かなものだ。

利用されるくらいなら……。

ふつふつと怨念の如き思惑が沸き上がる。この女にかき乱され、踊らされるのなら、今ここで賭けに出て死んだほうがマシだ。それだけの価値はある。

「井ノ上」

押し殺された情念を秘める、第三者の声。同時にシグを構えた右手首が掴まれた。鳳鈴音の手によつて。

「もうやめときなさいよ」

握力が強まる。鈴音の頬を伝う冷や汗が見て取れた。

「邪魔するな。お前には関係の無い話だ」

「大アリよ」

ぐつ、とその顔が近づく。息を潜め、一人にだけ聞こえる声量で彼女は告げた。

「ここに来る前、癒子と約束してんの。あんたが馬鹿なことしたら止めてくれって、言われてんのよ。その意味、わからないなんて抜かすあんたじやないでしょ」

今朝のことか。

聞きながら、誠は冷静に鈴音の言う事を把握する。束が乗つてきたであろうあの飛来物、癒子は直接に見ていない。ただ、あの場の雰囲気で察したのだろう。自分が伝えた特別講習に何かがあるのだと。

「昨日の夜といい、これといい、どれだけ傷つける気よ。一夏以上の馬鹿になりたいわけ？」

横目に鈴音を見る。それから束へと視線を移した。脅しているはずの女は、やはり笑っている。

静かに、呼吸を繰り返した。腹部に溜まつた空気を吐き出す度、銃を下ろせと言い聞かせる。ようやく腕が従つたのは、十秒ほどを過ぎた頃だった。右腕は脱力し、標的を失つたシグをホルスターへ収めるのがやつと。同時に鈴音の手が離れる。

「……よかつたね、誠君。やっぱり良い友達を持つてるよ、君」

束は笑い、肩越しに千冬へと告げた。

「ねえ、ちーちゃん。この子、別に悪気があつたわけじゃないからさ。不問にしてあげてよ。いいでしょ？」

「……ああ」

釈然としない様子で、担任教諭は頷く。そのやり取りを眺めつつ、誠は隣にいる少女へそつと囁いた。

「悪い、鳳。迷惑をかけた」

「まったくよ。下手したらあたしが撃たれるんじゃないかと、冷や

冷やしたわ

苦笑と共に言われる。

「……すまない」

もう一度、感謝と謝罪を五分五分ほどの心境で頭を下げる。そして踵を返しかけた。ここにはもう用が無い。そう思い込んで。しかし、

「帰っちゃうの？」

背後より、再び束が言う。

「あなたの顔をいつまでも見ていたいとは、お世辞にも言えないんですよ」

「それは残念。君のこと、けつこう氣に入ってるのに。けども、もうちょっとと居た方がいいかもしねいよ。大発表って言つたでしょ」

「何？」

振り返る。全員が束を見ていた。注目を集めの張本人はと黙り、わざとらしく胸を張つて、笄の方へと歩いてゆく。

「それじゃあ皆さん、お待たせしました！」

無駄に威勢よく、そう叫ぶ。それと同時に、集められた生徒、教員の中心地點。この場にいる全員が見慣れているであろう光が進る。白い、量子変換の輝きが。

「……冗談だろ？」「うう

我知らず、誠は咳く。光の中心、形成されてゆく一個の兵器を見つめて。人体の要所のみを覆う装甲。それは赤、いや紅の光沢を有し、金属には不相応なほどの艶を醸し出していた。誰しもがわかる。それはISなのだと。そして理解する。自分たちが知っているISの知識が、篠ノ之束の足元にも及んでいなかつた。努力を踏み躡るなど、そんな話ではない。無意味だったと、開発者たち自身が悟り、己を失望させる。そうさせるだけの威圧感、あるいは風格とも呼べるものを、紅の機体は備えていた。

「即时万能対応型、第四世代IS。機体名、紅椿。あかつばき……この機体はね、篠ノ之束が最後に作るISで、笄ちゃんへのプレゼント」

「 篓……？」

本当は、その名前が出てくるのをどこかでわかつっていた。以前、手合させをしたときに見た籓の顔が蘇る。

『私は、力が欲しい』

凛とした、決意を定めている者の瞳でそう告げた彼女は、今この場において、紅椿と呼ばれた機体に近づく。その装甲を食い入るようを見つめ、そっと手を触れた。自分が力を手にした瞬間を、じつと享受するように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517u/>

インフィニット・ストラatos 鏡映しのイレギュラー

2011年10月6日15時09分発行